

古義真言宗管長 池田密雄 下  
高野山金剛寺主座



# 滿鮮教會誌

昭和四年十月二十五日 発行

和歌山県伊都郡高野山

古義真言宗々務所

編纂者 草繫 全宜

発行者 吉川 法城

佛下至等次慈惠少之御輝進也其期  
生此岬江如父母如記如志不如此  
新此輝之山高野山古義真言宗々務所  
昭和四年十月二十五日 発行



聖公會全港區青年會和山女校聯合籌款晚宴



高野山女校校長  
久野雅子



古川義典  
大川憲一



（前列左起）  
 全港區青年會  
 主席 李煥行  
 副主席 李煥行  
 全港區青年會  
 秘書 李煥行  
 全港區青年會  
 司理 李煥行  
 全港區青年會  
 司理 李煥行  
 全港區青年會  
 司理 李煥行  
 全港區青年會  
 司理 李煥行



師教開道全鮮朝

序

吾宗の開教線は北海道、臺灣、朝鮮、樺太其他海外の諸邦に及び寺院教育の分布及び教化の實績に於て他に譲らざる地歩を占め來りたるは偏へに宗祖大師の靈德偉大にして其感化の普及せる賜なりと雖も抑亦た小出、柳井津、田村諸師の如き開教の元勳其外幾多の開教師の献身的努力の効を認めざるべからず。此の狀勢を以てせば教勢擴張の前途甚だ有望なりとす。然れども一面より之を見れば從來の開教方針が國家の殖民政策に追隨し來りしため、今尙移住同胞を對象とする布教の範圍に局限し、新附の同胞其他に對する教化施設に於て偏りざる所あるは開拓布教の意我を全ふするもの言へば吾徒は吾宗團體の經濟關係に於て止むなき歸結なりとせんも、此の點に於て外教の傳道方針及其宣教會の機轉的活動の事跡は吾徒の取つて以て範とし將來の開教經營上に一大刷新を加へて滿全の成果を期すべきなり。今や内に外に到る所精神文化の作興を激勵し、向ふ所佛教信心の緊要を絶叫す、吾徒は退嬰保守の風を改め斷起一番社會的に將來開教地に進出活躍すべきの秋に非ずや、余が同僚たる草壁全官部長は本夏の頃滿鮮地方に於ける吾宗の教勢及寺院教育所及實狀を調査のため錫を該地に飛ばし五旬に亘るの間に於て巨細に研鑽の功を終へ歸山の後其の見聞せし事項を記述し、此の滿鮮教會誌を編纂せり余之を見て向後の開教振作に益する所多きを思ひ當に應じ所感を記し一序に代ふ。

昭和四年九月廿日

古義眞 宗總務

瀨川大憲

## 序

草製全宣師「滿鮮教會誌」を刊行せらるゝ師が古義真言宗財務部長として朝鮮滿洲に於ける我が教團進出の實況を視察せられた其日誌とも見るべき感想録である。鮮滿の風光には自分も二三回の親しみがある。師の紀行文が高野山時報誌上に掲載せられるを讀み其の感興自ら他と異なるものがあつた。我が古義真言宗の開教地布教は其の始めより全く他動的であつて就中鮮滿は布哇や臺灣に於ける其れよりも他動的であつたのである。偉大方な弘法大師の靈徳は至る所に信者の結合先つ成り大陣の尊影奉安せられて後本山との公的交渉あるを常とした。今開教地中の最たるものさぶはれてゐる。大連の大聖寺も京城の別院も通踏行録の「沙門が灑然として行き」小庵を結んだのが今日隆盛の創めである。故に我宗には開教政策なく方針なく唯だ自然の成り行きに追隨するかの様に觀られてゐる。然も大師の靈光は彌々高く創設する所の支部布教所は年々共に其の數を増加し開教地布教所として活躍する人材又宗内優秀の青年教育家である。社會は流轉し時代は推移する我が開教地布教も更始一新の機運が到來した本書は頑敏なる草製師の記述に依り滿鮮進出の我が教團の現況を詳にし姑息苟安を誠め教徒の奮起を促す幸に本書の紹介に依り開教狀態が一般教徒に周知せられると共に開教政策に積極的計畫の成るを得て更新の記念となれば其の歡はず一人のみではない。所感を陳べて序とす。

昭和四年九月十七日

高野山大師教會本部長

久保親雅

## 跋

巖層の底から滲み出る滴々の雫は凝つて小流となりそれがやがて大谿谷の瀑布をなつて壯觀を開展する、凡そ物の成就するこゝはその尖端の最小から終末の最大が生れて来る浩蕩たる大海の一波は終に克く萬波を動かすに至る。

わが高祖大師が大唐より真言密教を請來せらるるや、前古未だ曾て日本の國土に在らざりし密教をして如何にせば社會に普及せしむるかは高祖の一大御痛心遊された所であつた。何となれば當時在來の寧樂佛敎は論宗のみあつて經宗がなかつた。

就中密教に至つては從來の論理的色彩の多分に盛られてゐた宗教とは全く違つた法力の絶大を特唱し、日常の口誦持觀に速疾力を體現し現身に成佛を即證するこゝを提唱したのである、當時の宗教界に取りて此の提唱は一大驚異であつた。そして

その時代の人心をして之れに趣向せしむるこゝも更に亦難中の難であらねばならなかつた、此の時代に於て吾が高祖の命を帯びて伊豆の果隣和尚や奥州の徳一菩薩の許に使ひしたる弟子廉守の偉功は吾が密教傳道史上決して見逃してはならない、

彼は何れの地に生れ何日唱大師に師事し、そして何れの地に最終を告げたるこゝすら明かでない、近代のわが教徒には彼の名すら知るもの稀である。而もあの草昧な時代孤影たゞ一人傳道の大命を帯びて朝北の野に使ひしたる廉守の身の上を想ふ

時刻底涙なくしてはその幻影を浮かべるこゝは出来ない。エメルソン曰く「カンナの没落を見て愛國心を起さざるものは人に非ず」とわが高祖が徳一菩薩に齋らした言々何々すべて熱き涙の籠つたあの玉簡を拜讀するならば歎歎流涕ひたすら自らの爲す無きを慚愧するのみである。大師御入定後茲に一千九百五十年わが真言の教流が一大谿谷の瀑布を形成しようとは

誰が豫期しようぞ嗚呼大師は弘法に取られて遍照金剛の聲は今や普夫に滿つ。

惟ふに人類の歴史已前に人類の文化があつた如く現代吾が宗録に記入せらるゝ前に既に吾が宗の滿鮮開教の實蹟を舉げられてゐたことを想像すべくその開教には幾多無名の先人が鋭く風雪と飢渴と人情との苦惱に耐けて能く働き能く闘ふて今日に於ける教線の擴大を見るに至つたことを想ふ時、教線の犠牲となりし多くの無名の人々に一掬の涙を捧げざるを得ぬ。

草葉部長が今回該地に於ける寺院教會の教勢状態を調査せらるゝ傍到る所に講演し信者に接し僧侶と語り備さし風物に觸れて勢動多かりし間に精透の識と犀利の觀察とを以て這個の消息を記述し開教地の現況を活寫せられたるものが即ち此書である。今やわが滿鮮開教地は漸く基礎づけられて曙光を認むに至つた、今後は策勵と指導と開教師自體の自覺に依つてわが密教々流の一大豁谷を形成する時代が到來するならば、本書は誰か後世への遺産たるを失はぬ。本書に依て始めて開教地の情況を明るくされ而して今後に於ける開教思想を啓發せしむる所多からん編者の勞に多謝し小感を記して其の責を盡ぐこふ兩

古義真言宗教學部長

大 平 智 城

は し が き

這回高野山時報社主筆吉川法城師の盡力により滿鮮教會誌を題して六旬に亘る滿鮮視察巡教の日誌を上梓刊行することにまつた。この日誌は世に公表する程の價值の無いものであることは言ふまでも無いことであるが、敢てこれを行行するに至つた所以は滿鮮に於ける開教師諸師の涙ぐましい努力と、豫想外に完成せる教會所の建築とを世に紹介して、せめて開教師諸師の努力にむくひたいと思ふの外はない。猶各教會所について其の沿革を調べたるも開教未だ二十年足らざるに既に教會の沿革の判然せざるものあるに鑑み今にして其の沿革を記し置くにあらずんば遠からずして諸師苦闘の歴史の忘れられん事を危惧するの餘り拙稿をも顧みず敢て刊行するに至つたのである。終りに刊行に際し宗教所大師教會並に開教地諸師より多大の御援助を得た事を感謝する。

北馬南船觀察旋 韓城滿市入新篇  
他年腰越歸山夢 長在斯中彼此邊

千里觀風全任還 相逢一笑互開顏  
深宵夢覺人猶坐 果識新篇成此間

右二首喜全宜師滿鮮教會著成賦寄

己巳晚秋 南 溪 逸 人

## 滿鮮開教の沿革概要

吾宗が始めて滿鮮開教に指を染めたるは明治四十四年の頃からである。主として眞信宗高野派として着手したのであつて其迄は眞信宗各宗派としては殆ど滿鮮開教に何等の手も着けては居なかつた。

顧れば日露大戰後我國の大勝となり平和克復と共に朝鮮を我國の保護下に置き、統監政治を行ひ、ついで明治四十三年終に日韓併合行はれ總督府を京城に置き朝鮮は完全に我國下に屬するに至つて、我内地人の朝鮮に流入するもの益々其數を加へ是等内地移住民に對する宗教教化の必要と共に鮮人教化の必要が痛感せられ殊に内鮮の同化融合を謀るには宗教の感化に俟つての要あるとなし内地各宗派中早きは日露戰爭の終結期に於て鮮滿の開教に著目し内地より開教使を派遣し鮮滿樞要の地に教會所を設置し檀信徒を糾合し大に教勢を張り漸次其基礎を作りて寺院となすに至つた。

本宗は宗派として當時未だ開教事業に何等の施設もなかつたが大帥の信仰に我國一般民衆に普及せる爲鮮滿方面に移住せる内地人中大帥信仰者多く是等移住民が住居の安定と共に所在大帥堂を建立し大帥尊像を奉安して信仰するもの漸次増加して是等信徒に緣故ある僧侶は信徒の希望に應じ個人として朝鮮滿洲に行き信徒を勧誘して教會所を設け大師を奉安して葬祭法儀を行ひ布教傳道に努むるもの是亦漸次其數を加ふるに至つたのである。其魁を爲せるは仁川の大帥堂（現今溫照寺と稱し一寺院を形成せり）にして、是は最初内地大帥信徒の請により高野山本覺院稻葉堯連師に交渉して大師尊像を奉安し、後岡本宜乘師渡鮮して専ら同大師堂の經營に當り漸次發展したるものである。次で金武順道師の開創に係る京城の大帥堂（後靈照律師滿鮮巡錫の際光雲寺と命名せられ現今高野山朝鮮別院として澤光範師専ら其經營に當れり）元山に於ける鹽見御山師の開創に係る元山高野山と稱するもの（現今密嚴寺と公稱せり）澤光範師の龍山教會所（現今龍光寺と公稱せり）平壤の國泰寺（内海靈雲師の創立、其後田和密乘師の渡鮮に依つて鎮南浦に教會所を創立せられ次いで新義州安東縣を開き漸次滿洲各地に手を延ばすこととなつた。

斯の如く各方面に教會所の増設を見るに至つて漸く諸教の教務上宗派本山と交渉聯絡を保つての必要を感ずるに至り種々の問題を本山宗務所に提出し來るより宗派として是等開教地に對し開教師の指導監督及教線擴張上相當の施設計畫を立つべき必要に迫り居る折柄朝鮮總督府に於ても是等内地各宗派の開教に關し布教從事者取締規則を發布し該規則に依つて各宗に

於ける布教管理者一名を選定して京城に駐在せしめ該宗派の朝鮮全道に行ふ布教を管理せしむることとなつたので満鮮各方面に若干の教會所を開設し開教師を有する高野派としては茲に開教に關する一定の方針を立てて一の開教規定を設けて布教管理者を任命するの必要を感じ是に於て各宗派の規定を參酌して以つて一の開教條例を制定し開教監督を任命することとし、第一期の滿鮮開教監督として高野派庶務部長任藤村密惟僧正が任命を受け總督府に之を届け出て各教會に之を通告した。これ實に明治四十四年七月である。

開教監督の設置と共に一應滿鮮各地の宗教狀態實地視察の必要を感じ第一回教狀視察として開教監督藤村密惟僧正を派遣することとなつた。僧正は明治四十四年七月高野山を出發し釜山に渡船し便船を待つて海路元山港に至り先づ日本海沿岸各地を巡視せられた(當時京元鐵道未だ敷設せられず北鮮の視察は海路に依るの外なし)。最初元山に至り同地高野山教會を視察し更に海路濱津に至り同地及離南鐵城等を視察し再び元山に寄港し釜山に歸り京釜鐵道にて馬山、嶺洞、太邱、太田、水原、龍田等を経て京城に出て光雲寺に投擲し數日滞在京城内各方面を參觀し他日高野山別院設置の候補地等を初色し更に鐵路京義線にて開城、平壤、鎮南浦、鐵義州安東縣等を巡視し、安東線にて奉天に至り南滿鐵道に依り南下して大連に至り攝津町なる高野山教會所を視察せられた。大連高野山は山口縣の矢上仁雅師之れが創始に當り引續き其經營に従事し居りしが同地は南滿洲に於ける首腦の都市にして南滿洲鐵道會社及び關東都督府の所在地にて政治經濟其他滿洲各方面に於ける我國の策源地たり従つて各宗に於ても此地を重要視し滿洲開教の根據を茲に設け監督を駐在せしめ銳意開教に努力せるもの、如く本宗としても滿洲に教勢を張らんには此地を輕視すべからざるものあるを痛感せられた矢上師亦此地に於ける本宗教勢の發展上本山より相當の人材を派遣せられ開教に従事せられんことを切望し自らは暫く此地を退き本山に登り修養に勉め追て再び滿洲の開教に當らんとする意中を披瀝せられた。依て僧正は其意を諒とし追て歸山の土相當の人物を斡衛して派遣することと約し矢上師の案内にて旅順に至り戰蹟を訪りし同地較島町なる高野山教會所(現今影理寺と公稱す)に立ち寄り大連に歸り數日滞在の後海路鎮南浦及仁川に寄港し仁川に上陸し同地福照寺に立寄り鐵路釜山に歸り關帝聯絡船にて下關に歸航し、八月末歸山せられたのである。是より先瀬川大憲僧正は明治四十一年十月布教狀勢視察の爲の沖繩及朝鮮へ派遣せられて居る。かくて爾來滿鮮各地に於ける必要の處へは教會建設費又は敷地購入費の内、若干の補助を與へ又必要に應じて開教師を差遣する等宗派として滿鮮の開教に力を注ぐこととなり遂次宗務當局及び布教師の數次の視察布教に依り著しく本宗教勢の滿鮮

各地に發展するに至つたのである。大連高野山教會所へは慶隆境師より駐在開教の希望ありて同師を派遣せしが功を奏せず代つて鎮南浦なる田和乘師を派遣し其整理に當らしめた。田和師は社任後銳意教勢の擴張に努力し旅順沙河口等の教會の發展を策し特に大師教會所の修築等をして面目を一新し聖德會を組織し其發展を謀り以て今日の隆盛を見るに至つた。田和僧正は實に大正四年八月に滿洲開教監督に任ぜられて居る。師は前途尙ほ春秋に富み尙多の希望を抱きつ偶然病を得終に起らず滿鮮開教の爲に實に痛惜に堪へざる處であるが同師遷化後遺弟菅野經禪師先師の後を襲ひ大聖寺任職に就任し尋いで滿洲開教監督に任ぜられ奮勵努力益々教線の擴張を謀り現今の隆盛を見て居るが、其間久保觀雅僧正は常に大師教會本部の要職に在つて開教施設に盡力せられたつてあり。而して朝鮮開教には澤光範師を大正四年十月十日に朝鮮布教管理者として任命し専ら朝鮮開教の衝に當らしめ、大正十一年和尙性海師は布教師として朝鮮巡教視察に趣き、歸つては光雲寺、成身院、鳳閣寺の三ヶ寺を合併して一大朝鮮別院の建設を宗當局に陳情するあり、かくて大正十三年三月廿九日現朝鮮布教管理者たる澤光範師を光雲寺任職に特任して光雲寺を基礎となし別院完成を期し大正十三年度以降金參萬圓也の巨費を交附し別院敷地として光雲寺前の土地一〇四一坪(代價格三、二三四、〇〇圓)附屬建物二戸(價格一、六〇〇、〇〇圓)を購入する等漸次完成に努めつた。

如是して吾宗が滿鮮開教に着目してより大正五年七月には教會監事たりし久保觀雅僧正巡視せられたれいで、大正十一年四月には當時の金剛峯寺執行湯崎弘雄僧正(現小野派管長親下)は時の教會本部長和出大圓僧正(現山階派管長親下)と共に滿鮮巡教視察をされた。(久保觀雅僧正又同行、以後巡回布教として朝鮮の地を巡教されたる布教師に名越行全、赤松密道の兩師あり今又た財務部長草繁全宣師が本年四月下旬より六月に亘つて滿鮮の教勢を巡視せられたのである。)

以上は滿鮮に於ける吾宗開教沿革の概略を僅かなる記録によつて記述したに過ぎぬ、其間誤り無きを保し難いが其は偏へに筆者の責であり諒細を乞ふ次第である。

# 古義真言宗教勢一覽

## 附 滿鮮教勢一覽表

一、寺院數	四、二四七ヶ寺	外三非教師	五、一六〇人
一、教會所數	三、一六二ヶ所	計	六、五一〇人
內、寺院教會	一、一六八ヶ所	一、度牒授與數ト死亡率	
譯、他宗並獨立教會	一、九四四ヶ所	(昭和一年度)	
一、僧侶總數	一〇、七五七人	一、度牒新受者	五五三人
內、一、教師總數	五、四九七人	二、死亡屆出	八五人
一、非教師總數	五、二六〇人	(昭和三年度)	
參考(教會教團)		一、度牒新受者	五二三人
一、僧教	一五〇人	二、死亡屆出	七五人
一、廟教	一一人	(朝鮮事情)	
一、行教	六八人	一、寺院數(朝鮮寺院)	一、三六四ヶ寺
一、教師試補	五三〇人	一、教會所(同)	八二ヶ所
計	七五九人	合	一、四四六ヶ所
一、住職總數	二、九四八人	一、僧侶總數(同)	男 六、六七三人
一、正住職	八九六人	合	女 九一七人
一、兼務	四九人	布教者	七、六五三人
一、無住	三五四ヶ寺	一、寺院數(內地各宗)	八七ヶ寺(昭和二年調査)
一、寺院總數	四、二四七ヶ寺	合	一一〇ヶ寺
一、寺院總數	五、四九七人	內、譯宗派別	一八ヶ寺
一、差引	一一、二五〇人	眞宗本願寺派	一八ヶ寺
		淨土宗	一五ヶ寺

日蓮宗	一、一ヶ寺	智山派(眞言)	二〇人
古義真言宗	九ヶ寺	法華宗(本門)	一一人
大谷派(眞言)	四ヶ寺	豐山派(眞言)	九人
智山派(眞言)	三ヶ寺	外二人一人等十九宗派	
本門派(法華)	二ヶ寺	内地佛教各宗中最も早く朝鮮に布教せしは天正十五年眞宗大谷	
外各一ヶ寺		派奥村淨信釜山に渡りて布教せしに始まり、明治以後に於ては	
一、教會所總數(内地各宗)	二八三ヶ所	明治十年の大谷派、同十四年の日蓮宗同廿八年の眞宗本願寺派	
內、譯基督教會所三、〇六九ヶ所		同三十年の淨土宗等にて我が古義眞言宗の如きは同三十二年頃	
本派本願寺	六〇ヶ所	稻葉龜運師、金武順道、岡本宜乘師等の朝鮮開教を第一歩とす	
大谷派	四一ヶ所	(滿洲教育事情)	
淨土宗	三八ヶ所	一、寺院教會所總數(内地各宗)	九五ヶ寺
曹洞宗	三七ヶ所	內譯	
古義真言宗	四一ヶ所	眞宗	二八ヶ寺
日蓮宗	二四ヶ所	眞言	一五ヶ寺(内公稱寺院一ヶ寺)
智山派(眞言)	一七ヶ所	淨土宗	一五ヶ寺
醍醐派(眞言)	二五ヶ所	日蓮宗	一六ヶ寺
一、教師總數(内地各宗)	五三八人	曹洞宗	一六ヶ寺
內、譯基督教宣教師三、四四七人		臨濟宗	五ヶ寺
五〇二人		一、布教者數	一六五人
本願寺派(眞宗)	一一一人	內譯	
曹洞宗	九一人	眞宗	五八人
淨土宗	八六人	眞言	二五人
大谷派(眞宗)	六六人	淨土宗	二五人
日蓮宗	四四人	眞言	三二人
醍醐派	四四人	日蓮宗	二六人
古義真言宗	四六人	臨濟宗	六人
		曹洞宗	二八人



## 目次

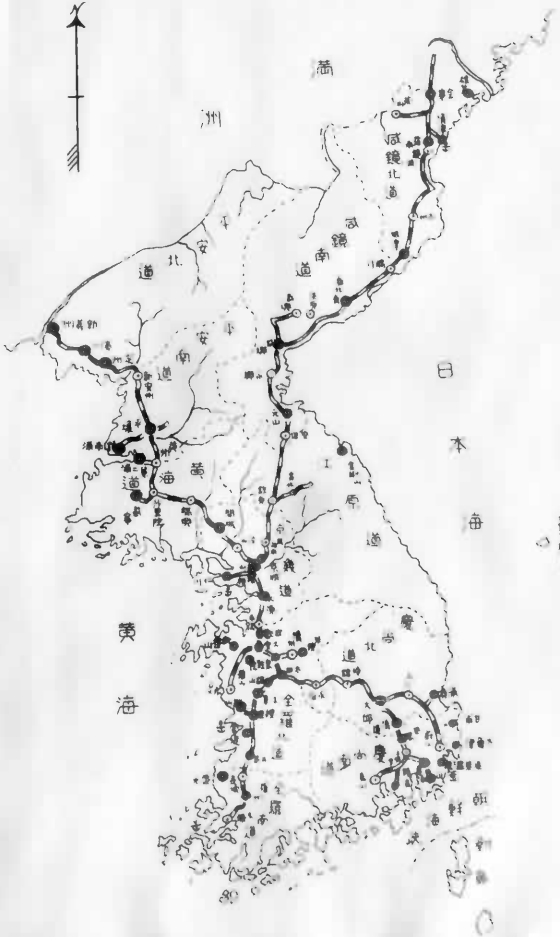
### 口 繪

龍池會長現下——同視下染筆——古義真言宗總務——大師教會本部長——故滿洲堂  
滿開教師墓地——朝鮮全道開教師——

- 一、古義真言宗總務 瀨川大憲 師序
- 二、高野山大師教會本部長 久保觀雅 師序
- 三、古義真言宗教學部長 大平智城 師拔
- 四、は し が き
- 五、滿鮮開教の沿革概要
- 六、古義真言宗教勢一覽
- 七、朝鮮教會要圖
- 八、滿洲教會要圖

# 朝鮮教會誌

# 朝鮮教勢要圖



## 朝鮮教會誌



(一)

春風解纜向征途

滿水鮮山千里路

人謂悠々多樂娛

畫觀宵說勿輕驅

昭和四年四月於中流送全宜開遊

南 溪 迂 人

滿鮮視察旅行が悠々多樂娛なりや否やは事、將來にかゝる問題であるが、少くとも古義真言宗四千二百ヶ寺の寺院育弟にして東部に遊學せるもの約壹百名、宗立大學在學生約貳百名、高野山中學生約五百名、合計八百名の學生中年々高等教育の科程を終りて實社界に出るもの、數大約四十名と見て、其の四拾名中宗旨の公職に就くものは幾人であるか。聞くならく國家が養成しつゝある師範學校出身者の就職さへ容易でない今日の世の中になつたと言ふが、宗門教育の前途に思ひをめぐらした時果して何と明答を與へ得るであらう。

予豈愚なりと雖も宗門教育の目的は全部が宗の公機關又は教育機關に従事するに在りとは言はぬが、表面に於いて寺院育弟の得寺難を聞くと同時に外部的に就職の難を聞くに於いて少くとも宗當局として這回の視察旅行が悠々樂娛多かるべきや否やは已に問題で

無いではないか。

行きつまりと言ふ言葉は近頃各方面で聞かされる言葉であるが古義真言宗の現状も行き詰つて居るのでは無からうか。其等の打開策に就いては宗門の人々は兄弟等の高論卓説を聞き度いのではないかと、又宗務當局の努力を念願して居るのでは無いか。然るに悠々多樂頌とは何事ぞや

計らずも筆が横道に走つて議論に亘つた様だが元に戻つて宗門の教育方針、宗門の開教政策、何ぞ大問題では無いか、幸に開教政策に就いては傑僧久保本部長あり、宗門教育には學徳一世に高き高岡大理事長あり、手腕経綫の藤本學監あり、中學長としては至誠そのもの、様な秋月學長がある。已上の花形役者の揃つた今日宗門教育の前途は春の海の如しだ心配無用と言へば問題は更らに無いが多大なる犠牲を拂つて養成した出身者をして適所に適材たらしむるに否と宗家百年後の消長は大關係のある事言ふ迄もない、新義の豊山派の如きはつと此の點に着眼留意して宗内の一人者たる小林正盛師を海外に派遣して居るのみに満足せず近々一宗の長老たる權田老僧正の滿鮮飛錫を要望し實行せんまじつゝある何々言ふ痛快なる壯舉であらふ。

藤に高所大所と言ふ言葉があるが海拔三千尺は高所ではないのであらうか。方十里の世界の巖山たる大高野山は大所では無いのであらうか。相互拯省の必要があらうと思ふ。

又しても議論が脱線したが兄弟並に關東聯盟會の幹部諸氏に見送られて東京驛を出發してから早や數日、事は思ふに任せず東京驛頭兄弟等から草摺萬葉々々熱のこもつた萬歳をあげられた時に生來何事にも一言なかる可からざる予は兄弟等が今一言古義真言宗萬歳と言つて呉れなかつた事をいささか遺憾に思つた。矢張兄弟等も予の這回を行を悠々多樂頌の漫遊と思つて居て呉れるのであらう古人は己れを知る人の爲に死する事を一の名譽として居るが草摺も草摺を知つて呉れる人の許に働きたい。又自己の信仰する祖傳の爲めに犠牲を捧げ度い。

都門を出發したのは四月二十四日の夕、満月が帝都をたらしめて居た七時三十分であつた。夢中に鐵路を走つて僅々一晝夜餘りで釜山に上陸した草摺は、そゞろに高祖大師御入唐の其事も追想せずには居られなかつた。性黨我をすすめて還唐を思ひとす、經路未だ知らず岐に臨みて幾くか泣く、精感ありて此秘門を得たり、文に臨みて心暗し、赤縣に尋ねる事を願ふ。人の願に天隨ひ大唐に入る事を得たり云々

高祖大師は御歲卅一歲延曆二十三年五月十二日勅許を得七月六日肥前田の浦を發船せられて三十四日目に福州長溪縣に著せられて居る。福州に釜山は所こそ變れ今は約一晝夜、昔は三十四日、加ふるに航海中の御苦心を拜祭し奉れば巨舶を浮べて東にかへり見れば一點の島嶼一望の中に滔々烟波眼前に極まる桑梓境隔たりぬ後會を秋の月に契り、行李後遺し、前途を曉の雲に任せたり云々。こゝに颯風俄かに起りて驟雨雲にはけしく、洪波忽に激して客船止に擲らんこせしかば或は故郷に向ひて鷗鷺の盟空しかなんなん事を歎き、或は巨海に沈みて魚鱗の腹にふれん事を悲しむ。冥護に依らずしては素願遂げ難き事を思召し、一百八十七所の天神地祇に祈念し給ひて金剛般若の真文を寫し誦誦開講ありて神ごに法施し、懇に誓約ありしかば蓮谷の感空しからずして水月の應忽に顯はれ風止み浪靜まりて八月十日に及びて福州長溪縣に至る云々

と海上に三十四日といふ長日月を費されて居る。日本紀に残されてある其當時の記録を見れば大師も同行せられたる遺唐大使藤原葛野麿涕泣の如く宴に待する群臣流涕せざる者無し云々

瀨川總務以下各機關の人々が祖山の報告に送別の宴を開いて予の行を壯ならしめられた席上涕泣の如きものなければ、關東辰茂會の菊友が尾久の大廳に祝宴を開いて呉れた席上にも一人流涕せるものも無い。又愈々都門を辭する四月二十四日の夕月光華光もくく反射して一水四見、見方によれば物すくも思はれざるにあらざる剎那にも何等悲しみの色を見出し得なかつた我が行は、無情

のものゝ集りてあつた譯でも無ければ非情人揃ひと言ふ譯でも勿論無い。時代と文化との恵みはかくも人を變化せしめるものである。それに引かへて時代と文化とを超越した宗教否、三時を超越した絶大なる眞言密教の感化令集して如何、思へば轉た感無き能はずである。

(11)

巨船に身をよせて馬關海峡を渡つた予は高祖大師御入唐の當時を思ふに加へて先年恩師雲照大和上の御渡鮮の當時と東轉元帥が皇國興廢在此一戰

を驚嘆せられた勇ましき姿を追想して幾萬の敵味方の英靈の爲めに一包の土砂を海中に投じて光明眞言を誦せざるを得なかつた。予はかくて釜山港頭新日本に一步を印したのが四月廿七日午前八時鮮の山は何れも奇岸累積、實に關東平野の平凡に見あきて居る予には瀟山是れ樂山、全道是れ公園の感を爲したのである。

予が言ふ迄もなく釜山港は朝鮮の表す關である。渡鮮の人誰れか釜山の地を踏まずして朝鮮半島に入るものがあらうぞ、然るに何事ぞ、此關門に我大高野山が寺院はあるか、一箇の教會所だに持たないさは。

我が古義眞言宗が、かくの如き状態のもにありながら開教政策を論議する資格があり得るであらうか、千有餘年の昔延曆二十三年七月六日、肥前田の浦の海岸に纜を解きて、難航二十四日を経て入唐し、眞言密教を傳へ、併せて文化の融和に努力せられた高祖大師を宗祖として頂いて居る我が眞言宗の高野山が朝鮮の關門である釜山府に一ヶの教會所だに所有しないのは一大遺憾である。聞く所に依れば前座主泉親下かつて渡鮮の當時、釜山港頭一人の出迎ふるものとてなく親下自ら手荷物を携へて某旅館に泊られたと言ふ事である。

予も這般釜山上陸に就いては行先に迷つたのである。大師教育の原簿には智山演金剛寺内に大師教會釜山支部が設置せられて居るやうになつて居るが教會員は一人も無い。世間の噂は妙に傳へられて居る。兎に角に釜山上陸して見てと言ふやうな漢とした考へで運航船に乗つた自分は、いろ／＼空想をたくましくするの止むない事になつた。予這回の行が個人ミしてなれば又何をか言はん少くとも一宗を代表して渡鮮する以上釜山上陸第一日の行程が雪を相手に物を求めるやうな事である事は古義眞言宗の爲めに泣かざるを得ない。然るに計らずも這回前關關渡濱長天野大僧止の遺界にして尼僧福島有圓師が六十八歳と言ふ老態を動まして釜山に渡り釜山府協議員、同商業會議所議員、土木請負業小原爲氏、大倉町在住砥前北島龜三氏、水昌町實業家上西和夫氏、朝鮮民報社長仙波近友氏、和歌山縣出身者にして鮮内屈指の金満家迫間氏等後援のものに、今や、釜山府頭大高野山の出現を見むして居る。聞く所によれば上西氏の如きは數千坪の土地を古義眞言宗高野山敷地として寄附すべく已に申込る渡みさ聞く予は釜山港に於ける古義眞言宗高野山の爲めに、北島仙波兩氏に導かれて迫間、上西、小原の三家を訪問し、併せて一場の講演を北島報樓上に試みたが、會する者約百名、いづれも異口同音に、

新義も古義も何れも高野山の弘法大師の宗旨に相違はないとしても私共は紀伊の國の高野山の御寺で弘法大師を拜みたい云々

予は古義眞言宗當局の一人として釜山存任の大師崇拜者より前陣の言葉を耳にして感なきを得なかつたのである。釜山港は人口十二萬、内鮮八萬、内地人四萬神道等は今は別として現在佛教各宗派及び基督教の教勢を一覽すれば

日蓮宗	寺院	一二	{信徒總數	九九五戸
真宗	寺院	一一	{内鮮人	二戸
真宗	寺院	一一	{信徒總數	一、〇四七戸
真宗	寺院	三	{内鮮人	一六八戸
眞	宗	一	{信徒總數	二、五九〇戸
眞	宗	五	{信徒總數	二四三戸
眞	宗	一	{信徒總數	一、四〇五戸
眞	宗	一	{信徒總數	五戸

淨土宗 教會院 ○(信徒總數 五九〇戸  
 〇(内鮮人 四〇戸)  
 基督敎教會 一三(信徒總數 六七戸  
 〇(内鮮人 四七戸)

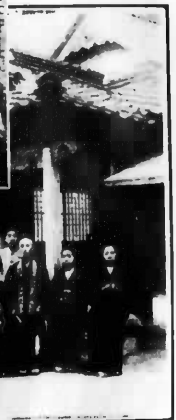
古義真言宗の如きは釜山水昌町六一番地に東定文師の駐在する大師教會員約百名、大倉町三丁目にも福島君圓尼ありて大師教會員約三百名。

古義真言宗々徒としてかゝる教勢を視て深無きを得るや否や、然りとも雖も、予をして釜山府將來の我が教勢をトせしむれば釜山の地は東北釜山鎮驛方面に開けつゝありて釜山鎮埋築地の如きは近き將來に完成する事確實なれば、かかる方面の發展と共に移り住するもの多かるべきは確實なり。かゝる前途を有する釜山鎮方面に、福島君圓尼の率ゆる一派が上西氏の寄附にかゝる水昌町の地に教會所を建築し東師の率ゆる水昌町の出張所是れ又發展するとすれば釜山に於ける大高野山建設の前途必ずしも悲觀すべきにはあらざるかと思ふ。

只考慮すべきは同一方面に古義真言宗の萌芽が二ヶ所並立の傾きある事、少くも兩鮮方面を支配すべき釜山府の高野山教會所としては、相當學識徳望を有する開教師の駐在てふ事は是れである。幸ひに十年二十年の計畫をもつて將來西日本、否少くとも兩鮮の教界に覇たるの遠望を有する開教師其人を得れば、弘法大師の教風兩鮮の地に起るべき事はいささか疑ふ可きにあらず。現に東萊、龜浦鎮海、馬山、密陽等各教會關係者が一宗を代表する相當なる開教師の釜山駐在を熱望しつゝある聲の高きを見るにつけても思ひ半に過ぐるものがあらふ。乞ふ誰れか起つて其任に當る勇氣無きや、予は青年教家の奮起を望むで止まぬものである。予は濟鮮第一日の一夜を大倉町北島居士邸に過し、廿八日午前十時五十二分釜山驛發、小原、北島、仙波、福島等の篤信者三千餘名に見送られて、遙る釜山鎮驛迄見送らる、仙波氏と龜浦の篤信者馬場氏の出迎へに加ふるに今日より兩鮮一般を案内せらる、約ある龜浦駐在の開教師國光正圓師に導かれて、左に新興氣分を多量に盛りられたる水昌町を眺め、右に今は歴史となりたる、文祿の役小西行長の古戦場と稱する鎮山鎮の田沼中の石垣を見て、四呎八吋半の、廣軌鐵道、如何にも大陸的な心地よき奉天行急行に身を托して龜浦驛に着

高野山大師教會龜浦支部

龜浦教會所



梅水師



伊原ユキ子、大崎イセ子、能美平次氏、國光正圓師、安部小浜子、高田長平氏

一、創立者故梅水光義師  
 一、敷地坪數 百坪  
 一、建物坪數 廿五坪  
 一、沿革 大正六年三月  
 梅水師來浦、能美、大崎、山本、松清、國光等外數氏の援助を得て大師堂一字を建設し(大正四年九月一、同七年七月高田長平氏等を總代に加へ一部建築の上大正八年大師教會支部設置を出願し總督府の許可を得て高野山大師の宗風實施に努力せり  
 一、功勞者 故梅水師、高田長平、能美平次、山本正圓、高田ヒサヨ、山本トメ、松浦タメ、大崎イセ、國光ノキ、水田サダ、乙藤ユキ、三村、秋本ナヲ、伊東ツネ、野村ソノ、古賀シメ子等諸氏

ものがあ。加ふるに各宗を通じて開教師一般が鮮人布鮮てふことを度外視しつゝあるやの感あるは尤も遺憾とするところである。

予が渡鮮後目撃したる範圍に於ては、將來の鮮人布教は必ずしも朝鮮請修得の必要無きことである。予は一日北島居士に案内せらる、まゝに釜山府觀察の途次鮮人兒童が何物かを所持せるを見て、北島居士に其の用途を聞きたるに、鮮人兒童が北島居士の答へざ

るに流暢なる日本語にて予に明答を與へたるには一驚を喫したと同時に、内地人の我々は必ずしも鮮人以上の人種たるが如く自負する資格ありや否を疑はざるを得なかつた。

予は渡鮮直後釜山有志の一人たる小原篤居士より、本山當局の一考を煩したしとして申述べられたる隻語を記して参考に資したいと思ふ。

小原居士曰、佛教各宗派の布教師は専ら内地人相手にて一も鮮人布教に及ばざるは遺憾なり。極言すれば内地人専門の布教は無きにはさまれりミするも、國家てふ大所より見れば何等の價値なきものなり。吾人が佛教徒各位に望む所は、鮮人教化、換言すれば佛教思想によりて内鮮融和の實を擧げられたき事これなり。拿前這回宗務當局して朝鮮御視察に聞く、乞ふか、る點に留意して視察せられんことを。吾人は本山當局たる意節に、釜山府に於て特に紹介すべきものあり。淨土宗知恩寺住職太田秀山氏經營の共生園これなり。まけて視察せられよ云々

### (三)

予は小原居士の紹介狀を得て二日共生園を訪ひ、園主不在にて鮮人僧侶北出立仙師につきて左の如き内容を知り得たり。記して宗內有志の參考に資せむ。

共生園は大正十二年四月釜山知恩寺住職太田私山師の提倡により、同寺信徒及び釜山共生會會員等の援助に依りて、大乘佛教の根本精神たる共生の念顯成就の爲め、今上陛下御成婚紀念、且つ淨土宗開宗七百五十年紀念事業として設立せるものなり。

これが共生園創立の趣旨であつて、内容は、教化部、學園部、授産部、託兒部、診療部、調査部、遊園部、母乳部、紹介部の九部である。

淨土宗はかくの如くにして朝鮮に於て著々上着の鮮人間に精神と物質との兩面より喰ひ入つて居る、悲しい哉高野山は、小原居士が云ふ、無くもかなの内地移住者の布教ならして居ない。就中共生園視察の際に深く感じたことは、鮮人兒童が一生懸命に共生園内外の掃除を爲しつつあつた一事と、辭してかへらんミする時、其の鮮人兒童が予の法衣を引きて何事か朝鮮語にて話しかけるので、見るまもなく振りかへりて見れば、衷心より別離を悲しむ表情を爲しつゝ、再三再四默禮した、ことである。

鮮人教化の困難なることは今更事新しく云ふ迄も無く、過去の布教の歴史が證明して居る事であるが、しかしながら彼れ等鮮人も人間である以上は理論を離れ、論議を超越して、誠實そのものを以て彼れ等に接するなれば教化必ずしも困難では無い。

予が渡鮮以來大いに感じたことは、内地の人々が鮮人々々よぶ言葉の中には輕侮の意味が多量に含まれて居るやうに思ふが、これは大なる誤りである云ふ事である。予は一日國光師に案内せられて龜浦の面部落(面部は内地の村)を視察して驚いた。龜浦は有名なる洛東江の下流に位置して、舟輪の便三十餘里、巡航船は勇ましき機關の書をたて、織るが如く上下して居る關係上、龜浦は東南鮮屈指の米穀の集散地である。白衣の鮮人數十名集まりて何事かを爲しつゝある、近づいてこれを見れば、大陸の機械農業に従事しつゝあつたのである。彼れ等鮮人は、一般的に云へば過去何百年間の政治的感化の結果、貯蓄心と勤勞觀念とは缺乏して居るけれども、教育ある青年は日一日目ざまめつゝある。かゝる大陸の機械農業が果して我が内地のいづれに實行せられて居るか輕侮の眼を以て鮮人々々よぶ内地人、よばれる鮮人、予はいづれを尊し、いづれを卑しすべきか其の區別に迷つたのである。

實力無きもの、末路と、空虚なるもの、一人よかりに誠者の恥づるところでは無からうか。予は切に反省せられた一人である。こゝを告げし。

龜浦里(龜浦支部所在地)戸數五百五拾五戸。内鮮人四百〇五戸、内地人百五十戸。人口二千三百二十人釜海郡大湊面、内地人三百六戸、人口千〇三十餘人以上内地人全部佛教信者にして、基督教徒無し。教會所は古義真言宗一、東西兩本願寺各一、天理教一、我が教會所の會員四拾五名。

予は視察第三日の行程たる鎮海布教所に向ふべく、安部博士夫妻高田、能美等特信者數十人に見送られて龜浦停車場を出發したの

は四月廿九日午前十一時である。

鎮海港は東洋第一の軍港たる資格は十分に所有しながら、世界的軍備縮少の勢ひに押されて、しばし眠つて居る要港と聞いて居る。特に東郷大將が卅七八年の日露大戦役の際に、東洋第一艦隊を率いて、世界的にほこつて居た露國バルチック艦隊を撃沈すべく、艦隊を此の港に駐した、新興大日本の沿革史上花々敷歴史を有する土地である。身は世外の世捨人なりと雖、大和民族の血を受けて居る予にとりて、今日の行程は又格別、胸はおどろき、血は湧くのをとめて得ぬものがあつた。汽車は龜浦驛を離れて、洛東江に派ひ、離れつ派ひつ進みくく三浪津に着、津は鎮海島山行の分岐驛。特産は梨、その耕作人が多くは岡山縣人にて聞きては、なつかしさ又限り無きものがある。時に我眞言宗の圓龜大家として知られたる小田部の故某僧正の感化が、同師遷化後の今日特に朝鮮(三遷寺)に乾も及び居るかを思ふ時、人間は善き種をまき置きたきものと感を深からしめたのである。離れかありて難林八道(今は十三道)の平野に第二の萬歳の池を鑿つた勇氣は無きか。第二の圓龜家たる意氣は無きか、予は自らをかへり見て、今年若かへりする仙術は無きかと思つた。立て我が宗の青年僧黨へ我が弘法大師の末徒、青登一度來らず、老來くゆる事なかれ、嗚、

二度昌原驛にて鎮海行に乗り替へて、目的地に着いたのは二十九日の午後三時、鎮海の風光は明媚にして船佳全町悉く公園の觀がある。市街の形状は北海の旭川が札幌かの如く、右に碁盤の目の如き淡水養魚所を見、左にマスト形の日露戦役海軍記念塔を眺めつゝ、汽車を捨て、岩本、福本二師元木、川端、石井等の數代を始め婦人信徒數十名に迎へられて自動車で大師教會鎮海支部に飛ばす。先づ教會弘法大師御實前に法樂を奏し、再び自動車を走らして淡水養魚場鎮海徳丸觀音、海員養成所、日露戦役記念塔海軍飛行場遊地、山十製糸工場慶和洞鮮人部落等を見る、いづれも大陸的にあらざるは無い。

鎮海港は大戦後軍港たるべき豫定のもに大々的の施設を爲したるにもかゝらず軍艦にて頓挫したる爲めに、市民が大に失望して成は他に移住するものも出来、一時は鎮海港の將來を憂慮するもの多かりしが、萬國平和會議も議論も實際とはは大なる相違ある間には東洋の平和はかかりて鎮海の興廢にありと稱するも過言は無い。政府又見るところありてが、十一萬六千二百卅一坪の地を擴べて淡水養魚場の設置をこの地に求め、昭和三年四月起工十二月竣工した。又海軍飛行場の開設海員養成所の設置鎮海の將來これに依りてトすべしかと思ふ。

### 高野山大師教會鎮海支部

#### 鎮海教會所

一、創立者並沿革 明治四十五年福智聖師來鎮高砂町に教會所を開創。大正三年南社公園前に移轉。大正九年二月又中田實賢師來在梅枝町に移轉。大正十四年四月千葉弘暉師中田師と交代常盤橋角に移同同年十二月二十三日移任。爾來支部長缺員の儘供託人總代並婦人會員の盡力にて昭和二年十月紅梅町大通角に敷地百六十七坪建坪四十八坪の家園を求め昭和二年十一月二十七日入佛供養をなす今日に至る。

- 一、功勞者 元水淺夫、川端千代吉、石井重平、首藤六太、楳本長太郎、九鬼長徳、元木たけ子、松井千代子、石井ユキ子、河田キク子、首藤ユキ子、山田ミツノ、森藤幸吉、若木アキ子、池木フユ子等諸氏



かくの如く皇運の隆昌を便はしむる中にありて、約十萬圓の豫算にて起工せるマスト形の海軍記念塔が、中華民の請負師の手に依りて爲されつゝある事と、五月廿六日に東郷大將を迎へて除幕式を舉行する云ふ該記念塔の工事か如何にも未完成なることを元木氏に問へば、

これが日本の請負師なれば今日にあれば必ず請負金額の増加を要求すべけれども、民國人は晝夜寢食を忘れても必ず期日に完成せしむる一事を請負金額の増加を要求せざるは其の特長である云々

さ聞かされた事は、予の尤も遺憾を覺へたる點である我が國民は何故に世界各國民族の、短所缺點を悉く所有して居るのであるふか?

予は其夕大師教會鎮海支部に於て佛敎各宗聯合修徳

會主催のものに約百餘名の男女の爲めに大師の御遺徳を傳へ、元木氏邸に宿泊したのは翌日の午前一時である。

予をして夜まで日につく觀劇と講演の疲勞を忘れしむる一快事を報導して兄等と喜びを共にしたいと思ふ。鎮海教會所の如きは、主任者なき事こゝに數年しかるに弘法大師を歸依する信徒諸氏は、或は寒夜に托鉢を爲し、又は和讃等を奉詠して得たる淨財を持ちて會所を求め經營維持しつゝあることである。予はかつて某氏に聞く、本願寺の某重役は我が本願寺をして弘法大師の如き祖師を有しむれば、現在に數倍したる事業を……と、實に弘法大師の徳風海の内外に輝くこと……と。

鎮海戸數三千五百廿戸、内鮮人二千五百戸

人口約一萬六千人、内鮮人一萬二千人

佛教信者二千五百人、内鮮人無し

基督教信者百餘名、内鮮人不明

現存寺院數會所、東西兩本願寺各一、淨土一、禪一、法華一、豐山一、古義一

慶和洞は人口壹萬を有すると云ふ兩鮮屈指の朝鮮人部落であるが一見實に乞食部落である。鮮人老若男女は群を爲して、内地の田舎の御祭禮のそれの如く、路傍には、いも、だんご、等見らるるにはき出し度なる様ないろく食物をならべて賣つて居る。鮮人は大地に坐して、それ等を求めて喰つて居る。其の有様を一言にして云へばアタの千其儘である。

予は東學黨の事件から日清戰爭となり日本軍が連戦連勝した時に我軍の忠勇無双なる事を聞いて大なる自尊心を起した者の一人であるが、今親しく朝鮮を視察して、かゝる鮮人や支那人を相手に戰爭して勝つのは當然の事であつて、何も忠勇無双と稱する程の事は無いと思つた。然しこれに負けたミすれば猶更問題では無いが、連戦連捷は別にほこべき事では無い。我が大和民族が、かゝる戰捷を鼻にかけて居る間は實力ある世界の一等國民にはなれぬ大に反省自覺すべき事である。

かく云へば鮮人には取り柄は無いかの様に思はれるが鮮人には見逃す事の出来ぬ長所がある、それは祖先を大切にすると云ふ美風

と、長者を尊ぶと云ふ善行である。鮮人は父母の喪に對しては、三年の間内地の禮僧其のまゝの笠を着て、身には麻布製の改良服様のものを纏つて居る。如何に祖先を大切にすることは此一事でも承和出来る又祖先崇拜の事例の一として見れば朝鮮人は墓所を求めるには、自分の所有地と他人土地たるとを區別せぬ、何人の地所でも此所がと思ふ所に土地をトして墓所を造り相當擴大なる土圍を造るのである。汽車の沿線にて風景の佳なる所には必ず墓所を設けて居る。それが又點々各所に散在して居る、これも又祖先の爲めには何ものをも犠牲にするに云ふ美風の流れかと思ふ。又長者を尊敬する美風の一例を云へば、たとひそれが雇人であつても年長であれば年少の主人を呼び捨てにするに云ふ事である。而もそれを不思議と思はぬのである。又鮮人間には長幼の序は嚴然として居る、其の一例としては、妻帯前の者を鮮董(ジョンガ)と云ふが鮮董は長者の前では煙草等は決して吹かすめのである。かくの如く祖先を崇拜し長者を尊敬する美風をもつて居る。

鮮人は如上の美風をもつて居る上に、猶同朋愛の精神に富んで居る。其の一例としては一族の間に於て富を獲得したるものありすれば、一門の人々は其の宅に集まりて或は歌ひ、又は食し歸途は必ず汽車賃迄も與へて返すのである。それについて極端なる實例をあければ一人の袴がありて俸給生活を爲し居るミすれば、其の月給日には必ず父母兄弟は其の邸に行くのである、主人公も婦女でそれを迎へ、月給の全部を傾けて歡待する。かゝる美風は同朋愛の發露として内地では見られぬ事柄である。しかるに何事ぞ、鮮人はかゝる事柄をよき事として、一生懸命に努力奮闘する精神は失はれ、働いても働かないでも生活は同様である働くものは損であると云ふ傾向がある。これが朝鮮亡國の一大原因を爲して居る様に思はれる。

モルヒネも善用すれば人命の救助が出来、同朋愛も善用すれば國を亡ぼす、宗教教育家の心すべき事である。

人の出會頭にする挨拶の中にも國民性は表はれて居るミ某氏が予に語つたが實に金言であると思つた。今日は御禮様よろしくと云ふのは内地人であつて、日本人は氣分ミ云ふ事に重きを置いて居るが、朝鮮人は人の顔を見ると飯を喰つたかミ聞くと云ふ事である此の一言は鮮人の國民性を代表する言葉である。命は食にありと云ひ、衣食住の三ミ云ふて、食事は大切なもの、一には相違無いが



内地の譯には、武士は喰はねと云ふ言葉がある、内地人ミ鮮人との相違は、左様に相違して居る。又支那人の如きは内地で云へば大阪人の如く、先づ人の顔を見ればモウカマラスか云ふ事聞いた。以上の三ツはいづれも國民性の相違を語つて居るものである。思ふ。

鮮八の家屋は博覽會の朝鮮館を見る様に、高さ七尺前後、家根は稻を以て撐き、出入口は窓の如く、その不潔さは又格別である。すべて白衣を纏ひ、婦人は洗濯の爲めに生れて来たものと思はれる程でその不潔さは又意外に云は無くしてはならぬ。尤も鮮人の白衣と長煙管とは虎除であつて、清淨を意味するものでは無いと聞かすが、いづれにしても鮮人教化の根本法策としては、勤勞精神と貯蓄心の養成であると思ふ。

(四)

余は元木氏夫妻の厚き供養に一夜をあかして四月廿日午前九時鎮西驛を辭した。見送る人々は元木、川端、石井、岩本等各夫妻、外婦人會員數十名昌原三郎津に火車を乗替へて密陽驛に着、直ちに同地教會所に自動車を行らした。出迎へられたる人々は難波、光友、戸田等の諸氏及び清道布教所敷地約三千坪を寄附せられたる篤居家にして同教會世話人なる内田權作氏外一名も通る／＼出迎へられた。

予は驛浦に於ける高田、安部、妹尾等の世話人ミ云ひ密陽教會所發起人難波氏ミ云ひいづれも中國殊に岡山縣人ミ聞いては故郷に歸りたる心地するミ同時に我が岡山縣人が新領土に於ける密教の教風宣揚に努力せられつゝある勇ましき有様に感謝の涙禁じ得ざるものがあつた、

今日は丁度舊曆の三月廿一日朝鮮至る所大師参りの人々にて人の市をつくる、御接待の供養又到る所にあり。あたかも陽春四五月頃の四國靈場を観がある、主任南奉師の語る所を聞けば密陽の大師教會にて施す接待にては數百氏にのぼると、實に海拔三千尺の高野山に居ては推測だに出来ぬことである、人間すべからず時は境遇を轉じて気分を轉換すべきである。

密陽面は戸數四千二百九十戸内鮮人三千九百戸、人口約一萬九千九百人内鮮人一萬七千九百人内鮮人信徒は三百七十戸位鮮人信徒は一人もなく宗派別に云へば眞宗信徒三百戸淨土宗一千戸古義眞宗三千戸神道十一戸基督教は内地人九戸鮮人は不明二千戸餘りは所屬無きもの云ふが如き數字である。就中

密陽大師教會支部

支 部 員



密陽教會所



- 一、創立者 故澤本光義師
- 一、移轉新築者 綾地亮無師
- 一、敷地 四十八坪
- 一、建坪 二十四坪
- 一、沿革 大正二年澤本師書賜面三門里に教會を敷置し後木下、河原中田高崎四師を経て綾地師に至り本山の補助を得て大正十年十一月同城内に移轉新築來佐藤、水野長谷川等五名の交代約十人大正十五年八月松本總領師來任次ぎて兩事續辦師に至る
- 一、功勞者 藤波一、光友近衛、安田大吉、坂本勝谷、奈良崎喜助、村上彌三、等諸氏
- 一、現住總代 藤波一、光友近衛、井上茂也、戸田榮次郎、樂田伊勢吉、眞木武太郎、小山淳平、濱中祐信、玉眞熊太郎、千田錦三、鹽見澤太郎、三宅春治、坂本勝谷、深町末吉、
- 一、現住世話人 美馬通之助、安田重男、山田駒江、吉村ヨシ

もあれば百餘人の男女の爲に一席の講話の後午後九時に清道面大師教會支部に向つた。難波、光友、濱中、戸田等世話人諸氏に手届する所は聊等の力によりて密陽教會所の發展を期せられん事である。

四月廿九時に渡邊主任、内田、國部、大崎、粟谷其他數十人の世話人に迎へられた。内田權作氏が密附せられた約三千坪の地に新設せられた清道教會所に赴き法樂讀經は例の如く又送つて来た南奉師の紹介で夜の更けるのも忘れて予を待ちつゝあつた三人の男女に對して一場の講話をして慰に著いたのが午前一時半であつた、明けて五月一日境内の施設を見るに新四國八十八ヶ所は設けられ櫻梅兩種の植林も出来五十年後の發展をしのばしむるものがあつた。就中八十八ヶ所の肖像の密附者が朝鮮各地に散在して居る云ふ事と鮮人信者がある云ふ事は清道教會所の特色である、内田、大崎、粟谷等諸氏に案内せられて同教會所々屬樂水の瀧を見る落下百廿餘尺兩鮮の名勝地である。慶尙北道累年の旱害に此の瀧又餘波を受けて水乏しく瀧を埋むるに水無く寺に住持無きの感ありしか多少の遺憾である、予は用水に事を缺く慶尙北道の農家を思ふて轉た哀傷慕じがたく、切に萬歳の池の必要を思つた。

清道教會所



清道大師教會支部

- 一、創立者支部長 渡邊昌馬師
- 一、敷地 二七三〇坪
- 一、沿革 大正九年十二月 渡邊昌馬師來清、借家をなして開教、大正十年二月二十日附高野山大師教會清道支部認可大正十一年四月二十一日内田權作氏より敷地の密附を得て現在の教會所を建築し目下本堂藏經寺號公稱の計畫中
- 主 一、功勞者 渡邊昌馬、内田權作等諸氏

特に兄等に報導しておきたき一事は朝鮮に黒口の鳥の居て其の鳴き聲も自ら變り人間には非常に親しみ易い事である、牛は朝鮮の名物、馬は内地在來種のものよりも猶小さく乗馬用の馬には數個の鈴を首につけてテリリン／＼と音をたて、走る様は殆んど玩具そのものに思ふ。予は先年北海道旅行中同地の馬には必や鈴を附するを見たが地方人は鈴は熊除であると言つた。朝鮮馬の鈴も多分虎除にて附して居るのであらふ、牛にも又頭の前側に鐘の空かん様のものを附してポボン／＼と音をたて、歩く、而し牛馬は形も毛色に變りはない犬猫等と同じである。

大邱月見山大師教會支部

高橋主任



- 一、創立者 高橋清善師
- 一、支部長 密門亮範師
- 一、主任 高橋喜法師
- 一、沿革 大正十三年六月高橋清善師來邱大師教會支部を月見山に設置す
- 一、功勞者 高橋喜法、高橋清善等諸師

- 佛敎信者 二百人内鮮人十八人
- 基督教 内地人無し鮮人二十人
- 教會所 高野山一、禪宗一
- 創立 大正九年十二月

高橋清善師



清道教會所視察を終へた予等一行は五月一日午後〇時五十八分渡邊主任及び世話人等數十人に見送られて大邱に向つた、驛には高橋清善、明石、原田三氏等の篤信者が一行を出迎へて自動車を見山山の教會に送めた。大邱は兩鮮の中央に於けるまたる大都市で昔は江景半環を併せて三大都市に數へられた所であるにもかゝらず、古義真言宗として何等見るべきもの、ないのは遺

徳であるが一人こゝに弘法大師の爲に氣を

はいて居るのは文字は存じませぬが弘法大師の靈感に體験して居りますと素直に物請りする高橋清庵尼であつて間口七間奥行四間の本堂三間口六間奥行二間の庫裡を建て敷地數百坪信徒百八十餘人内鮮人三十人就中鮮人信者が婦人である云ふ事は國土人情とは異つて居ても宗教的情操はより多く婦人にある事を物語つて居る。大邱面は近く府内地の市たるべき都會で人口約十萬、教會所寺院は兩本願寺各一、淨土宗一、日蓮宗一、智山派一、禪宗二、善真耳宗一、天理教六、月見山支部は大正十三年六月の創立である予等一行はこゝに一席の講話を泊して五月二日南鮮東海岸浦項に向つた

大邱より蔚山に通ずる東海中郡線の沿線はリンゴと米の特産地である。途中慶洲に

下車慶洲は新羅の舊都じつて大邱を去る事、東方十七里餘迎日湖の内七里餘の所にある盆地である、今日の市街は戸數僅かに二千に満たざるが新羅全盛時代は東方狼山の麓より月城を越へ西方一帶に跨る廣闊たる地域を包括して全衛一千三百坊戸十七萬八千九百餘なりきと案内記にある、新羅の始祖王朴赫居世の廟國我朝崇神天皇四十一年であつて朴氏十世、昔氏八世、金氏三十八世三世合して五十六王九百九十二年の王都である。予等一行をして奇異の感を抱かせるもの新羅王陵二十三基を初め金度嶺等新羅名臣の古塚である。方何町高數十丈と云ふ山の如き大なる土饅頭形の古塚々々として聯續して居る。就中新羅の盛時に當りては都城の内外八百八ヶ寺の堂塔を算したりと云ふ事である現存せる寺院は佛國寺を初めとして二三ヶ寺に過ぎずと云ふが皇祖寺以下十三ヶ寺の遺址には芬皇寺の九層塔、佛國寺の多寶塔、淨惠寺の十三重塔羅原里の五重塔其他石塔いろいろ噴賞に値ひする燦然たる新羅時代文化の代表である。尤も石窟庵丈六石佛座像、南山菩提寺の等身釋迦佛石像等は新羅時代の彫刻を代表せる稀有の傑作と稱せられて居る、殊に予等一行の目を引いたものは陳列館内聖德王神鐘で朝鮮三天鐘の一と稱せられて居る。我が國奈良大佛の鐘又は大阪四天王寺の梵鐘等は真門家の目には兎も角とするも予等のは聖德王神鐘を見るは問題ならぬと思はれた。慶洲の名聲近時頗る内外に宣傳せられ視察研究者の往訪絶へざるは遺跡遺物多きに依る譯である。

聖德王神鐘は又の名を奉德寺鐘と云ふて新羅第卅五世景德王其父聖德王の爲に銅十二萬斤を捨て、大鐘を鑄造せんとせしも果さずして登遐し其の子惠恭王遺命に依りて其の七年(光仁天皇寶龜二年)十一月鑄成せしもので口徑七尺五寸口圍二十三尺四寸厚さ八寸龍頭の傍に圓筒を有し乳孔郭及び口帯に寶相花文を現し四面に天人を配して居る、新羅時代の文化を知らんとする人は必ず一度は杖を引くべき地である。

内地の博物館を見ても美術の粹は佛教美術である如く朝鮮の美術も又佛教美術である。佛教と美術と文化思へば深々の意味がある、予は新羅の文化を語らんが爲めではないが、途中下車して新羅王陵の址を訪ひ午後五時半浦項に著藤本有業師外考藤、新出、今津、橋本、近藤、小山、福住、廣瀬等の世話人婦人會員數十名に迎へられて布教所に入り案内せらるゝまゝに將來大高山として移轉すべき土地を踏査した。豫定地は數千坪の高地で一望迎日湖を眼下に見て浦項面部落は一目の中にある、實に浦項高山の名に背かずと云ふべく新主任藤本有業師の爲めに前途大いに祝福すべきものがある、かくて予は夕九時より約百名の男女の爲めに二時間

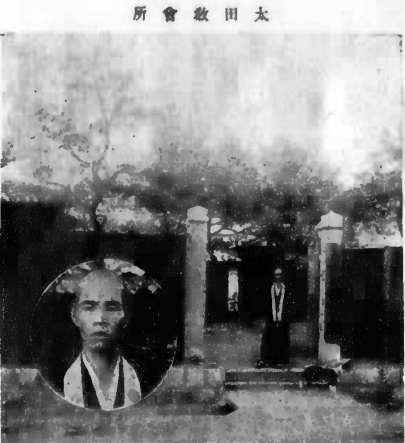
浦項大師教會支部



一、創立者 河川師  
一、沿革 大正元年河川師來浦教會所を設立後大正九年白川師河川師と交代大正十五年六月二十七日付海光法師の名義にて公式出願水野光仁師事務主任として赴任、昭和四年四月二十五日現支部長藤本有業師に至る  
一、功勞者 孝藤吟爾、新田源吉、今津重太郎、橋本文八、近藤元次郎、小山五平、福住義勝、廣瀬等諸氏  
一、功勞者 故佐久間久吉故松本信一、現任事務主任 山口光仁師  
現在支部副費員村功勞者 古武六藏、内堀マサ、島村福松、柳澤直作、松本信夫等諸氏  
現在總代及世話係 島村福松、三淵鶴太郎、林田久仁男、内堀マサ、松本信夫、佐々木治右衛門、古武六藏、木賊幸助、池上義次、植直作、植見信彌、山本千尋、松本茂等諸氏

餘に亘る講演をした、聞くところによれば當教會所は大正元年の設立であつて教會員約六十名信徒場數白拾名財産としては現在桁行五間半奥行二間半の平家一棟である、他宗派の信徒は西本願寺教會所約六十名、東本願寺約二十五名、東福寺約八十名、基督教徒は鮮人のみであつて金光教約十五名天理教約十五名、書天教の信者もある。浦項の人口戸數内地人五百二十八戸鮮人千五百戸。彼此對

高野山 大田支部



- 一、創立者 澤光龍師
- 一、支部長 二川靈保師
- 一、敷地 三百坪
- 一、建物 六十二坪
- 一、沿革 大正元年約十五坪の堂宇を建立して高祖大師を祭開す同二年現支部長二川師赴任公稱寺院として境内に八十八ヶ所靈場の開創を計畫し目下基金一萬一千圓を蓄積す現敷地建物は二川師一萬數千圓を投じ昨年買収せり
- 二 川 支 部
- 一、功勞者 二川師、草野原、小橋、古田、山本
- 支部、飯塚、放草野サト
- 士師チカ等諸氏

朝鮮各地内地人の多くは中國の人々にて私も備中私も岡山私も山口も少くとも古義真言宗の信徒中十人の中七八人迄は中國九州の人で浦項の世話人考藤、新田、今津、橋本等の岡山縣人其他福住、小山、近藤等の特信者及び藤本主任に送られ身を軌道自動車に托して大邸に着いたのは正午ぐらに奉天行に乗替て太田に向つた。途中金泉驛は尙川方面の乗替驛、高麗一切經、

版木八萬六千餘を藏する名利寺印寺は此の驛より自動車の便がある、此地又高野山大師教會の支部一ヶ所位はあるべき土地であるが遺憾ながら一ヶ所もない。新義智山は一の教會所を設けて居ると聞く、予は切に朝鮮駐在開教師諸師に留意せられん事を切望する。

金川驛を發して次第と登つて行く有様は内地の箱根と似た點が多分にある、名利、直指寺の所在地たる直指寺驛を通過して秋風嶺に著、此地は文餘年間黒田、小早川の秋風嶺越へを阻止せんとした、鮮將の忠魂碑があつて嶺南嶺北の分水嶺である、秋風嶺の名何んぞ無く旅情を慰むるものがある様に感ぜられた。朝鮮統治以來あらゆる方法を講じて獎勵しつゝあるは云へ何としても何百年の長い年月に亘りて放任した否鮮人の荒すに任せて来た鮮人は秋風嶺を越へて眺望開闢するに共に先山は次第に増加するばかり、さりながら統監府の殖林獎勵と森林組合等の努力のあまは南北對照して一入と理解せられる心地がする。

予等一行は午後三時に湖南線の分岐點太田驛に着いたが太田は嶺北最初の大都市で將來全洲に於ける全羅北道の道廳が移轉して來云ふ、有望なる平原で都市形狀も森嚴の目の如く何所と無く豊かた點を俟ばせる。太田の高野山は大きな寺に引越しました町ノから聞かされた時には喜び知れぬ快感を覺へた。太田高野山は大正元年に約十五坪の堂宇を建立したが始りて開教師二川靈保師が大正二年三月赴任以來苦心經營した教會所で現在基金一萬一千一百圓を蓄積し近き將來に一大堂宇を建立せんしつゝある、其中の約二千圓は飯塚藤原等の婦人會員が年々寒中修行を爲して累年積み立てた云ふ涙ぐましい淨財も含まれて居ると聞いては我々宗徒としては感謝の涙さめめ得ぬものが無くしてはならぬ、開教地に於ける教會所新設新寺建立には内地人の豫測を許さざる美談は隨所にある幸にして二川師は私人にしても大いに成功せる噂もある程であるから、少くとも昭和九年の御遷居迄には新寺建立の出來得る事は信するに難くない。宜なり理に本町二目に私財一萬二千圓を投じ建築美を盡したものを求めて教會所として使用して居る。該教會所の檀信徒は百三十戸人員六百人特に太田の有志原公醫、草野、須々木古田諸氏の如き篤心家あるは尤も意を強くするに足るものがある。太田里總戸數約三千内鮮人一千五百戸教會所寺院は東西兩本願寺各一、禪宗、淨土、日蓮其他基督教、金光教、天理教

大針教、書天教等がある。

予等一行は五月四日朝鮮米により天下に名を知られたる全南北兩道の地に入るべく湖南線に乗つた。二川師夫妻、原、草野、藤原藤原等諸氏の見送られたのも宿縁のあること、思つた。右方郊外に懸立した、鐘瓦建築開けは利務所である、遊覧以來隨所に犯罪者

が警官に縛せられて行くのを見受けるが朝鮮の人々は他人の物を盗む事を左迄罪惡と思はぬとの事である萬一所有者に發見された場合には平氣で運せばよいでは無いかと云ふ。

國民の道德的觀念も又前陳の事情で自然と相違して居る朝鮮の人々は警察官が犯罪者を捕縛した事をむしろ不思議にでも思つて居るのでは無いかと思ふ様な顔色をして居る。

(五)

佳水院畔を出で、豆溪畔に着けば畔の附近には龜龍山の指導標が目につく、龜龍山は忠清南道第一の高山で其の山脈は殆んど全道に連つて居る古來風水學上王者の都たるの資格があると言つて居る、李朝の遷都を企て宮闕の工を起した云ふ名山山水秀麗奇岩重疊春夏秋冬美觀とも山野をかぎり朝鮮に於ける嵐山と呼んで居る、山麓には東鶴寺、甲寺、新元寺等の伽藍があつて何れも朝鮮の名刹である、連山をへて論山に着出迎は一人も無く、行くべき方面も知れぬので鮮東(ジョンガー)を雇つて手荷物を持たせ、論山教會所を逕公に聞けば生憎と其の逕公が鮮へでアクセントの工合で明瞭に聞きされぬ、これは困つたと今更に朝鮮語の出来ぬ事を遺憾に思つたがこゝで朝鮮語の練習も出来ず百計盡きて高野山へ云ふと逕公も鮮東も初めて了解して案内して呉れたが、是は又不思議論山教會所には人の子一人も居ない、隣家の人の話では高野山の世話人が昨晩死んだので其所に集つて居るとの事尋ねて内堀氏の邸に行けば廣太郎氏が死んで葬式との事、早速讀經回向する一族の人々は涙を流して高野山の御世話をした御蔭で今日高野山から部長さんが来て讀經してくだされた……世話人の一人が色々事情を話されるので聞いて見れば其人は備中連島の慈眼院の檀家ちやと云ふ、備中の慈眼院は予が少年時代に前後四ヶ年間世話になつた、寶島寺の末寺世間は廣く狭く思つた。

論山は戸數九百十五戸人口は三千六百六十餘人般若山福壽寺恩澤壇動は朝鮮で有名な佛像壇動佛案内には、  
「今を去るこゝ九百五十餘年前高麗光宗の十九年高僧無明の建立する處にして身長六尺尺周圍三十尺耳長九尺肩間六尺口角三尺五寸火光五尺冠髻八尺大葦方一尺小葦六寸五分蓮花披十二尺東洋第一の大石佛なり、一見して崇高雄大の感を起さしむ云々」

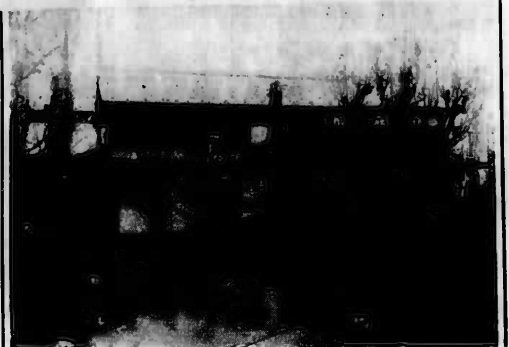
記して居る。一週間ばかり前に山梨地督が参觀して地方官の爲めに壇動佛の説明して聞かせたと云ふので地方の評判となつて居る上に立つ人の一舉一動はすべて影響する所が多い。

論山大師教會支那

論山支那は大正元年に創立したもので樓約三十戸信徒百戸餘敷地六百坪と建物十二坪を有すると云ふが現在主任を缺いて居る他宗派としては東本願寺一、基督教一の教會があつて基督の如きは内地人信徒一人のみであるが熱心に布教して居る、我宗開教師のよき範である。自動車にて江景支部に向つたが渺茫たる全北平野は一望に展開せられて山より山廣袤方二十六里、俗に沃野千里の趣がある。江景唱歌の一節に陸に汽笛の聲を聞き、水に轉ず錦江の流れに沿へる大色、四通八達天然の地の利を占めて忠南に、其名も高さ大江景

全北平野は其の一部を又江景平野ともよぶが内地では見られぬ大平野である。特に江景は我が内地人が今より四十四年前に移住した云ふ程因縁の深い土地である。

太田以西南北全線兩道の地は農業本位にて、商人も



論山教會所

- 一、創立發起者 佐久間久吉氏
- 一、敷地 六百坪
- 一、建物 本堂九坪 庫裡三坪
- 一、檀奉 大正元年九月十七日高麗大師尊像一軀
- 大師教會本部より下附大正二年五月當時江景支部主任小西眞眞師鑒字建立
- 完成入佛供養大正三年六月九日附地督府より教會所設置認可、大正六年掛川明道尼來任大正十年飯田弘寛師交代大正十一年松岡眞明師兼任

農業向きのもの多きが爲めに、移民気分乏しく土着觀念の豊かであるのは嬉しい。江景事情に當地の名勝で、百濟王の舊蹟たる、彰雲山の頂上に立ちますれば、一望涯もなき大平野で、豊南全北の沃田は、其の眼前に横つて居

### 江景大師教會支部

山口主任



#### 江景

- 一、創立者 故金武順道師
- 二、現主任 山口光仁師
- 三、敷地 七斗坪
- 四、沿革 明治三十一年秋金武師弘法大師御尊像一區を奉じて江景に開設す同四十四年春吉川汎峯師來任同年七月四日本部の許可を得、監督官廳の認可は九月一日なり。爾後小西亮、松原隆敏、飯田弘實、松岡寛明、の四師を経て現任山口光仁師(大正三十三年十月十五日赴任)に至る昭和九年期して寺號公稱の豫定

- 敬一、創立當時功勞者、故林鶴助、故村谷文吉
- 二、敷地購入當時功勞者 小林金藏、村上融次郎
- 三、牛興新築當時功勞者 伊賀俊治、吉武六藏、増田源三郎、泉義則、村上融次郎、杉田益衛、井内門十郎、松永善吉、新谷トミ
- 四、現在支部開發功勞者、伊賀俊治、杉田益衛、吉武六藏、横山朝光等諸氏
- 現在總代 伊賀俊治、吉武六藏、井内門十郎、泉義則、小林金藏等諸氏

一、江景平野の秋の色、黄金の花の波を打つ、廣袤千里二萬町、産み出す米は四十萬、米の江景大江景、昔し平壤大邱と、並へ稱へし大市場、今もかわらぬ大商業の、區域は茲に十餘郡、取引二千餘萬圓、市の江景大江景。

以て肥沃なる大平野を想見する事が出来ます云々

予等一行は晝夜百餘名の聽衆の爲めに二席の法話を爲し、江景第一の横田旅館に宿泊した。設備の行届いて居る點では内地にも多く見られぬ程で塙て加へて鮮人の女中が、しとやかな日本服装で、小笠原式で給仕をして呉れた事は尤も嬉しかつた、鮮人全部が物心共にその女中の如く同化した時に東洋の眞の平和は産れると思つた。

江景の戸數は二千三百六十八戸、人口、總數一萬八百七十三人中鮮人九千二百九十四人で宗派別は西本願寺一、淨土宗一、本門法華宗一、朝鮮寺一、基督教二、天理教一、江景高野山は檀徒約九十戸信徒二百戸金剛講員卅九名、それが中々の熱心で昭和九年を期して寺號公稱をする決心の事である。其の沿革を尋めれば明治卅七年秋金武順道師が高祖大師の尊像を奉じて江景に來りて僅か一坪の御堂を建て爾來六代の主任を経て現在山口光仁師に至つて居る。其間には涙くましゝ歴史と姻の様な信徒の熱心とは見逃す事の出來ぬ事實である。特に江景の金剛講員は現在數卅九名信徒も三四里の附近より集り來りて講堂立離の餘地も無い、山口主任の談に實は此の建物の借金の支拂が明後日で終了するのに今や既に秋隘を感じますので第二期の計畫をするのやむを得ざる事になりました世話人の人々も熱心で昭和九年の御忌記念として必ず寺號公稱の豫定であります云々、苦心又祭すべきものがある。

五月三日には伊賀俊次氏等外數氏の先導にて江景市街地を視察白濟王の舊蹟玉女峰に登りて全北の平野を望めば脚下には朝鮮六大江の一たる錦江の流れは一幅の畫の様である錦江は源を全羅北道馬耳山附近鎮安の溪間及び忠清北道の天摩山等の谿谷より發し附近の細流を集めて群山に出て居る水流は満千の差廿四尺小形の汽船は潮の満子を利用して僅か三時間群山に達する陸には湖南線あり海に此水路あり、水陸の便此上なく將來の繁榮又トすべし云ふべし。さりながら將來天安より分岐して禪山洪城等を経、群山に通ずる京南線開通の時は連毛に良港のあらはれて、江景の商權は自ら群山、木浦、連毛に奪はれるやも計られず實に發達は浮世なるか。

伊賀、井内、吉武、横山、杉田、新谷、小林、石本、淵、曾我部、松水、小林、山口等の世話人外金剛講員數十名は講談を先頭に押し立て、予等の一行を停車場に見送つて呉れ山口主任ミ松水、小林、三氏は裡里教會所まで同行せられた。裡里の驛には同教會所

主任小西師外木村、坂東、永榮、木下、春山等の世話人及び婦人會員等數十名が出迎へて呉れた。裡里は木浦、群山の分岐點將來大いに發展の曙光を閃むるの地である。先づ教會所に入り例によりて法樂續いて世話人坂東氏邸に入る。女中あり本年十九才濹賀縣の生れ、七歳木浦に來りて今日に至ると朝鮮と日本と何れがよきかと問へば日本にかへりても友達は無し朝鮮がよいと云ふ、しかれば朝鮮に内亂でも起つて内地の人と朝鮮の人と戦争すればいつれに屬するかと聞けば其れは内地人に云ふ、偏らざる告白と云ふべきか。

(六)

裡里教會主任小西眞亮師は渡鮮以來既に二十餘年論山、裡里の二つの教會所を開設し今又公洲靈光の二個所に教會所を設置すべく努力中百年後の教勢を豫想するときはいさゝか快感を覺ゆると同時に當山開善眞亮上人不生位の靈評をまさく見る心地がする。先哲の遺業遺跡たる肉山寺院を争ふて其のみにくさを法廷に迄も持ち出す内地の學者僧正大德諸師開教地に於ける人々に對して恥する心は無きか予は五月五日、小西師に案内せられて裡里の市街地を巡視したが裡里は戸數二千五百十戸人口二萬

裡里 大師教會支部



小西眞亮師

- 一、創立者 小西眞亮師
- 一、敷地 現在參百坪確定地五百坪
- 一、建物 本堂庫裡三十一坪
- 一、沿革 大正五年五月二十一日小西師來裡里敷地五百坪を借受けて三十坪の教會所を建築して開教に從事し今日に至る。
- 一、功勞者 小西眞亮、木村孝一、原内三郎、山内山、永榮傳太郎、山内兵八、橋本眞太郎、佐藤福太郎、等諸氏
- 一、創立當時百五十戸家數三ヶ所
- 一、現在七百戸 四ヶ所
- 一、創立新費金銀兩開辦費股の上改築

群山府遍光寺付大師教會支部



除内地人六千六百七十餘人教會所は東西本願寺、日宗、天理教、金光教、御藏教、基督教、天清教各一で我が高野山教會員三十名、信徒約百二十戸いさゝか貧窮の怨みはあるが開教地の事故將來に希望を屬するの外はない。市街は存外整然として居て目下下水工事

- 一、創立者 古川眞亮師
- 一、住職 小野英師
- 一、敷地 四百二十坪
- 一、本堂 十八坪五合
- 一、庫裡 三十五坪

中東京横濱の復興工事を聯想させる程である。

一、沿革 明治四十四年七月古川師來群一戸を借受け頂に建築し布教に従事す現住小野英師支部長の任命を受け大正二年二月赴任し總代等協議の結果現位置群山二十一番地を官地として大正六年庫裡を移轉し本堂庫裡を新築し大正七年十月一日寺院創立許可の公認を得て今日に至る然るに大正五年頃市區整理に際し市に人口増加し市區基成り現位置は府の中央に位置する如くなり四通八達街道の中心に成り居れば或は又移轉の止むを得ざるにあらざるに總代等協議しつゝあり將來若し移轉する如き事あれば同時に大々的の計畫を立てんことをよりその準備かな、改築同志會なる名稱の下に會員組織なり第一回に六千圓の積立金を完全に作り現に總代等五名か以て之を利殖しつゝあり。

一、功勞者 眞新五郎、安部受太郎、池田亮貞、石倉新一、井内福次郎藤田春清、田中龜次郎、故光輝嘉大治等諸氏

五月六日小西、坂東等數十名に見送られて裡里を發した余等一行は午前十時に群山驛に着いた、遍光寺住職小野英師當寺總代池田醫士等に迎へられて高野山に警日中池田、石倉、安部井内、肥田等の數代は懇々挨拶に來る住職小野師は開教師中期指の組織的教育を受けたる人、十七年前の高野山大學出身である。群山は戸數七千五百戸人口二萬餘人、鮮人一萬二千餘人教會

金掘大師教會支部

石田支田長部



金掘教會所

傳導上に加味宣傳せられたきものである。

雨中の群山に一層の法雨を注いだ予等一行は小野師に導かれて自動車に飛出した。篤信なる池田、石倉兩氏は遍光寺僧侶

- 一、支部長 石田光心師
- 一、創立者 平岩ミネ子
- 一、教地 四百二十坪
- 一、建物 四十二坪
- 一、沿革 大正二年平岩ミネ子の發起にて大師講の組織をなす。後大正四年十二月福田寛瑛師赴任、家屋を借受けて約三月間教士大正十一年現在支部長石田師駐在昭和二年堂宇を建立し同年四月二十八日附支部設置認可。
- 一、功勞者 本山文男、榎原義夫、立石福藏、高田茂七、水村弘太郎、岡本健次、松下太六、工藤林太郎、瀬戸政四郎、入木茂次郎、新谷榮次郎、本山梅子、平岩ミネ子、藤ツネ、村辻安枝、榎原トメ、高田アサヨ、石ノヤス、宮本ケイ、工藤ゼン、岡本トヨ、鈴木ヤク、新谷昭ト、八木小千代、木村チカ等諸氏

所は西本願寺各一、浄土宗一、曹洞宗一、臨濟宗一、日宗一、基督教一、天理教五、金光教一、黒住教一、出雲大社教一、遍光寺は檀徒七十戸信徒二百五十人、大師教會員百十餘人創立は明治四十四年小野師は大正二年四月赴任大正七年七月一日に寺號を公稱して高野山遍光寺となしたるもの其の功勞者は森、田中池田、石倉、安部、井内、肥田、光藤氏等である、就中懐しかつた事はいづれの市街でも目につく寺は東西本願寺であるが群山では高野山遍光寺は尤もよき位置にある。こゝである、群山は築港の完成と共に水陸運輸の便に恵まれて益々發展する可能性は十分にある、小野師の努力を要する事は一層であるが師もこゝに見る所ありて第一期六千圓を募集し第二期第三期の事業に着手せんこしつゝ、あるのは嬉しい殊に群山は支那大陸との交通も繁しい土地柄であるから内鮮の融和は勿論日支の交歓にも留意して相當なる施設を希望する、弘法大師入唐求法の大精神を

徒を代表して予等を見送るべく、既に停車場に來て呉れて居つた、池田博士は紀州出身にて橋本町に開業せしこゝある、人今は群山に池田病院長として奮闘明春令息が京都大學醫學士として歸群の豫定故病院を譲りて心醫研究に従事したいと語られた。實に得がたき篤信家である。予等一行が裡里の小西師に案内せられて金掘教會所に着いたのは五月七日午後一時、金掘は戸數八百餘戸人口三千八百餘人内鮮ハ二千三百五十餘人教會所は眞言、本派本願寺基督教各一で當教會所は智山派に屬して大正十一年の開設會員百五名平岩、本山二婦人の熱心は又格別敷地建物婦人達の寒行の結晶と聞く、開教地婦人達の特信いづれも感ずべきものが多い、一列車ミ云ふ約束にて日程外の金掘教會所を下車し餘りの熱心に動かされて二汽車運らせて一層の法語聽衆は東洋水利組合財務課長高田政雄氏立石、瀬戸、木村、八木、岡本、工藤、高田、松下、板谷、本山、平岩等世話人外七十餘名金掘支部の法蓮は存外の拾ひものであつた。當地は東洋水利組合の事務所所在地で附近の平野には水路が長蛇の列をなして居る、朝鮮全道到る所水利組合、金融組合、森林組合等の發達は驚くべきもので五十年後の朝鮮は内地以上であらう、内地の人々は何故早く朝鮮に來てか、妖野の恵みを享受せぬのであらう。浦島の物語を讀み朝鮮家屋に朝鮮婦人を見たさき予は昭和の浦島太郎は無いかと思つた。朝鮮の妖野は大陸的機械農業者の來るのを待つて居る。

余等一行は食事する暇もあらばこそ法樂、應援、法話、汽車、自動車つきからつぎにと走馬燈のその如くに迎へては送り送りては又迎へ寢食も亦思ふにまかせぬ事もある、井邑に着いたのは夕七時半全州平野は、に漸く盡きた。井邑は朝鮮の獨立に關係あると云はれる普天教の本部所在地工事完成の名もミに大會を開くべく計畫したミ云ふので井邑警察は治安に關係があるとして中止命令を發し町内の各所に其旨のビラを張つて流言誤傳無からしむるにつぎめて居る、内地の大本教ミでも云ふべきものと思ふ。

余は時間が許せば一度觀察したいと思つたが事情は其を許さなかつたので地方人に聞けば、これ又大本教に對したと同様普天教の本部へは内地人が行けば殺される等云つて居る。普天教の本尊は日の出さ山を繪書いたものであるとのこゝ、道路の説で眞像は不明である。井邑高野山は青年僧松木法澤師が支部長世話人は八木、榎原、日立、中村、渡邊、續、栗岡等で創立は大正九年十月發起人は八木國次氏外數名現支部長は大正十年井邑、赴任苦心經營今日に至つたので飯を食はぬ事も一再では無かつたミ話されては涙をなし





島政院大師教會支部

宗上下共に反省すべき事ではなからうか。

五月六日午後四時には忠北の沃野より産出する物質の集散地である島政院に養谷支部長

- 一、創立者 大西道支師
- 一、支部長 谷智泉師
- 一、敷地 六百五十五坪
- 一、建物 四十六坪
- 一、沿革 明治四十五年七月二十七日若松町に二間に四間半の堂宇を建てて秋津孝雄僧正を迎へて入佛供養執行爾來眞邪弁異、小野有英、松原其、水尾活野、浪海真陽、山内眞弘、龜山淨因、大塚正範諸師を経て現支部長に至る現在宅地三百坪(吉野町)建物、本堂庫裡鎮守堂等
- 一、功勞者 福水水太郎、故西原孫三郎、故島良次郎、故磯田幸太郎、故宮本幹二郎、故野野實次、故原水徳太郎、赤水芳松山下徳太郎、形岡仁三郎、橋本富吉、丸岡工匠、橋本喜八、等諸氏

淨土宗、本願寺等の開教師福水氏父子親本、片岡等の世話人に出迎へられた。特に江景通の際に山口支部長及び百村、松田二氏の送迎せられた事は旅行中嬉しいもの、一つであつた。

島政院は忠清南北兩道連境の中間に位して居る交通の要衝である、戸數千四百十九、内鮮人千二百八戸支那人十九戸余派は東本願寺一、曹洞宗一、淨土宗一、古義眞昌宗一、檀徒三千信徒約百である、夕刻一席の法話聽衆約二十名、當地は交通機關の關係上開教地氣分は薄い。

余等一行は五月九日朝鮮島政院開教忠清北道連境所在地たる清洲に行く、道廳所在地は云ふもの、忠北線の一小驛停車場を透して見た清洲は驚く程の町でもないが將來はある土地と思はれる。附近の特産は金と檀草と米である。余等一行は貴田岡支部長本願寺淨土宗の開教師人見、井上、倉原、松江、島岡、那等の檀徒當代婦人會員等に迎へられて藤家

には聞、事は出来なかつた、今日は敷地四百坪、建坪四十五坪特に其の建築が内地寺院のそれの如く、建築美を極めて居るのが嬉しい八木氏等は昭和九年迄には是非寺號を公稱したい、決心の色を顔にあらはして予に語つた。普天教總本部の所在地に大高野山法泉寺の完成するのも愉快な事の一である。余等一行は小西四の要求を入れて會場教會所に出張金提世話人の希望を入れて一席の法話をなし井邑に著する時間を變更する事二回井邑の開演時間直前に教會に着いた爲に熱心なる井邑教會の世話人に不満を與へたとの事であるがそれも熱心の餘りの事で、予は著院早々讀經法樂小歌後約百餘名の爲めに講演約二時間能所共に熱心であつた。同地の教會所は高野山法泉寺の外に本派本願寺一個所があつて井邑高野山は檀徒七十五戸である。

× × ×

井邑高野山教會支部 長部支木松



井邑高野山教會支部

- 一、創立者 大師講中
- 一、支部長 松木佳雅師
- 一、敷地 四百坪
- 一、建物 三十四坪五分
- 一、物置倉庫等 十二坪餘
- 一、沿革 大正八年八月大師講を組織し大正十年九月監督官廳の認可を得同年十一月七日現支部長赴在爾來奮勵努力し大正十二年二月敷地を買求め庫裡を築築して假本堂を設け大正十五年七月十七日假入佛前和九年宗祖大師一千卅年即道忌迄には記念事業として五間四間の本堂を新築して寺號公稱の豫定
- 一、功勞者、八木眞治、奥島重南、栗岡留治、安宅重次郎、佐々木重太郎、深田泰壽、横木才助、中村勘一、岡長次郎、波邊廣治、城所初五郎、日高爲治、染川徳一、深澤喜代松、松崎ヨシ、古川マエ特別功勞者としては八木岡治氏なり氏は創立當時より一日の如く支部の爲に盡力せり。

湖南清線はいづれも茫漠たる原野で地價は低廉地味肥沃であつて將來尤も有望であるべき地であるが我が高野山の教會所は井邑、蘆屋、江景、論山、靈光(出願中心)の四箇所に通ぎない、智智兩山の如きは木浦、羅州、麗水、長興、金邊の六箇所を有して居る。我

に入る貴田岡支部長は清洲公立女子高等學校にて一席の講演を云ふ、予は乞はるゝまゝに「佛教より見たる女性観」てふ演題にて三百餘名の女生徒の爲めに約一時間の講演校長の説明によれば女生徒中約四十名の鮮人ありとの事一見内鮮人の區別の出来ぬまでに同化して居る、校長の話に依ればよく融和して教育上何等の支障を見出さないの事であつた。いろ／＼の點に於てかくの如く融和しつゝある中にも多少のひがみは免れないものと見へて、何か事ある度こゝに、ストライキ同盟休校の舉に出る事は折にはあるとの事、又思想的に相異して居る一事は各學校生徒が徒步行列の場合内地にては幼少年を保護する意味にて少年を先頭にたゞすが普通であるが朝鮮では敬老の意味が極端に發達して居るから上級生徒を先頭に進行しやうと云ふ風が濃厚であるとの事である。

### 清洲大師教會支部

- 一、創立者 千葉弘隆
- 一、支部長 貴田岡運道
- 一、教地 五百八十坪
- 一、建物 十六坪
- 一、沿革 大正十二年千葉弘隆師來清六月九日教會所を設けて入佛供養を執行し後大正十三年貴田岡現支部長は千葉前支部長と交代して今日に至る
- 一、功勞者 井上正一、倉原喜三郎、八見邦七、永石富作、西村安市、島崎梅吉、木原清等諸氏

ある、其等の關係からして男女の間に思慕感情の融和を缺く、内地でもいさゝか左様な傾向があるが朝鮮では一層それが極端である、又朝鮮では内地の結納と云つた事が中々に高麗で貧乏人は容易に妻が貰へぬ、其反對に有業者は富貴であると云ふ意味から早婚が流行する其所で鮮人間の新らしき所謂目ざめたる人々は結婚は愛の結合で無くしてならぬ愛なき結婚は無意義であると、離婚同盟を組織する様になつたのである、離婚同盟會員は餘りに極端なる人々の集りに考へられるが同盟の力に依らなければ濟来の悪風

予は是下に内地にて想像だに出来得ざる同盟が朝鮮人間にあると云ふ事を報告したいと思ふ。共存共榮は現代の流行であつてこれを大乗佛教より見るも何等異議をはさむべきでない、然るに特に報道せんとする所由は新智識を有する青年間に離婚同盟が結ばれたと云ふ一事である。離婚同盟其の名丈けでも誠に妙に感ぜられるが朝鮮の風俗から云へばこれ又必要なる同盟の一つである、朝鮮は極端なる早婚である上に嫁は必ず婚よりも年長である點から十二、三才の男子に二十才前後の嫁は普通で

を打破し得ない所に朝鮮風俗の異つた點が見出されるのである。

予等一行は清洲高等女學校で左様な變つた話を聞いて歸途清洲高野山教會支部に參詣したが清洲の町は人口總數五千六百餘教會所としては東本願寺一、淨土宗一、曹洞宗一、天理教一、基督教一、金光教一、で内地人六百戸二千四百餘人を七宗派に分ければ一個所に對して三百五十人餘の割合になるが我が真言宗は四百餘人の檀信徒を有する均數は超過して居る、一般信徒は活氣を帯び來りて活動力ある主任を要求しつゝあるが貴田岡支部長が兎角病氣勝なのは遺憾である。夕八時より金蘭組合の樓上にて一席の講演聴衆約二百これ皆貴田岡師の努力の賜である。

予等一行は釜山上陸後十四日五月十日午前七時清洲釜島致院驛に引かへして天安驛乗り替禮山に行つたが貴田岡師、本願寺開教師、瀧川、人見、井上、藪等諸氏が清洲驛に福水氏が島致院驛に森、谷内、遠水等諸氏が天安に迎送せられたのは一入と導しかつた。禮山教會所支部長左近衛に導かれて車を教會所に進めた、朝鮮至る所人力車薄山にて内地に乏しくなりつゝある人力車は悉く朝鮮に渡つて居るかと思はれる程である。車夫は多く鮮人、太郎で乗つた車夫は内地人、變る所はなかつたが禮山驛の車夫は又特別如何にも鮮人らしかつた、朝鮮の車夫には一定の服裝も無ければ制帽も無い、いろ／＼である、客を乗せて掛簾諸共に走る其の順序に變りは無いが其の走り方は吹き出したくなる。

又内地人の車夫なれば一人以上であれば先つ列を爲して行くのが不文律であるが朝鮮の車夫は人々各別思ひ／＼で實に大陸氣分でも云ふべきで走る云ふより歩いて居るのである、後で聞けば飯を食つて居ないので走れなかつたと云ふ初めはいさゝかいらだつて居た予の氣分も後には之も觀察の一つかと思つて興味を覺へた。

予等一行は大田驛前にて途先中街車を挽きつゝ、ある朝鮮労働者が車々々車夫に特權でも與へてあるかの如き掛簾に風俗習慣の圖によりて異なるこゝを感じて居た矢先禮山にて走るこゝさへ出来ぬ程寒風なる車夫が又しても進行く人々を怒罵り散す様を見て車上一人微笑をもらしたのであるがこれは内地の労働者が教へた爲めと聞かされては日本人の内省力の乏しいこゝを感しんだのである。



天安 大師教會支部

- 一、創立者 代表森實治氏
- 一、支部長 津山眞龍師
- 一、事務主任 森實治氏
- 一、沿革 大正十一年十月

天安在住信備有志の發端にて大師教會支部設置  
 爾來八ヶ年二面四面の大  
 師堂より漸次擴張して現  
 在二十六坪の大師堂とな  
 る、敷地四百坪は圓有地  
 なり

天安は鐵道の分岐點で人口四千三百人、内鮮人三千人宗派は天理教、金光教、基督教、曹洞宗、真宗本派各一と古樸眞言宗とで禮  
 徒は四十戸信者が四十五人、設立は大正十一年十月金剛講員三十人、事務主任は森實治氏、支部長は水元法隆寺津山師の兼務である  
 予等一行は五月十二日明治二十七年、八年日清戰爭當時大島團圓が清軍を撃退して戰史上光輝ある第一頁を飾つた、松崎大尉の戦功  
 に依りて有名なる成歡嶺に向つた。大尉の記念碑は月  
 峰山上に建てられて今猶武勳を物語つて居る。聞くこ  
 見るとは大なる相違で成歡の名があらはれたのは日清  
 戰爭と松崎大尉の戦死によるので丘上から見渡すと垣  
 々たる平野は陸軍の歩兵演習にはふさわしき土地であ  
 る出迎へられた千鶴氏は成歡勸業株式會社社長前成歡郵  
 便局長で成歡高野山敷地を寄附せられた人又前出利一  
 氏は主任なき成歡支部をして今日あらしめた功勞者、  
 予等一行は千鶴氏に案内せられて該教會所に入り、法  
 樂ついで一場の法話、教會所の位置は町の東南端に  
 ありて一壺に成歡面を納む高野山の名にふさはしき土  
 地人口は八、六〇三人中内地人三三八人、教會員は一  
 七人、信徒は三百餘人である、五月十四日東京日報の  
 報導に依れば「古樸眞言宗高野山附屬山房長壽堂正は  
 十一日天安に十一日成歡にて講話兩地共に併の事務主  
 任を置くことになつた」云々と勸業株式會社社長が成歡  
 教會所の事務主任に就任降参を改めて活動する事にな

山の地は農學校あり禮山郡廳あり煙草專賣局あり  
 て車兩線開通以前は方十里内外物質の收斂地であ  
 つたが此頃いさ、かさびれ氣味であるかに見受け  
 られる。

(七)

予等一行は禮山支部長左近浦に案内せられて新  
 らしく教會敷地として購入せる土地の檢分を爲し  
 つゞきて朝鮮式五間(二四八尺四寸)の家屋をその  
 儘に使用せる禮山支部に行く。左近浦の談によれ  
 ば同支部には金、彌州で鮮人の禮家が出來て本堂  
 建立に百萬を寄附したとの事、現教會所は敷地百  
 六十四坪、不動産としては畑一ヶ所七十斗落(一斗落  
 は百五十坪)出口利梨氏寄附田等がある。禮山は一  
 面(面は内地の村)一ヶ寺にて人口は九、九四一人  
 中内地人三八七人は全部禮山寺の檀徒である、同  
 寺の初代支部長は睦田祐海而今は六代目(左近  
 師)である。

予等一行は入々にて俗塵を洗ふべく、温湯温泉  
 に途中下車し先づ一浴したが組織は内地の寶塚温泉と同様で浴客は中々に得山ある。津山、戸田、遠水諸氏に迎へられて午後二時天  
 安に暮夕八時より天安金剛講員の奉跡につゞきて一席の法話。

左近支部長



禮山 大師教會支部



禮山 教會所

- 一、創立者 岡本師
  - 一、支部長 左近野道師
  - 一、沿革 大正二年七月の
- 設立にて、初代支部長睦  
 田祐海二代山下弘鶴三代  
 森田善海四代田岡大風五  
 代上林博昭今は第六代  
 り、現在禮山二百九十八坪  
 寄地に宅地二百九十八坪  
 を購入れて教會所敷地中  
 一、功勞者 出口武利、上  
 野爲吉、故池田軍太郎、  
 故原加一郎、伊佐清順、  
 飯田龜吉、萩原弘成、平  
 田康助、推木政吉、鎌木  
 篤彦、伊藤正吉等諸氏

成歌大師教會支部

千 總 主 任



成歌大師教會

前 田 世 田 人 語



- 一、創立者前田利一氏
- 一、支部長 光範師
- 一、主任 千總峰一氏
- 一、沿革 大正十四年四月二十六日開二間中興行二間の大講堂を建て入佛供養修行留來前田氏事務長の觀察を期して千總氏事務主任に就任、同氏所有の地所六百坪を寄附して、大講堂をなす計畫中
- 一、功勞者 敷地寄附者千總峰一、前田利一、千總十郎、會計主任 末松重五郎、大矢竹太郎等諸氏

りて城内に入つた時には朝鮮では珍しい老松は架り渡やかに山を埋めて居り、壯麗の建物輪奐の美は徒らに雨に潤ひ風に颯せて遊子をして坐るに今昔の感に堪へざらしむるものがある夜は津山師の厚志により閉を得て十有四年同師苦心經營の結果出来あがつた寺號名稱の跡をさぐつた。開教地の經營苦心涙なきを得ない。赴任するも前敷主任の失職より信徒の歸依も薄く、一人の熱心者なく喰ふに食無く、からくもさゝゆる朝鮮家は雨は漏り壁は落し涙と共に幾夜を過したか、幸に同年九月現本部長久保信正の來歸あり補助金の下附を請願して翌年四百圓を下附せられ云々

これは津山師の師の一節である、あけて五月十三日津山、秦二氏に案内せられて華紅門、長安門、隨福亭等を見たが繁華の多量の賑囂間の榮々に過ぎなかつた。慶洲の青柳城の今思へば感慨無量である。

水原古義真言宗法隆寺

津山支部長



法 隆 寺

國民學堂生徒



- 一、支部創立者 故金武順道師
- 一、寺院創立者 津山眞龍師
- 一、沿革 明治四十一年十一月京城光雲寺住職金武師大僧教會水原支部を設置し事務主任として羽田教順師開教の任に當り一時鮮人家訓を借受け本尊を奉安同年十二月伊木師事務主任として就任少々不都合ありて西村師と交代是又數月にして辭任前野寛照なる者留守居として在任せしが、大正五年四月遂に退去し同五月一日津山眞龍師赴任前敷代主任の失職より坦信隆師代始め一般の關係もなく實に當道一一人の進拜者もなき有様なりしが爲め時の苦心一方ならざりしが幸に同年九月久保水部長の來歸あり補助金四百圓の下附を得翌七年八月より本堂改築の工を起し敷地三百四十一坪本堂東邊六十二坪を改築し同十一年保安林園有山麓に新四圍牆を建設し同六月高野山管長代津山師法隆寺長和田大國親下の御觀教を受け入佛式を舉行す同年四月總督府へ寺院創立願を提出す同年一月分春觀公佛の認可を得同十五年四月三十三ヶ所を奉安す昭和四年私立津山第二國民學校創立を企圖し同年二月十四日附京鐵道運送の認可を受け元陸軍中將法隆の敷地の家屋一千七百坪の敷地共に無償貸付を得て四月九日開校現在児童數五百四名(朝鮮兒童)
- 一、功勞者 總代 眞山弘、湯淺伊平、秦野八郎、世話師 井上宗、長谷川定男、眞山宗太郎、金長宗太郎、白木原三三、藤四郎吉、西村高平、眞龍十郎等諸氏

つゞいて津山師經營の水原國民學堂を見る、生徒は五十二名、校長は津山眞龍師職員は津山眞龍師の外に鮮人教師一名、教室は元守備隊居住の家屋と宅地約二千坪等全部無償使用、就中感じた事は津山師と共に水原面貌中、鮮人兒童が國所より飛び出して「先生今日は」と挨拶す

る。こゝであつた。高祖大師の「宗義精舎院」に「いろは」の御製作を併せ考へて、細とすつて止まぬものである。

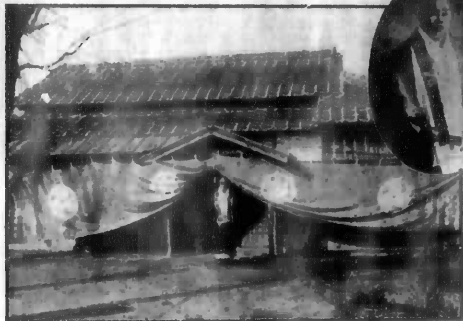
水原面人口一萬五千人内鮮人一萬三千人各宗派寺院教會は曹洞、日蓮、淨土、真宗、東西兩派、基督、天理教、黒住教等各一である。

華城を後に水登浦教會所に向つて出立したのは五月十三日、水原驛に見送つた人々は津山、藥、井上等の諸氏水登浦には掛川尼庵村氏夫妻、二浦氏夫妻山田林兩姉等が出迎へられた。案内せられ教會所に行き法樂例の如く、別室に小憩一間の挨拶を受けたのは午後四時であつた。

水登浦教會支部長は尼僧で而も男まさりの活動家である水登浦は人口總數約二千人、内地人八百、教會所は西本願寺一、日宗一、禪宗一眞言一、天理教一、基督教一、高野山の教會所の如きは檀徒三戸信徒四十戸と云ふ頗る少數であるが掛川尼の努力奮闘はめざましいもので目下掛川尼は敷地を購入して相當なる教會所の改築を計畫しつゝある。水登浦の地は京仁線の分岐點でもあり、又、近き將來には京城市内の電車も延長せられ各種の會社も將來の工場地として計畫しつゝ、あれば有望である。

永登浦大師教會支部

掛川支川部長



永登浦教會所

- 一、創立者 藤村清亮尼
- 一、支部長 掛川明道尼
- 一、内々 大正六年八月十九日の創立にして夫正九年六月二十六日現在支部長赴任將來支部の指定敷地として田三百坪と道内又百坪の宅地を譲入せり現在建物四間半興行四年將來大いに有望の地なり
- 一、功勞者 掛川明道、藤村規矩那、三浦ツヤ子、櫻村ヨシ子、山内マヤ子、齋藤幸吉、林フサ子、小四ハル、柴田喜四郎、柳原ハツ、水柳興三太郎、山岡セイ、小倉由巴子、渡洗キヨ子、許山テイ等 諸氏

仁川通關寺支部



岡本支部長通關寺

- 一、住職 岡本宜空師
- 一、沿革 明治三十二年土地の有志相計りて高野山本寺院より大師尊像を迎へ石井領事の認可を得て教會を創立し原田亮藏金沢親道の二師相次ぎ事務主任として在留せり明治三十八年四月高野山上池院住職岡本宜空師赴任、同三十九年二月現在の敷地約九百坪を購入して原田亮藏を新編し體隆大和上來儀の序に通關寺と命名、大正五年本堂増築等工を公費す、爾來和田性海、彌坂性海の二師を経て大正十一年現住職岡本宜空師に至る
- 一、功勞者 小谷留吉、田中又太郎、藤原實五郎、原田金太郎、清水岩吉、彌久太郎、彌マツ、白神孝一、力武喜太郎、光田太郎、深見寅市、坂田爲市、増井久吉、水村傳三郎、宮島千太郎、堀口平吉、中上藤太郎、岸水保之助等諸氏

余等一行は朝鮮最初の開港場たる仁川に着いたのは五月十四日午後一時、出迎へられた岡本師に案内せられて通關寺に行き堂内を一巡した、高野山としては朝鮮最初の教會所であつて前外務大臣石井菊次郎氏が領事時代の明治卅一年の創立、其の寺名は體隆大和上朝鮮親蒙御進教の際に命名せられたと聞いては一入なつかしく思つた。伽藍は先づ整つて居るが活氣に缺けた所があるかに思はれたのは否か幸に高野山大學出身の青年僧岡本師任職して機關雜誌合掌を發行し私立圖書館を設けて居る、早成早老は日本人の欠點である、願くば青年僧たる事を忘るゝなかれ。

x x x

余等一行は岡本師の厚意に依つて仁川市内並に月尾島を見物したが仁川港は兄等が三つづくに御承知の如く五十餘年前迄は清物浦と云ひ黄海々岸の小漁村に過ぎなかつたが大院長の振興時代に耶教を興隆して同教徒十二万人の大進程を行ひ佛國へ事を請へ、明治四年半角島の一條から水櫃又開界の爲に前後一圓來關しつづいて同八年

には我が國艦隊襲撃事件が起つた、これ迄幸うして領土主義を保持して来た朝鮮が初めて條約に調印し其後京城に事變が起つた時に花房公使の一行が此處から鮮舟に命を託して英艦に救はれ翌明治十六年の一月に開港地となり、日清の役には港外島嶼の海軍を導火線に幕が開き大島放島が此の港から上陸し日露の役には露艦「ワリヤーク」「コレツ」の二艘が外港で撃たされ木城公園が又此港から上陸したさいふ様に多くの歴史を以つて居る。釜山は元山に次ぐ古い開港場である。又仁川の月尾島は仁川驛の裏手から長さ九丁の橋堤で陸地と接續されて居る。空氣清淨道通散策には最も好適の地で右端の小高い丘には雲々たる美術的建築があつて満鐵會社經營の湖池がある、余等一行は措指にひたり、右側海岸に臨んで居る純日本式の展覽室に氷室龍虎、舞衣等の諸島をながめてしばし浮世を忘れたのである。仁川はさすが古い開港場である丈に道行く人も異種異様で各個人種が各國の服装をして歩いて居る。これを各々自建立云ふのであらう。けれども佛法はいづれも具有して居るに違ひない。人口は約五六、三〇〇人、内鮮人四一五〇〇人内地人二、〇〇人、外國人二、八〇〇人、宗派は東西兩本願寺、淨土宗、日蓮宗、金光

龍山龍光寺支部

河原正任



龍光寺

一、創立者 河原正任  
 一、支部長 同  
 一、主任 河原徳木師  
 一、沿革 明治四十二年一月龍山樂町八番地に支部を設立し大正四年に遷りて寺名を公稱し龍光寺と改め大正十一年金燒堀和三年六月初濟王城康福宮度文堂辰武堂二階の下階を乞ひ明朝四年五月十五日龍山後日蓮十一尊地に移轉し軍警駐留部長の襄助を期して佛堂を乞ひ龍山佛供養法會を執行す現在敷地四百八十七坪越物百廿三坪三合四勺  
 一、功勞者 河原正任、河原徳木、土屋四郎、渡邊興三郎、鹽谷秀三郎、福島清一郎、野部信太郎、安藤野郎等諸氏

京城黄金町支部

南支部長



黄金町支所會

一、創立者 新藤賢爾尼  
 一、支部長 南 乘賢師  
 一、主任 新藤賢爾尼  
 一、沿革 新藤は明治三十九年二月以來渡歸して大野の教風意氣に努め大正十三年二月高野山に修行大師御像を建立し孝行で昭和二年十月黄金町大師教會支部を設立出願認可  
 一、功勞者 新藤賢爾  
 現在住僧人 山本忠三郎、河手仲彌、中山安太郎、石井典一、今古實米吉、山名松太郎、小寺進行、中村雲作、横山殿、古家小谷之助、木村清吉、佐々江吉吉、松田寿年、近藤實吉、橋本文六等諸氏

教、メソヂスト、天主教、聖公會、眞宗系各一、天理教六、風開一、でいづれも完成したものがばかりである。

雨中の仁川を後にして龍山に向つた。余等一行は土肥、野部、尾崎等の龍代川原事務主任に迎へられて新築の龍光寺に着いたのは五月十五日、寺は龍山山より新龍山に移轉し、李朝時代の龍武堂(武官の試験場)を本堂に龍文堂(文官試験)を客殿として改築せるもの、實に朝鮮第一である、導師在鮮廿一年の苦心に勿論であるが土肥、野部、野部の三龍代川原事務主任の勢も見逃す事は出来ぬ(軍警部長の親類御遊興を好期として入佛供養法會を執行したし思ひ晝夜兼行の努力を爲せり)と川原、土肥兩氏は云ふ、李朝五百年の祭華を偲ぶべき建築(六十年前露政大院君が民力を竭して再建したるもの)木の音新らしき庫裡、關係者諸氏の此上無き記念である。十五六兩日に亘りて入佛大法會修行、導師草堂全宣式來、淨、

潤本、川原、渡邊、掛川、國光等の講演法話は前後三席に涉りて導師前席講來合計十餘人一般參觀者は四五千人實に朝鮮にては是れしき大法會であつた審判に陰曆三月廿一日を迎へて正御影供を修行した予は龍山に又四月八日の龍堂院議會を迎へて京城各業聯合主

韓、陸軍被洗法育の導師として出席、大阪ならば中島公使も云ふべき京城本町、前後左右は朝鮮の老若男女山の如く半数は内地人中には各國の人々も加はる中を、日本古樂を先頭にひきよきて行くは少年少女の可愛らしき種兒數十名、式衆は金剛峰寺定紋入五條をかけたる眞百宗の僧侶數十名、後につゞくは金剛蓮舞隊、特に薄開教監督の率ゆる國民學堂の朝鮮兒童百餘名が釋尊陸軍の奉讃歌を合唱せること、高野山京城別院婦人會剛山龍光寺婦人會等有志婦人によりて組織せられたる婦人連の金剛講の詠歌を天にもこぎけと奉唱せる事はいささか快念を覺へざるを得なかつた。

さすがは新領土の京城は意外なる事が澤山ある。予は一日總督府學務局柴田喜四郎氏に招かれて思沙門天の開眼供養に行つた。迎へられて佛間に入れば香花燈明は云ふも更なり、佛具六

任主務事



- 新井長平
- 河内傳次郎
- 橋本鈴一
- 今井寅吉
- 菊地源八
- 加藤謙松
- 鎌田直一
- 佐々木右衛門
- 森吉磨

- 一、創立者 水野光仁師
- 一、支部長 海光範師
- 一、創立 昭和四年九月十日認可
- 一、發起人 新井長平大妻
- 一、河内傳次郎、加藤謙松、菊地源八、高木三平
- 一、敷地 六十三坪
- 一、建物 二十坪
- 一、現在世話人 河内傳次郎、新井長平、菊地源八、加藤謙松、森吉磨、佐々木右衛門、鎌田直一、今井寅吉、橋本鈴一、等
- 一、沿革 昭和四年七月新井長平夫妻の提議にて水野光仁師京城昌成洞七十三番地に六十三坪の地所にて二十坪餘の建物を買収して支部設置をなす

京城別院



堂木假

- 一、創立者 金武風道順
- 一、發起者 放園宗太郎氏 故北野善道氏
- 一、開教監督 澤光通師
- 一、沿革 明治四十年金武順道師赴任關北野二氏等と協力して一寺を建立し雲照大和上滿慈總教の折柄に先雲寺と命名せられ寺號公稱をなす監督官廳の認可を得て大正十四年三月澤師風山より當地に赴任徳本山金剛華寺より補助金三萬圓を得て高野山京城別院創立の計畫をなし今日に至る現在敷地千四百八十坪建物假木堂舊本堂納骨堂守室庫程三種國民學堂を併置して現在生徒百十名(朝鮮兒童)
- 一、功勞者 故金武順道、放園宗太郎、故北野善道、小井藤右衛門、城台一六、池尻林太郎、尾崎勝三郎等諸氏

寺は莊嚴せられ、三尺疊の大日如來の尊像加ふるに三尺以上もある盤上鐘がすゑられてある。主人は三十前後の青年、澤師は云ふ一柴田君は製染衣すればその儘此所の任職ちやがまだ妻君の同意が得られぬので在俗の身である。予は思沙門天の開眼法を修し駕き供養を享けて龍光寺に歸つた。歸途京城本町の朝鮮館を見る、客の應接其他悉く内地の三越と異なる所であり、案内係の掛川尼から彼等は皆地鮮人ばかりでありますと聞かされた。朝鮮人も教育すれば一等國民たるの素質は十分にある、誤れる李朝五百年の政治の罪は實に大なるものがある、と云ふ事を思ふて予は内地の政黨政治の弊害を追想せざるを得なかつた。

予等一行は今日いよ／＼李朝五百年の舊都京城に陣をすゝめることとなつた。京城は朝鮮の大朝李成桂が開城で即位するや王師無學の説を聞いて京都の講を決し先づ太田附近の龜龍山麓に冥都しやうとし

たが參制御觀の上表によりて濟陽定都の講を翻し白岳の南山麓の北に都城を造營した、之が今日の京城である又即位三年十月百官を率いて此の地に涉り白岳の南麓に宮闕を營んだのが即ち景福宮で今日の總督府の所在地がそれである。五年正月から城廓の築造に取

か、り城壁の高さ二十八尺餘、其周圍四里廿六町城壁は北は白岳、南は南山、西は仁王、東北に駱駝の山嶺を繼ぎて溪を跨り無窮長蛇の如く漢口の水は城外の東南一帯を繞り山河縹緲の形勝でさすがは李朝五百餘年の都城だとなつてなつかれる。然も此等の工事には職林各道から二十萬に餘る賦役夫夫が集つたと云ふから内地の大坂江戶城等の築造と比通すべきものである。然も此等の工事には職林各道から二十萬に餘る賦役夫夫が集つたと云ふから内地の大坂江戶城等の築造と比通すべきものである。

### 開城大師教會支部

一、創立者 英 醫學師

一、支部長 目下欠員無任

一、沿革 英醫學師の創立にして後陳道師ヲ勝つて之

今日に置れり現在敷地五百三十二坪建物六十坪坪を

有す

一、功勞者 久野傳次郎、都築武助、森本芳松、八木

有、一、後藤要助、後藤藤三郎、櫻庭電次郎、久保田

新三郎、久保田龜之助等諸氏

官會職中との事、ついでに學務、内務、兩局長内地の大臣及び學務課長等に敬意を表し府内高等官會堂にて柴田属の供養を受けついでに恩政殿、勤政殿、慶會樓等を見た、就中慶會樓の如きは十五尺の石柱四十八本を以て支へられた大樓臺で階上階下君臣の宴會場にて李朝末期の代表的建築と云ふことである。柴田氏の好意によりて昌德宮内秘苑を見た、苑内は老樹綠蔭く樓閣所々に散在し泉水遊る所怪岩奇石がある約三尺餘の瀾の側に

飛流三百尺、通落九天來

又樓閣の柱には

捲幔山川入鏡中

と記してある如何にも朝鮮式でのんびりとして居る、隨處黄金明教會所を見る、創立は昭和二年十月事務主任は新藤智昭老尼、敷地百貳拾坪建

物は本堂、參拾坪、庫裡拾坪山本、小寺、中川、河手等の密代諸氏の熱心は又格別、京城の天地弘法大師の教風いよくさかるべきを信じて特に智昭尼の努力は往十里新村等に及びこれ又近き將來には教會支部設置の時期あるべきを思はしめた。海關監督は從來は一身上の關係より不本意の事の多かりしやと思はる、點もあれども今日此頃の海關は社會的活動日も猶足らず活動そのものゝ如き有様であるが過去の事が論じて意にまかせぬ事もあるやに見受けるが否か、余は切に宗教界の爲に海關の現在を認める人々の多かれかし祈る者である。川原師に案内せられて數千坪の陸軍用地「海關の主催せる社會事業の爲に總督府より無償貸附せられたる」を見る海關監督が私財數千圓を投じて築造中なるプール、園内自動車道、鮮人不良恩化事業(目下十七名)國民學堂、生徒百拾名かゝる中にいさゝか恨みとするは數年來さげつゝある京城別院の未完成である、夕六時より京城第一さも稱すべき聖惠禮堂園内南山莊朝鮮館にて總督府中司、柴田二氏、龍光寺密代、土肥、鹽谷、野部三氏、別院信徒大熊、小林、氏等相會して余の歡迎宴を開かれたのは嬉しかつた。宴なかばにして海關監督 正司氏、土肥氏等より眞言宗、現代に生くる道につきて種々注意を與へられた事は感謝に堪へない事の一つであつた。興は盡きないが別院に於ける夕の法話もあつたので中途辭去した。

開山心遠亭は先年我が前雪照大和上が朝鮮佛教の改革を唱へられたる時、開山日餘に及んだ記念の家、主人井上宜文居士は余が三十年來の舊知、加ふるに井上居士の實母貞徳院和貞妙香大師五月十五日、開山心遠亭に於て閉き海關と共に一清樓を訪ひ讀經回向、つゞきて居士三千幾年目の對面開山の心遠亭は漢江を一望に眺め園の中央に、六本ある云はれた、自松(總督府朝鮮善寺)(京城に來た人の松として觀るのは白松であらう。それは通義洞、苑南洞、松松洞、齋洞、内四洞、開山元町まで六本ある、しもふり松け西土にて白松といふものなりさいへり。或は常の松の如くにして白き粉のるものなりとも云ふ、今云ふ霜降松は五葉の松に似て葉裡のゝたつて白きものなり云々)ありて主人の、ころゆきを俣ばしむるものがある。井上居士は朝鮮人の教化には朝鮮僧侶の養成にまぎるものは無いと語られた、而も其の朝鮮僧侶は幼少の頃よりと附言された。朝鮮人は愛すればなれ怒れば怒む國民なりとも云ふ。恒産なきものには恒心は無い朝鮮の國民を教化の出來ぬ國民なり云々人もあるが予は決して悲觀はせぬ、先づ鮮人教化の第一義は勸と懲と貯蓄であると思つた。予等一行は總督府柴田屬及び河原、水野、掛川等諸師に見送られて高麗の大祖王建が神將より身を起こして厚澤の徳を以て素心を得得爾の後を襲ふて位に即き天下に號令した松都(開城)に向ふた。開城は一名松都と云ひ、高句麗開城

白采人黨等の特産地である、譯には總督府よりの通知によりて郡司代及び久野、小野田、森本、久保田等諸氏出迎へられ宣法寺に入る、同城は人口四六、三五〇、内鮮人一、五〇〇、外人一〇〇、教會所としては淨土宗、曹洞宗、日蓮宗東西兩本願寺、等各一、宣法寺は敷地五九七坪、檀徒十五戶、信徒三百餘人、支部長は英隆道師である。予等一行は森本氏に案内せられて善竹樓(善竹樓には



夢周の血氣が今に残つて居る。滿月婁(高句麗)王城の跡で礎石のみ残つて居る等を見た。そも松都は高麗の大祖性は王名は建松  
建輝、松嶽山の南に生れ其父隆と共に弓裔の臣となり功をたて、大志操となる。後金城の大官となる。建の名望段々高く、上下達に  
從つて申嶺裝、立腹等に推戴されて鐵原に即位し高麗と號し都を松嶽の下に移した。

弓裔が新羅に背いた後に又甄賞が新羅に背き全州に後の百濟の旗を揚げた。新羅は眞聖王祖基奉神徳の二王を経て眞明王に據り  
宴遊に耽り美姬を集めて長夜の飲を爲す此の機に乗じて甄賞が編部を獨ふて眞明王を殺し妃を奪めて王の弟なる金博を立てた。これ  
が即ち新羅の末王敬順王であるが二國と對峙して併立する事が出来ず百三十里の山川を踰へて高麗に朝見する大祖が一同を柳花宮  
に迎へて長女を以て其の妻にした。新羅が亡びて後一年にして百濟が亡び初め甄賞が第四子金剛を愛して之を立てんむると長子神  
劍大に怒つて金剛を殺し堂を金山の佛寺に幽閉した。實は妻子と俱に隱に逃れて高麗に入り征討の事を請ふた。王は快諾して直ちに  
三軍を率ひて百濟を攻め神劍を降伏した。天下統一して卅二代綿と續いた。潘王二代を加へて卅四代四百七十五年、卅二代恭讓王柔  
謙にして佛を奉ずる事非常であつたので忠臣鄭夢周、佛を己めて無教に……王は頑として聞き入れない。所で王に代つて國政を執り  
學校を興して人材を養成し義倉を建て、窮民を賑はし水站を設けて漕運の便を計つた。此時委成桂が軍功を以て勢力日に盛んとなつ  
た。王も又深く成桂に依頼して文武の大權を成桂にゆだねた。成桂股肱の臣鄭道傳、趙浚、南園等輔佐に參與して推戴の志を抱いた  
がこゝに文武兩派の争奪となり、夢周等の文班派が反對し結局兩派相争つて武班派の重臣は殆んき逐はれて文班派夢周一人德器を以て廟  
堂に立ち成桂と相並んだ。會々成桂其子興が朝見して歸る所を海州に迎へた、其時に夢周の腹心の者をして成桂を殺させやうとした  
が事敗れて成桂を……た。夢周は三日も食を取らなかつたと云ふ。成桂は五子芳澤其弟和婚の生濟等を招いて夢周殺害……處が成桂  
の兄元桂の婚仲良が此事を窃に夢周に漏した。夢周は先方の贈つ玉を削いでやらうと成桂を訪問したが成桂は何喰はぬ顔で薄山靈廟  
して歸途、善竹橋の上で要撃した。成桂は即時乘上して夢周が罪人を黨庇して陰に忠良の陷陥るから天に代つて誅したまひ……恭讓  
王も原州に逐ひやられて三年経て薨去した。これで高麗は亡びた譯である。松都の名所として、善竹橋滿月臺の外に城廓、大祖の關殿  
南大門、朴淵瀑布、觀德亭等の舊跡があるが就中觀德亭は城内子男山の中腹巖石疊重の上において開城全市を眼下に睥睨することが  
出来、地形起伏高低の狀は頗る妙を極めて居るが往昔は郡司が此の觀德亭に登りて民衆を眺め金滿家を見れば強いて罪科を附して金

品を徵發したといふので中興郡司に此亭に登ることを禁じたことがある。又朝鮮家屋の粗雑なのは美家を所有すれば郡司から無實の  
罪科を附せらるゝ關係からであると聞く、朝鮮には在倉宗五郎が居なかつたと見へる。午後八時より溥開教監督の講話につゞきて一  
附の法話聴衆三千餘名。

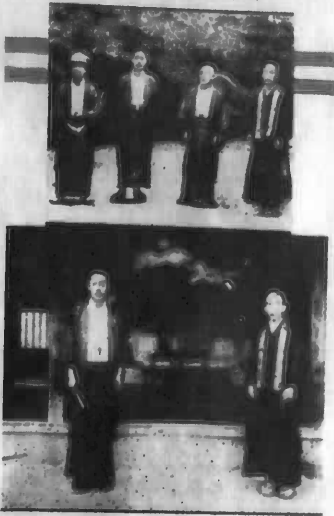
余は出發の途中小野田氏の畫力に依りて朝鮮特産の開城人蔘の栽培を見た。人蔘は人蔘又は人蔘と稱ひてバナツクス、ギンゼンダ  
三稱へ本草には年深くして長成なるものは根人形如し故に、人蔘と云ふとある。内地でも福島縣、島根縣等には相當產出し又近來  
米國の如きは大々的に栽培して產出額は遙に朝鮮の上にあるやうであるが人蔘と云へば朝鮮人蔘のみ名聲を擅にして居るのは藥用と  
して効驗顯著なるが爲である、各地の價額の差は滿洲產斤八圓、内地產五圓、米國產二十圓、開城產百九拾圓である、人蔘栽培も朝  
鮮の非政の爲に一時荒廢して潰滅せんとしたが明治四十一年紅蔘專賣法を施行して以來漸次耕作地面積が増加して、今日は百卅萬圓  
(間は鮮幅三尺長六尺)耕作者百廿餘人、年々新設する基圃は三十萬圓に制限して居る位である。

開城を見て特に眼を引くものは朝鮮の古風の保存せられて居る事である。予は釜山の上から見なかつた長衣を以て面貌を窺ふ婦人  
を見た、其の容顏野山の雪衣と同様で濶平の頃の内地の風習を思はせるものがある。沿嶺各都市の内に見ることの出来ぬものを開城  
でのみ見得ると云ふのは開城にはさすがに商賈にかけて熱心な支那人でさへ競争が出来ぬ程鮮人が商賈に熱心なので内地人の移住者  
が少ないと云ふ結果と思ふ。人間万事塞翁が馬高句麗朝が亡びて李朝の天下となり政策上李朝は高句麗朝の遺臣は登用しなかつた爲に  
農が商となるより外は無かつたのが開城人の農業と商業に熱心なる原因である、其の結果は自然金滿家も多く五萬十萬と所持して居  
るものは普通である、朝鮮町として家屋の揃つて居るのは鮮内第一等である。

(八)

久野、小野田、森本、久保田、諸氏が内外共に宜法寺の爲めに盡力せられて居る事は感謝し堪ひなかつたが予は諸氏と開城驛アラ  
ットに別れ沙里院驛乘鞍野黃海線にて競争に着いたのは五月十九日の午後三時、出迎へて呉れた眞海支部長、總代中村氏等に案内せら

眞海支局長及總代理



支部會所

一、創立者 津山眞海師  
 一、支局長 眞海眞海師  
 一、青年 大正二年現永原庄隆寺住持津山眞海師  
 會支部を設け、大正五年村島眞海師と交際、九年一月に於ては  
 四月眞海現支部長就任今日に至る。其支長所在地は眞海師の  
 口にして是より、實地にて何宗の寺院敷置し、之を以て、眞海  
 館長は、大正二其敷置を讀み、南門清川松長五郎北野三郎が支部  
 北東西約七八、四方の本地人を相手とし、二月廿日眞海館を定  
 て、女舎佛壇をなすと共、出板して其地、眞海館と名づけ、  
 り北中野清川松長眞海各一、は日下朝鮮宣道株式會社、唯  
 眞海館を敷置中にして、昭和五年度には完成の見込なり、又北野  
 は朝鮮三大平野の第一にして、教員の移民中眞海師の寄附は、  
 り百餘名の教會員あり、眞海師、眞海師、眞海師、眞海師  
 の熱心なる轉換により、益々厚客の集時は、百里の道に遠  
 せし支部へ、詣する有様にて、此外にも同地に大師信者多く、是を  
 一教會を設置し、之を以て、  
 一、功勞者 中村六次郎、石澤山松、日下新、岸木辰平、牧野  
 田喜太郎等、諸氏

れて柳家旅館に這入つた。裁察本野は方十里、朝鮮三大平野の一つである。水利組合の發達はこれ又五十年後を思はしめて愉快なものがある。沙里院驛から乗つた眞海鐵道の社長は大川平三郎氏である。裁察は人口一萬中内地人は百五十八人云ふ一小都會であるが、基督教徒の力を入れ方は又格別で、佛教寺院敷置所は高野山が一ヶ所であるが、基督教會は三ヶ所、同教立學校は八、生徒数は八百人以上。泰安北道の宜川と共に北鮮に於ける基督教徒活動の有名なる都市である。思想は尤も陰謀排日の中心であると聞くが、基督教の盛んな土地と排日思想の陰謀ミが必ず關係を持つて居るのは不思議な事の一つである。基督教は何故に思想と陰謀に導くのであらうか、排日を教へるのであらうか、基督教の反省を促すと同時に、佛教徒の奮起を要する點では無からふか、同地大教師會員は僅かに六十九名、予は一席の講話をして大僧主義を高揚した。

眞海支部長に案内せられ中村、柳本等諸氏に見送られた予等一行は土佐野、井原、長谷川、青木、藤本、藤井、川口、東、眞海師、松林、實藤、中藤等の世話人及び金剛職員數十名に迎へられて、二浦月峯山に着いた。二浦は三菱の製鐵所によりて存在を認められて居る土地で、軍縮と財界の不況とは深い關係をもたらし、昔日の活氣は無いが、さりとて北鮮の要浦たるを失はない特に月峰寺は町の東北端に建ち位して、二浦將來の公園としての價値を有し加ふるに土佐野、井原、長谷川、青木等の世話人諸氏を有するは寺號公稱の近きを思はしめる。特に井原氏等の金剛職員の数多くは非常なものである。夜は一席の法話聽衆約百名、事務主任は青年眞海眞海師、製鐵所の煤煙を後に、二浦を辭した予等一行は百年の知識の如き態度で送迎せられた。土佐野、井原、青木、長谷川其他の諸兄弟の上に幸あれかしと祈りつゝ、黃洲にて本線に乗替、平穩に着いたのは五月二十一日、朝鮮開教に従事するは二十三年、國家安泰なれかしと祈る心から平壤の中央に敎地七二八坪（内海師寄附）建坪九十八坪（佛子寺）の國壽寺を開創せる内海眞海師は停車場に出現へられた。本據は日清戦争當時支那口で眞海眞海師とよびて予等に眞海深

兼二浦大教師教會支部



兼二浦教會會所

世 話 人

- 一、創立者 眞海眞海師
- 一、主任 眞海眞海師
- 一、沿革 大正六年十一月
- 一、眞海師開教事務主任として眞海眞海師を駐在せしめて、同七年四月眞海師を支部長となし、十一月現在の堂宇を建立し、敎地二千四百坪、建物三十五坪、近々寺號公稱出願の儀定
- 一、功勞者 土佐野國太郎、井原伊之助、藤本ツネシカキ、眞海眞海、東シカキ、長谷川佐内、眞海眞海、中内松太郎、青木伊勢治、田井利平、吉岡知之、實藤登吉、川崎一、大西眞海、眞海キキ、小島興一、於久七郎、清水持、金馬千代等、諸氏
- 一、境内は風景佳にして、眞海は四群一の稱あり、四季花を引く者多し

平壤國泰寺大師教會支部

内海住職



國泰寺

- 一、創立者 内海聖賢師
- 一、住職 岡 一、沿革 明治四十年四月
- 内海師開教、大覺寺漢教會所設置同年十月二十八日國泰寺と名稱を變更し大正二年八月二日高野派に所属變更、大正十四年六月二十二日附屬管府より公稱寺院認可敷地七百二十八坪は現在内海師の密附なり建物九十七坪七合五勺の本堂庫裡は棟五作りにして將來有望の地なり
- 一、功勞者 内海聖賢、故久保須吉、中村海吉、宮崎榮太郎、田端保松等諸氏

平壤に都して檀君と號す、是を前の朝鮮とす。周武五商に充ち箕子を朝鮮に對す之を後の朝鮮と次す云々

と、朝鮮開國四十年其の最初の都は平壤である、又明治廿七年日清戦に干戈を交へんとするや、日本は京城に濟國は平壤城に據り互に兵を集中して相對峙し九月十六日未明、日本軍萬葉堂々平壤を占領した日本戰史上光輝ある土地である、予は内海老師の案内にて國泰寺に這入つた、師の談によれば平壤内には寺院布教所として淨土宗、眞宗、日蓮宗、曹洞宗、臨濟宗各一、古樸眞言宗も今一ヶ所位はありてもよからんとの事、猶、附近順川价川の兩町にも是非共高野山の寺院を新築したしと語られた、予は切に内海師の盡力を希望する。五月廿二日早朝内海師に案内せられて牡丹臺、乙密臺、七里門、玄步門、練光亭、淨碧樓、總羅島等の名勝古蹟を見た、平壤の土地は大同江の長流

に臨み、丘陵を負ひ、平野其の前面に展開して鮮内の屈指の勝景である、人口一、一九、七三〇人、中外人八六〇人、内地人二、四、四三〇人、平安南道廳、旅團司令部、警察法院、衛戍病院等がある、鎮南浦は京義線平壤より分岐して平南線を西走すること三十四

港に通ずる便があるので俄に一大商港となつたのである、同地の高野山は田和密乗師の開基で敷地は一、三〇〇坪、本堂は煉瓦建六十六坪、庫裡一三坪密藏木山師建立である一行は五月廿二日内海師に送られて鎮南浦に向ふ、教會教師松本某

鎮南浦大師教會支部



鎮南浦教會所

- 一、創立者 田和密乘師
  - 一、支部長 渡邊英法師
  - 一、沿革 明治四十三年四月十三日田和密乘師、同月二十日元号町一雪地に經教會所を設立爾來筑紫宗師、坂田覺法二師を経て第四代管野經師となり久原總務株式會社長代理小瀬元吉氏より一千三百坪の土地の密附を受け大正九年十月管野木山師赴任管野師と交代大正十二年合開宗の補助を得て(本堂庫裡)煉瓦建七十九坪を増築し現支部長渡邊英法師に至る重開宗總務部長職務の記念として大衆寺と寺號公開出版の決定
  - 一、功勞者 故田和密乘、管野經師、管野木山、馬場康之、小西仙吉、伊丹徳平、村上順平、古川彌八、村上マユ子、長榮ユリ子等諸氏
- 鎮南浦は平安南道の西南端に當り大同江江流噴湧すること二十哩の北岸に依り西歸唯一の貿易港なり西は黃海を隔て、大連芝罘青島と相對し北は鎮南浦に面し南は大同江に面し海濱地帯に於ては平安南浦、黃海道の山岳圍繞して自然の防禦を形成し紅潮千瀾の味と雖も一里餘に及び其水潭は十五畝乃至一十畝を有し一萬噸級の巨艦を吞吐するに足れり築港は建設設備安備し水陸の連絡により物産の輸出盛況を極め就中米は年百萬石を突破して貿易額も年々著しく進展し警備隊の換装も感ずるに至り昭和四年鎮南浦警察隊成同盟會の援助により總額三十七萬の同庫補修を發行向ふ五ヶ年間計畫にて昭和四年四月より第二期開始し居たり敷地は三十四坪にして大平壤にして明治三十年の開港なり現在人口内鮮人約三萬に達し物産の主なるものは米大豆果實棉花にして主なる貿易品は三和蜜糖類、製鹽等なり附近に三和花園寶林寺(古代朝鮮寺)龍興院、寶林院等あり。

は平壤迄、渡邊主任(科)伊丹、柳、延田等の數代世話人信徒婦人會員等數十名は會談を先頭に驛まで出迎へられた。鎮南浦高野山に入れば、川とは思へぬ鎮南浦築港は一望の中にあつて大いなる精米所、工場、大商船の無數に展開せる様は國威の御光として旅情を慰めるもの一つであつた。夕一場の講演聴衆又多數唯徳語だけは熱心な餘り御誦歌連中が二派に別れて競争の形になつて居た事である。予は伊丹氏と共に晩の三時迄兩派の人々を會して誦歌奉唱の主題と信仰の目的より説いて兩派の會々の合流をす、めたがさすがは信仰上の競ひであるから有難の議論も無く融和して益々信仰増進に努力する事を誓はれたのは嬉しかつた。鎮南浦には日蓮宗、兩派本願寺、曹洞宗、淨土宗、天主教メソヂスト、天理金光、各一の教會所を有して居る。

予は五月二十三日迎へられる儘に同地成功者たる青本健三郎氏邸に行く會する人山七兩會代表、赤岩敏平氏、京城日報編輯瀧田氏、平塚毎日、山田天山氏等である。山田氏先づ口を開いて世界的傳人弘法大師を宗祖と仰ぐ高野山が二百内外の信徒を有するのみにて満足せるは遺憾であると、情理を盡して今一ヶ所の高野山大師教會支部の新設を高潮せられた特に其等の有志が悉く他宗他派の人々であること、就中青本健次郎氏の如きは熱心なる日蓮信徒でありながら弘法大師の爲には相當の犠牲を拂ふことを辭せぬこと云ふ熱心には

鎮南浦府三和支部



長部支本松



- 一、創立者 松本浩海氏
- 一、支部長 同人
- 一、現總代世話人 青本健太郎、松岡松三郎、赤岩敏平、田淵智次郎、山田市太郎、田中三八等諸氏
- 一、沿革 大正二年松本氏鎮南浦府龍井町二十七番に會合して高野弘法大師を奉安し、昭和四年六月學部部長の講評觀察遊教の際三和町青本健太郎氏の邸に會合して愈々支部設置のことが決定し、同年七月高野山大師教會に出願し同會九月支部設置認可せらる。

定州大師教會支部



本國支長



定州教會所

- 一、創立者 古城、橋本、力武、濱口、太田五氏
- 一、支部長 本間眞道氏
- 一、沿革 大正三年横田師定州面に開教し管轄、山本二師を経て富田師に至り大正十四年五月二十六日教會本部より五百圓の敷地購入補助を得て百八十八坪の土地を購入し現在(一庫物二十坪)に至れり。
- 一、功勞者 前記創立者の外中藤吉太郎、古城與八三宅基次、力武ヨネ子太田屋二等諸氏

予等眞言宗宗徒の無能を指摘せられる心地がして恥かしくもあり、又痛しくもあつた。

大觀講、金剛講等の各講員、及び青木、伊丹、仁科、田淵等百餘名の熱心なる見送りを受けて定州に出發したのは廿三日正午であつた。定州は日露の役彼我騎兵最初の衝突地であつて北方遙かに加納中尉の戦死記念碑が聳へて居る。定州高野山主任 本間師、宣川、高野山主任、山本師、同窓代中藤氏等外師人會員數十名の人々は首を長くして千年來の知識を待つと思ひで出迎へて呉れる。同夜一席の法話をしているのは鎮に一泊、鎮主は日蓮宗の體徳でありながら弘法大師を信仰すること、特に深く定州高野山の數代である、新義洲の日蓮宗僧侶の曰く「眞言宗は誠に幸福である朝鮮列所内地人の居る所大師講の無い所は無い」と手に物語つたが眞言宗宗徒は此の言葉を何と聞けばよいであらう。

の五月廿四日である、例の如く本間、中藤其他師人會員數十名は驛に見送つて呉れる。宣川驛には驛長以下各講員宣川支部數代伊藤、佐々木、米村、村上、永井、藤原、山本、赤木、木内、岸本、高木、久々津等數十名の人々が迎へて呉れた、同地は開城、義軍

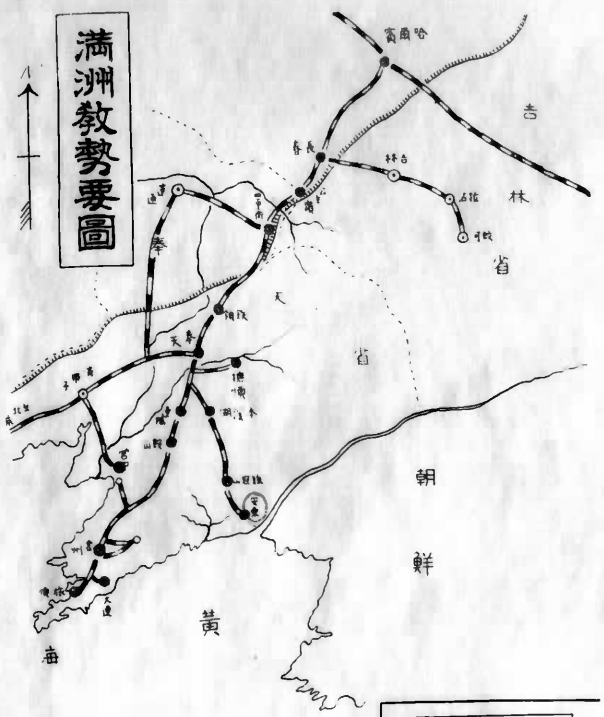
予は宣川支部長山本師に導かれて宣川に向つた



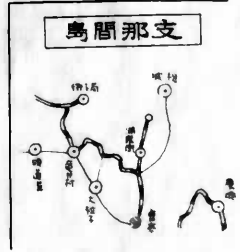
く思ふ、詳述をれいづれも努力せよ。

朝鮮は細細天陸東海岸の一半島を面積一四、三二二方里、略内地の本島と同じく區劃は十三道に分たれ各道を通じて十三府(市)二一八郡一島二、五〇〇面(村)になつて居る。氣候は一般に大陸的で寒暑の差著しく三寒四温云ふて三四日仕して寒温交替する。年平均雨鮮は華氏五十四度(内地の福井地方と同じく中部は五十度内外で信洲地方の如く北部は四十六度内外で關領地方さほゞ同様である)と朝鮮案内に記してある。言葉は云ふ迄もなく朝鮮語であるが鐵道沿線は全部日本語で沿道を離れて奥地に導入つても二十歳以下の青年は悉く日本語に通じて居て旅行上何等の不便を覺へない。總督府は一面(村)一校を設け奉じて日本語で教育をして居る。今後三十年を經過すれば人情風俗言語等に於て内地と何等相違する點は無くなるであらう。交通も鐵道延長一、四二〇哩、私設鐵道又五一四哩に達し畑たる一二三等道路は一、七三二萬米突到所人力車自動車の往來せざる所は無く實に豫想外である。

## 滿洲教會誌



滿洲教勢要圖



滿洲教會誌

(十)

朝鮮觀察を終つた予等一行は今日は鮮山に名残を告げていよいよ滿洲に一步を進めた。新義洲高野山事務主任伊東氏に先導せられて肥綠江鐵橋上を人力車を走らす。人力車も朝鮮式と滿洲式とは相違がある。道路の關係風俗の關係から來て居る朝鮮の人力車は内地同様であるが滿洲の其れば腰が低い。滿洲の道路は支那人の個人主義にわざわひされて悪い事一通りではない。支那人は自己の思ふが處に歩行してそれが細であらうと田であらうと關する所ではない。日本人には不思議に思ふが支那人には普通の事である。かゝる觀念は自然と都市にも普及して街地の道路も凹凸限り無く我が日本の人力車の様な腰の高いのでは轉覆する恐れがあるので自然に要求する所人力車は腰が低く車輪が小さい。延長三、〇九八呎の鴨綠江鐵橋を渡りていよいよ支那の領地に進入る。安東縣支那市街には各戸門柱に青天白日旗がかざられて居る。中華民國革命の總帥孫大人逸仙の移靈祭に對して敬意をさしつけての事である。支那には妙な風習があり死者の取扱いに非常な相違がある。いささか支那の風習を記して兄弟の參考にしよう。

支那では病人が醫者から死の宣告を受けるとまだ息のある中に座敷から土間に下して臺を置いて息を引きこらせる。又棺は人の死なない中に準備するのが死者に對する禮として居る。亦死者が父母若しくは祖父母であれば出来るだけ頑丈な板で棺を造る。張作霖の棺は四川省から出た埋木で作り値は約二萬圓であつたとの事である。大概は屋外の家棟より高い假屋を作つて七日、九日、十一日、十三日、若しくは一箇月二箇月と宅に置く。普通は死後三日目を接立と云つて親戚知己が悔に來る日として居る。此の日には門前に族を立て樂隊を配して喪主及家族は棺側に叩頭して悔み客に接し夜は僧を頼んで遺經する。出殯の前日は普通圓帛と云つて御馳走をして饗應する。棺は野原や道側に置いたり又寺に預けておく場合もある。予等一行は奉天より長春の間三長春より哈爾濱の中間

安東縣大師教會支部

まで汽車の沿線にアンペラに棺を包んで放棄してあるのを見た。葬式後三日目に墓参りをする。之を暖慕ミ云ひ以後三七日五七日七日に墓参し且つ時々命日には線香ミ紙ミを持参して之を焼き叩頭の禮をする。喪服は父母の時は三年着用する。子供の死んだ時は棺も作らなければ葬式もしない。痘等に包んで野原に捨て犬や鳥の餌食にする。家人は時々見に行くが其の意味は犬や鳥が食べるかきうかミ云ふ事を見るので犬や鳥が喰はないと罪が深いミ云つて悲しむのである。

安東縣支那市街は戸ミミに中華民國國旗紅旗を交又してか、けて居る。張學良が民國中央政府に屬した集會である。予等一行は滿洲八景當選第一位の鎮江山公園を左に見大體的な滿鐵經營の諸施設を眺めつ、安東縣高野山に入る、安東縣は人口總數六〇、二三人中内地人一、三三六一人、朝鮮人七、六二五人、支那人附屬地内四〇、六三九人、外人二人、教會所寺院は東西兩本願寺、淨土宗、日蓮宗、曹洞宗、臨濟宗、眞言宗各一、金光教一、天理教二、基督教二、我が高野山は明治四十四年の創立で開基は田和齋兼前現在敷地一、〇四六平方米突(一)、は現奉大曲業會館所會頭庵谷枕氏の獨力寄附で建物は本



安東縣教會所

- 一、創立者 故田和齋
- 一、支那長 龜山淨圓師
- 一、沿革 明治四十四年九月六日田和師安東縣に開教し翌四十五年八月開教會館大正八年龜山顯光師來任寺門興隆中運化大正十年三月第三世として水澤隆盛師赴任大正十五年春敷地一千四百六平方米餘の寄附(庵谷枕氏)を得て本堂庫裡を改築し昭和二年十月井手畑達道師交代し四年四月第五世龜山支那長の赴任によリ井手畑師は内地に轉住す
- 一、功勞者 故田和齋、庵谷枕、水澤隆盛、故津田才吉、故田中點、故須藤平太、故井仲次、影山常三郎、中川繁義、田邊兼治、津田倉一等諸氏

堂兼庫裡、聖徳堂、鎮守堂各一字公稱寺院としての資格は十分に完備して居る、現在支部長龜山淨圓師は檀信徒總代ミ共に本年中には寺號を公稱する事を誓言して居る。

安東縣には非報道して置かなくてはならぬ事がある。それは驛を降りて滿鮮各地と同様に高野山へ行ひミ車夫又は運轉手に命ずれば必ち鎮江山高野山に行く事である。鎮江山は儘かに臨濟宗であるが我安東縣高野山創立以前に弘法大師を祭りて地方の人々を弘法大師の名のもとに集め寺院の宗派は其僧侶所屬の宗派にしたので年々御影供萬端は眞言宗同様に執行し俗稱も鎮江山高野山と稱して居る、我が古義眞言宗の高野山世話人は臨濟宗の鎮江山高野山(ミ)稱し弘法大師の信徒を集めて盛大に祭祀するので肝心な高野山はいささか浸脚され氣味で困るから何ミか取締の方法は無いかとこの事、この一事からしても弘法大師の御徳の宏大ミが知れる、かゝる宏大なる御徳の所持者たる高野山を所有する高野山が各地共見劣りのする状態に置かれて居るミ云ふ事は何と云ふ氣地が無い事であらふぞ。これは果して誰の罪であるか、單身異稱の天地に布教して居る我開教師のみを責めるには餘りに重大に過ぎはしまいか。我が古義眞言宗の開教政策に欠點があるのでは無いかと云ふ事を思ふのも必ずしも無理ではないと思ふ。布教當局の一省を希望する。

予等一行は安東縣高野山にて記念の攝影を爲し龜山、伊東兩支部長龜井、田邊、津田等の世話人に見送られて安東驛に向つたが途中瀧澤驛事業の大規模なるミ支那人街の逼置がすべてピストルと銃ミ所持して物々敷く警衛して居る事には驚異の感を抱かざるを得なかつた。安東驛は大陸的設備がミ、なつて居て有事の場合ブラツトホームの中に何萬ミ云ふ人を收用し得るミ聞いては爲政者の苦心の存する所を思はざるを得ない大きいと云ふ事ミいさ、か粗雑であると云ふ事は滿洲氣分とでも云ふべきであるかも知れぬ。沿線の左右に展開して居る農地も自然大陸的で田一枚畑一枚悉く何反歩何町歩に涉つて居る、小石の集つて居る所が降雨の時の川で馬車の轍の後の附いて居る所が道路ぢやなと思はせる。山は又一本の樹も無い草も無い。山高きが故に草からず木あるを以て草ミミ云ふ草が真なりミすれば滿洲の山は餘り高い山では無い。然し金嶺等の諸嶺山が薄山ある事を忘れてはならぬ。沿線は人家交々しく、かゝる茫漠たる原野が離れの力によりてかくの如く耕作せられつゝあるかを思ふ時中華民國人の勞働の偉大さを



本溪湖石山寺大師教會支部



水 池 支 部 所 會 教 寺 山 石

- 一、創立者 坂東謙道師
- 一、住 職 水池海賢師
- 一、沿革 大正五年大師教會を設け敷地六百六十一平方米餘を得て大正九年本堂庫裡等、建築をなす
- 支部長は初代坂東謙道師
- 二代菅野経輝師三代伊東
- 親旭師四代水池賢海師
- 一、功勞者 川井米藏、岡本善、大塚次太郎、結城克美、大浦喜平、加藤龍二、小原房二郎、松下富右衛門、川口熊布、松田忠左衛門、中井伊右衛門、富田半治、西松廣馬、等
- 諸氏

ナベシ、爲す一派と神社を山の中腹に移轉して跡地に故大倉喜八郎翁の銅像を建設せんとするものなりと解して移轉に反對する一派とである。いづれも感情の争ひと化して居るかに思はれる。

予等一行は一夜を本溪湖ホテルに過したが曉三時頃にはさかんに馬の蹄の音がする。何事が起つたのかと思へば別状はない。例の支那式の六頭立又は七頭立の馬車で荷物を運搬して居るのである。

龍順通照寺支部



部 支 順 龍

- 一、創立者 故田和密乘師
- 一、住 職 松尾禪山師
- 一、沿革 大正元年田和師撫順に来り開教す同年十二月十七日附金案新町に一戸を借りて大師教會支部設置認可、大正二年現住松尾禪山師赴任、大正四年富士見町二丁目に本堂同年九月に庫裡を建て寺號公開、昭和二年十一月九日撫順炭礦の都合にて新設市街車七條に敷地四百二十坪を得て百三十坪の煉瓦造寺院を建立、内部文化的設備を施し冬季ナースーム暖房電燈二十八水栓十研瓦斯三個電話一個煙所派流式等完備し昭和四年五月十九日草野財部基の祝祭通照の序を以て滿洲金剛通照本部發會式を舉行す
- 一、功勞者 故田和密乘、松尾禪山、故荻野安八、故大井吉吉、牧野實四郎、内田角郎等諸氏

使はされる。土質は一般に肥沃で農産地として世界

界有数と頌はれる。滿洲より産出する一ヶ月物等は高粱三千萬石大豆千萬石、陸稻二百萬石、米稻五十萬石其他玉蜀黍糧食等は膝は六百七萬頭生二百萬頭騾六十萬頭、駱駝種羊二百萬頭と稱せられて居る

予等一行は五月廿七日夕刻に石炭の都本溪湖に着いた。本溪湖は石炭線中照指の場所で大倉組が日支合同事業として有名な製鐵所のある所である良田は元より撫順に比すべくもないが理蔵量は一應順と稱せられて居る。先づ煤煙の都である、水池賢海師に迎へられて予等一行は本溪湖石山寺に入り本會の法樂を濟して後結城大輔等憲代諸氏及び水池主任は一席の宴を開いて呉れて本溪湖今昔の所感を聞いた。主任の話によれば同地には本溪湖神社移轉問題につき移轉、否移轉の二派に別れて紛争を爲し市内は盟の湧くが如く公開講演會を開くも聴衆の集まる見込も無いとの事、問題は大倉男爵寄附五千圓を基礎として山の中腹に本溪湖神社を移轉して老若の琴詣に便

橋頭本溪湖附近は滿洲八景の一つで進む汽車も河に沿ひ谷を行き内地の山陰線の心地がする。前後左右は日清日露の戦役の我軍奮闘の血腥い歴史ある土地で特に附近一帶関院宮殿下御駕戦遊ばされた古跡と聞いては我々臣民が汽車で行くのも勿體無い心地がする。

水池主任結城大輔の憲時代に見過られた。予等一行は渾河河畔にて春夫より應々を出迎へて呉れ大井上師に會し案内せられ

（無聊）進んだ渾河附近はさすがに滿洲気分濃厚で眼に這入るものはコウラン畑に平和な支那苦力が勞働して居るのミアカシヤの樹陰に涼を入れて居る旅行者ばかり日本の太陽に海から出て海に入るが滿洲の太陽は畑から出て畑に入る。急がず怠らず自ら大人の趣を有する支那人氣

質は大陣の氣質であらふ。石炭の都撫順に着いたのは五月廿八日の正午頃、通照寺住職松尾禪山師は片山誅教教師の率ゆる撫順金剛講員百餘名と共に護衛隊を先頭に予等一行を歓迎してくれ最愛の夫が子を旅から歸るのを迎へる妻が母の如く特に松尾師のなつかし味豊かな態度は予等一行の旅情をなぐさむるものがある。敢て大ミユムも無いが本堂清輝香殿いづれも完成した撫順の通照寺に入りて本章の法樂につゞきて金剛講員の奉誦は衷心からの快感を覺へしめた。撫順の通照寺は松尾禪山師十七ヶ年苦心の結晶である。

予等一行は小剛を得て撫順炭坑を見た、同炭坑の面積は約一、八二〇萬坪東西四里南北一里埋藏量約十億噸世界屈指の炭坑である。沿革は今から六百年前に高麗人に依りて採掘せられて陶器製造の燃料に供せられて居たが清朝乾隆年間政府は家祖の墳墓たる水陵及び東陵に近き故を以て風水學上善があるととして採掘を嚴禁した。後光緒二十七年(明治卅四年)二度高麗人に依りて採掘せられ、つゞいて採掘權は韓國樞東森林會社の手に歸し日露の役に我が軍の占領するところとなり明治四十四年四月滿鐵會社の經營に移りて今日に至る。

炭坑視察中に特に我國で見ることの出来ぬ支那の私刑を見た、路傍の樹木に支那苦力二人が縛られて居る、そして其の苦力の顔には紅がらで眉毛又は八字ひけを書き半身を露出させて胸に張子玉像と書いてあつた。道行く苦力を見ては言葉交して居るが我等の見る目には悪いことをしたなミユムので無くして運が悪くて見つけられたのかと云ふ態度である、見る苦力も見られる苦力も何等恥かしさは覺へて居ない。支那朝鮮を通じて下層社會の人々は盗みそのものを大なる罪事とは思はぬらしい、これでは路傍に晒す私刑其のものにも意義が乏しくなる體である。

歸途自動車水安堂公園にすゝめて撫順新市街を見たがさすがは四億四千萬圓の大資本を有する滿鐵の經營支配に整然たるものがある。附屬地内人口は七〇、七八四人、内地人一四、〇三二人、朝鮮人一、一四二人、支那人五五、五八四人外人二六人。

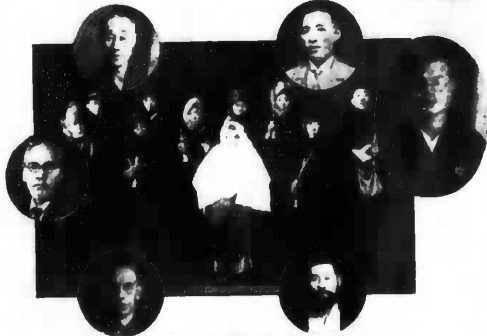
五月廿九日は滿洲金剛講總本部發會式舉行松尾理事長の挨拶に次いで予は本部長代理として一場の訓示を爲し、終りて金剛講員百餘名の奉誦、記念攝影、法話等中々に感會であつた。翌日片松尾、片山二師蒞野政案外金剛講員五十餘名に見送られて鶴嶺に向つた。滿洲の平野は北に進むに随つて山は乏しく、驛ごこに見る日露戰役の標石、忠勇なる我戰士が零十三、四十度の此平野に苦戰奮闘して

呉れたればこそ思ふにつけても二十五年前を追憶して新らしい涙は流れる。

撫順には堂園教師以下

堂園文部長

撫順大師教會支部



敎領會所

- 一、創立者 齋光曠師
- 一、支部長 堂園教師
- 一、沿革 大正六年三月滿倉師鐵嶺東大街林熊太郎兵宅に教會支部を設置、同年九月現在の土地に城瓦遣一十餘坪の教會所を新築し大正九年井上總務師滿倉師と交代し後大正十年井上師奉天轉任の後任ごこて井手師赴任昭和三年又堂園教師赴任今日に至る
- 一、功勞者 林熊太郎、中山重英、藤野長郎、中瀬キク子、久米谷忠太、藤浦信次、須藤がみ、田中本等諸氏

下森山、藤野、穂刈、久米、須藤、林、中瀬等憲代諸氏出迎滿洲隨所いづれも同様な慈愛の目の様な整然たるアスハルトの道路を二頭馬車を走らして鐵嶺大師教行に若、弘法大師御寶前に讀經法樂は例の如く少憩後堂園、森山、藤野三氏に案内せられて龍首山慈清寺に参詣した。本章は阿彌陀如来兩脇脚は文殊彌勒左右に羅漢様のものが陳列してある。佛像に對して陳列と云ふ言葉は妙に思はれるが日本人の目には佛像ミユムよりは京人形にあらずして大原燒の人の形の觀がする。其所に自然と陳列ミユム言葉が出る譯である。山頂に登りて樂河を見れば流れば帯の如く遼河の白帆は指呼の間にある。山全部に掘つた溝は明治二十八年三月十六日前に我軍に備ふべく露軍の手によりて造られた數溝の跡であると聞かされては又しても苦戰の跡を憶はずには居られない、夕刻には藤野、白根、穂刈、久米、須藤、森山、渡邊、林、中瀬等諸氏相會して予等一行の爲めに食道樂と稱する旅亭の大廣間で慰勞の宴を開かれたが席上、自修校長が龍前岡山蓮華寺の檀徒と聞いた時には一人なつかしく思つた。八時頃鐵嶺大師教會支部で一場の法話をしたがる聴衆も相當に集つた。龍嶺は明治卅八年三月十

六日の戦前、即時軍政を命じて日露和解の後は前線の日本軍が全部、に集合した所で一時は邦人の居住者も薄山であつたが今は總數六萬三千餘人中内地人二、七〇〇人朝鮮人三〇〇人教會所は眞宗南本願寺、日蓮宗、曹洞宗、基督教、金光教、眞言宗各一、天理教にて大開教會の檀信徒は檀徒三〇教會員三十餘合計六十餘名である。

(十一)

森山氏邸に泊した予等一行は、出發前一時鐘鐘警察署に行き、關東廳廳警察署大内書部の依頼に任せて非番巡查二十餘名の爲に一場の講話をしたが大内書部の談話に依れば鐵道警察署管内在住鮮人は調査の票には約一萬五六千人に云ふ事になつて居るが赤い思想の鮮人を懸賞調査すれば約三萬人位は居るとの事、南滿洲方面に時期の到来を期待して居る獨立組「萬歲組」の多數の居る勢は我國策上忌む事の出来ぬ一事である。予等一行は午前十時に鐵道を越した。汽車は「開原」昌圖一と過ぎて今や滿井驛に入るろふとする右方に一つの記念塔を見る。これこそ日露戦争最終的一幕を演じた重要な地點、即ち我が滿洲軍々使して朝鮮大將が敵將と會見して講和談判をせられたるべからざる記念の土地である。

こゝに特筆すべきことは講和條件の第一は「相互に兵力を用ひたる範圍を限りて」と云ふ事であつた。この事、相互兵力を日露戦争に用ひたる範圍は四平街以南であるが長春を限りて我が軍の勢力範圍としたには范家屯以北約三哩の地點に田中中尉の碑が建てられて居る、この碑ありてこそ長春を限りさせられた唯一の條件である。中尉は奉天會戰に先立ち撤退三箇中隊の兵卒を引率し、寒氣と戦ひ、哨戦を避けて深く敵地に突入して新聞河の障柵を破壊して敵の退路を絶たんとして揚言効無く遂に此の地に戦死し、露軍も又其の武勇に感じて情呼の監視家屋附近に葬つたミム事である。滿洲の平野國所にかゝる悲話哀話に満ちて居る。平和の商戰に於て夕に一城をさられ、朝に一邑を援かれつゝある南滿目下の現状を併せ考へて果して涙無きを得るであらうか。我が大和民族は戦争に出て戦死する事を名譽と心得る以外に畏怖は無いのであらうかと考へた時、ささめ得ぬ涙の流れた事實を國民は何と見るであらうか。

滿鐵の汽車の進行と反比例していよ／＼減退差縮して行く當に於ける我が勢力何でこれを悲しまないで居られやうか、何んでそれが泣かずにやまれやうか、一望千里の平原、山は無く唯見ゆるものはコラン畑、なやかに風になびけるコランの青葉、せめてそれが戦死者の英靈に供養する香花の代用であらうかと軍窓を隔て、ひそかに唯々供養した予の胸中……予はかゝる胸中を記し得る文章を持たぬことを大なる遺憾としたのである。

四平街 大 師 教 會 支 部

長 部 支 本 松



四 平 街 大 師 教 會 支 部

- 四 平 街 大 師 教 會
- 丸 山 又 市
- 沼 田 福 藏
- 大 倉 勇 吉
- 近 澤 喜 一
- 高 橋 卯 兵 衛
- 島 村 喜 久 馬
- 大 西 半 重 郎
- 大 森 正 雄

- 一、創立者 四 警 署 師
- 一、支 部 長 松 本 德 福 師
- 一、治 平 倉 市 以 内 戰 古 に 属 する 川 洪 鐵 道 の 起 點 に 於 て 南 滿 中 隊 の 警 署 人 口 約 五 萬、農 産 物 毎 年 百 五 十 萬 噸 を 産 出 する 所 に 於 て 將 來 育 望 の 都 たり、教 會 所 は 大 正 八 年 四 月 四 日 平 街 に 開 教 し 大 師 教 會 支 部 を 設 置 す、後 風 海 師、淺 賀 師、伊 藤 師、萬 谷 師 第 六 代 松 本 師 は 昭 和 四 年 五 月 十 八 日 赴 任 せ り
- 一、功 勞 者 柳 井 繁 十、島 村 喜 久 馬、大 森 正 雄、高 橋 卯 兵 衛、大 西 半 重 郎、大 倉 勇 吉、丸 山 又 市、佐 藤 清 一、沼 田 福 藏、風 早 楠 兵、北 奥 次 郎 吉 等 諸 氏

予等一行が松本德福師、島村、今橋、丸山、柳井、大西、大倉、大森、近澤、沼田、北、風早等數十名の信徒に迎へられて四平街に着いたのは五月卅一日の午後、同地は外蒙古の入口、四洮鐵道の分岐點、滿蒙に志す者にさりては監視するこの出来ぬ極要の地である。王三郎出口が大木教の後身として創始せる人型愛愛會滿洲總本部をこゝに創立して居る事はその大志が何はれる。特に今

日は馬賊が五人出て支那人一人を殺しましたと聞かされた剎那にはこれは大分滿洲奥地へ這入つて来たなと云ふ。急がした。借家住宅の四半街大都會支部に行き高祖の御法樂を爲し小松屋ホテルに泊つた。夜八時から東洋洋行の樓上で一席の法船各宗教會所寺院の主任以下各方面に亘りて知識階級の人々約百名の集合は意外の成功である。同地は人口六萬四千六百人、内地鮮人、日人四千人、鮮人六百人、各宗寺院教會所は淨土宗、禪宗、東西兩本願寺、興正寺派、日蓮宗、高野山各一で將來有望の地である。

予等一行は六月一日午前四半街教會所にて記念の撮影を爲し主任總代等に送られて公主嶺に行つた。途中汽車の車窓から眺める滿洲平原は、悠々迫らざる支那人農夫の耕作姿、六七頭又は八九頭立ての馬車の交通、隨所の牧場に飼育せられて居る牛馬又は羊隊の平和な有様、これがせめてもの滿蒙旅行者のなぐさめである。就中我々日本人の驚く事は前にも記した通り沿線の路傍に棺桶がアンペラに包まれた儘に放置してある事である。

諸種の事情の爲めには一時内地人の假埋葬式にアンペラに包んで路傍に置くのである。それが置場所についても相當の理由があるので、それは悉く風水學から削り出されて居る。又支那の風俗は子供の死亡に對しては葬式等はせぬ、親に先んずるものは親不傘葬である云ふて野に捨て、棺桶も何も無い死體にコウランのからを拵ふて置いて犬や鳥の噬に任せる、これが一種の施の意味で、印度の屍骸と同様である。孫文の移靈祭の如きは假埋葬より本葬に移した代表的の儀式である。

公主嶺には支部長谷口師治の、小松、淺野、山本、福富、野島、渡邊、芳原等諸氏は出迎へて呉れる、案内せられて大師寺に這入つたが寺は小さいながらも完成して居る。夕刻丸福旅館樓上にて小松、山本等數人の有志發起の懇親會が開かれて滿蒙に對する布教政策についていろいろと希望を述べられたが大に參考になる事もあつた。

公主嶺は人口一萬八千人、内地人二千人、鮮人六十人、支那人一萬人、宗員は曹洞宗一、眞宗一、高野山一、日露戰爭直後の隆盛は今を見る事が出来ない。將來政治上面交上の大變化の無い限りは現状維持と見るのが穩當な見方も知れぬ。公主嶺大師寺の禮佛は二千餘戶、信徒は約五十五開創は十年前、主任とよめる事は數代である。

### 公主嶺大師教會支部



谷口支部長

公主嶺教會所

- 一、創立者 上山智龍師
- 一、支部長 谷口智龍師
- 一、沿革 大正三年夏上山田師公主嶺に開教し有志を勵めて數町一丁目に借家をなし大師教會支部を設置す大正四年夏正田英爾師赴任大正六年約五千圓の禮堂にて現在の堂宇を建立し大正七年六月大師寺の寺號を公明し、盛大なる入佛供養を舉行す、爾後仕組の移動は、大正八年福田善隆師、赴任第一世利光智玉師の赴任せしは大正十四年夏昭和三年利光智玉師會同寺に轉任する事となり現任住職谷口師赴任今日に及ぶ
- 一、功勞者 故長田國太郎、故齋藤正英、小川久太郎、淺野兼右衛門、小松繁太、山本瑞之丞、芳原啓太郎、野島茂幸、渡邊善清、福富順吉、重松茂平、渡邊マカ子、福富ワメ、鹽見マサ子、佐藤マヤ子等諸氏

予等一行は六月一日午前四半街教會所にて記念の撮影を爲し主任總代等に送られて公主嶺に行つた。途中汽車の車窓から眺める滿洲平原は、悠々迫らざる支那人農夫の耕作姿、六七頭又は八九頭立ての馬車の交通、隨所の牧場に飼育せられて居る牛馬又は羊隊の平和な有様、これがせめてもの滿蒙旅行者のなぐさめである。就中我々日本人の驚く事は前にも記した通り沿線の路傍に棺桶がアンペラに包まれた儘に放置してある事である。

其の心地よさは實験した人にして初めて知り得るのである。利光師の説明に、これが日本横道、彼れが中央通り、敷島三云ひ日本横道云ふ其の名を聞く丈でも予等には惡氣持はしない、加ふるに壯麗なもの、様な敷島郡市、我れを忘れて大和民族の發展を促すよと言はねばかりの心地がしたが、よくよく聞いて見ればそれ等の大建築が次第に支那人の手に委せられつゝあるこの事

これは又何しした事ぢやと思つた時、極樂から三途の川に落ちた様な心地がした。

我が帝國は這回拓務省を置き拓務大臣をつくと聞くが滿洲のこの事實を何ミする身は世界の者なりとは云へ鎮護國家を宗旨とする我が弘法大師の未徒として是を悲しませずに居られやうか？かくて夢に夢見る心地がして居る中に歸の音の止んだのに驚けば馬車は金剛寺に着いて居る。

### 長春金剛寺支部



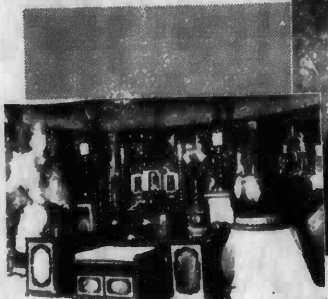
金剛寺

- 一、創立者 福島 師
- 一、住職 利光智玉師
- 一、沿革 大正四年福島師長春に開教同五年四月二十日上田智胤師教會設置の認可を得て同六年四月本堂の建築をなご同年十一月十二日金剛寺と寺號公稱す昭和三年五月利光師公主領より轉住し上田師と交代す現在本堂庫裡建坪五十坪六合
- 一、功勞者 上田智胤、細井萬次郎、堀野馬、山本八十四郎、多田友太郎、川上露一、中林四郎次、尾崎靜馬、露澤一二三等諸氏

靜に馬車を捨て本堂に進み讀經禮拜して別室に入る金剛寺は長春新市街の中央に位して本堂庫裡建物五十坪六合、附屬建物としては淨金剛寺所屬の聖德殿もあつて完成した一ヶの寺院である。創立は大正四年開基は福島師に今は上田師を経て利光師と替り、寺號公稱は大正六年十一月十二日檀徒は九十二、信徒は約六十、現總代は山本、多田、川上、中林、堀の五氏將來有望の地であらう。長春の人口は二萬八千餘、内日本人は八千六百五十餘人各宗寺院は東西兩本願寺、曹洞、淨土、日蓮、眞言、基督教、金光教道教各一、天理教々會所二である。夕刻利光師の案内で金剛寺總代にして特に功勞顯著なる山本八十四郎氏邸に行きて祖先の冥福を祈り、長春第一の料亭賓客棧に案内せられ山本氏の供養による異國の料理を味つた。人情風俗の變化は料理の上にも顯はれて

### 怡爾賓大師教會支部

#### 山田支部長



怡爾賓教會所

- 一、創立者 山田憲海師
- 一、支部長 同 師
- 一、沿革 大正十年四月七日上田智胤師名義にて怡爾賓總本山松島鐵氏より教會所設置許可昭和二年八月六日山田師支部長任
- 一、功勞者 田川忠太郎、林福松、福澤芳太郎、村井周次郎等諸氏

無量の感に打たれた。支那の料理は世界第一に面白いが、これも自然の感化でも云ふべきであらう。滿洲原野の風物は目を樂しましむるものにては何ものも無い、人間自然の欲求は食に走つて料理の上に進歩を告げる、心は境に依りて轉じ、信は莊勝より起ると叫ばれたのも此の間の消息を漏らされたのであらうと思ふ時、我が日本の自然の風光の豊さを感ぜずには居られなかつた。何は無くとも我々大和民族は山水の美には恵まれて居る我々は十善を守つて以て片地下賤の身を受けぬ工風が必要である。山本氏等は予に折角長春迄來られたからには是非怡爾賓をとす、める、利光師も同意するので俄に思ひついて我が伊藤公爵経緯の地である怡爾賓に山田支部長を顧問する事に決した

長春以北は張作相の治下で、汽車が變り又運賃が變る。山本氏の畫力で準備萬端も出来六月一日夕哈爾濱に向つた。一行は利光、谷口二師、予と

いよ／＼異國気分は濃厚になる。夢に五百十哩を過ぎて三日朝七時哈爾濱に着る。哈爾濱高山大師教會支部長山田憲海師は驛に出迎へて慈父が愛子に對するが如く、先づ哈爾濱高山大師の御寶前に

般若通越一巻を奉讀して在實内地人の健康を祈り、つゞきて山田支部長の案内にて横川池二志士の記念碑を訪ひ、體經回向、思ひは二十五年前に走りて涙は聲をささぎりて出る。

千里飲無水食無糧困頓窮苦永天雪窟晝伏夜行將一車燬破難見處續續正熱而續續突至干峻已矣壯固一履横川池二士

これが神國の爲めとは云ひながら萬里異郷の空、飲びに水無く食するに糧無く困頓窮苦永天雪窟晝伏して夜行き將に一車燬破、松花江に燬破して敵兵の退路を絶たんとして壯固に我が破れて哈爾濱原頭に感憤の涙を飲んで就殺せられた横川池二勇士の遺骸……勇士の幽魂今何れの處に安住するかと追想した時に破れて哈爾濱原頭に感憤の涙を飲んで就殺せられた横川池二勇士の遺骸……威の裡にはかくの如き涙の物語りの數を知らない譯である。徒らに政權の奴隷となり、只名利色慾の奴となり、國を忘れ、家を思はぬ現代人には是非共一見させてやりたき事情である。

哈爾濱は何等の先刻承知の如く北滿第一の好市場であつて、人口は三十四萬〇〇五十六人昭(和)二年支那警備隊内地人三千七百二十九人、朝鮮人二千三百五十八人支那人二十六萬六千五百五十九人、露國人二萬五千六百三十七人就中三萬〇三百二十三人無国籍人として「但し自來露」とある事は、國亡びて山野ありか實に感慨無量である。

東支鐵道は我が日清戦役の後三國干渉の報酬として露清銀行を介して露國が布設權を獲得したもので、動機が既に不純であるが、三世の因果は恐るべきもの歐洲大戰亂以來其の支配權は支那に奪擄せられて露人の勢力は今も見ら影も無い。而もそれを意にかいせぬものが晝夜酒池肉林の歡樂にしたつて居る。朝鮮總督府前學務局長李幹鎔氏の著「滿蒙の旅」の一節に

夕食を探るべくホテル食堂にはいつた時正に十時半であつた。食堂の經營者は露西亞人で料理は凡て皆露西亞料理である、ボーイ君はよく日本語を話される、段々食のすゝむ頃若き露西亞美人が厚化粧のもとに、極めて身輕に、そしてハデな服装で以て三々伍々やつて来る、案内を終始して呉れた池田君曰く「あれはダンス」をやる舞子ですと、夜は十一時頃から黎明の四時迄男女入り亂れてダンスに興ずることがわかつた、旅の疲れも相當に散られて居るのではあつたが、露人の真面觀察をするのも必ずしも無益ではないと考へ、金君のすゝめるまゝに「ダンス」見物と張り込行だけである。何も佛教で固まつた吾々東洋人からするさ一寸その心理の程

が覗ひ知る事が出来かねる。これを體育的に眺めるさすれば餘りに夜深すぎる、これを社交的に見れば態度其の他に於て餘りにつまらない。成るべく善意に解釋して見たいと考へて見たがさうしても露西亞人は一般的に利那主義の享樂氣分に充ちてゐるものと結論より外には考へられなかつたのである云々

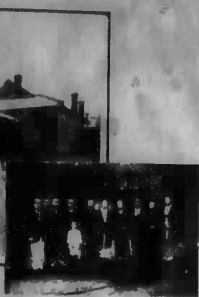
それが如何に亡國の國であるかはこの一節で十分に承知が出来る。予等一行は裏面の觀察はをろかの事、表面の觀察も十分に時間もなく、自動車で一運市内見物をして大師教會哈爾濱支那にかへり夕刻の汽車で奉天に引返したが予の哈爾濱所感を一言に云へば、支那人の勢力がのびて居ると云ふ事と、日露兩國人の勢力減退しつゝ、あると云ふ事である。予等の團體には今以て日清戦争、北清事件當時の事が往來して居るが、哈爾濱の現状を見てはそれは少くも過去の夢であつて、現在では無いと云ふ事を強記しなくてはならぬ。

哈爾濱高野山の創立は天正十年四月七日、創立者は山田海法師、信徒七十家、在任の邦人約四十人に對して計八十五戸人口にして約三百人はいさゝか會衆の感も無いが、山田師獨力の經營としては先づ「ミユムベ」である。他家派は東西兩本願寺、日蓮宗、曹洞宗、大本教各一、天理教一、支那寺院五、基督教五である。

予等の一行は六月三日の午後十時に哈爾濱驛に別れを告げて奉天にと引かへしたが車中の不愉快は又別格である。支那軍人の横暴支那軍醫の横柄予等一行は二等の切符で三等の片隅に縮まつて長春迄來た。これは甚だ不都合であるから乗務員に交渉してはご利用師に言へば、師は三間置きに武装して立ち並んで居る支那の警備隊を指さしながら、東支鐵道は乗務員は多く露西亞人であるから支那の軍人運警等に對しては何も言ひ得ない、彼れ此れ言つて理不盡な行爲に遇ふよりは歌して我儘して呉れとの「ミユ」は亡國の感哀はかくもあるかと思つた時我東帝國の現状に想ひを運んで思はず袖染に袖をぬらした。これは予が弱いばかりでは無い……。我が大和民族も今日反省しなかつたら後日露國人の跡を踏む事があるのでは無からうか。支那人は予等に片手を出して支那はこれ日本はこれミユと大拍とを見せる、我が日本はそのいつれの指であらうか。

奉天金剛寶寺支部

高麗人名、簡井ヤス、三浦たか、安岐ヨシ、松澤 實、西木セ  
人、加藤佐太郎、簡井定彦、井上憲輝、牧野宗太郎



金剛寶寺

井上支長部長



一、創始者 加藤輝雄師  
一、創立者 井上憲輝師  
一、住職 同 師  
一、沿革 大正二年二月加藤輝雄師奉天に來り十間房第五區警  
第百二十七號の二、三浦梅太郎氏の貸家十五坪の家族を借入  
し大師教會支部を設け同年六月五日田和齋乘師の名義にて監  
督官廳の認可を受け専ら布教の任に當る、大正十年四月願  
大師教會支部長井上憲輝師奉天支部長として赴任し大正十年  
五月藤沢町六番地六百六十二坪五合の敷地を得て假本堂を築  
但四十三坪三合二勺の煉瓦造平家を建て大正十年八月二  
十一日本山より金剛寶寺の寺號を下附せらる、同年十一月十  
四日監督官廳より寺號公認認可を受く、爾來大正十三年九  
月二十日三十四坪一合八勺煉瓦造平家の庫裡を建て昭和三年  
八月二十一日二十六坪の煉瓦造二階建の庫裡増築をなして今  
日に至る。

一、功勞者 自大正二年奉天正九年創始時代、加藤輝雄、井上  
恒、牧野實四郎、結城支道、瀧尾榮太郎、牛島國五郎、三浦  
梅太郎、加藤佐太郎、簡井定彦  
創立時代(自大正十年至昭和今日)井上憲輝、三浦梅太郎、  
野伯直平、庵谷實、加藤佐太郎、簡井定彦、西田平四郎、牧  
野宗太郎、故植田友太郎、田中政市、高木三郎、三浦ヨシ、  
簡井ヤス、安岐ヨシ、西木セ人、加藤ヨシキ、松澤實等諸氏

田中、西田、田淵等の金剛寶寺總代世話人並に婦人會員數十名、特に撫順金剛寶員三十餘名が講談を先頭に押し立て、遙ろく何十  
哩を出て來て歡迎せられたことは涙の流れる心地かした。迎へられて自働車數十臺を連ね奉天新市街大通りを金剛寶寺へ入り  
高祖大師の御寶前に禮讃を爲し、つづいて一同に挨拶、終りて別室に憩ふ。撫順金剛寶員の鈴鉦を併せて鈴の權な聲で

有難や高野の山の岩蔭に

大師はいまだおはしませぬなる

と淋じた御詠歌は、道行く人々の足を止めて思ひがけなき法益であつた。滿鮮到る所御詠歌の詠は隆盛であるが、曲の好細を論  
じて伊ふのは附つた詠歌病である。各地詠歌吹回りの反省を促す必要がある。

菅野開教監督、金剛寶寺井上、瀧照寺松尾の三師は予の來奉を明して滿洲開教師總會を奉天に招集して從來の懸案と眼前の問題  
とを解決すべく午後金剛寶寺の書院にて開會、予は座長席に着き菅野開教監督は主催者代表として滿洲金剛寶總本部を撫順瀧照寺に  
設置せし事後承認案、御遠近勸募方針案、開教地規程實施案等の説明を爲し、いづれも異議無く滿場一致可決、滿洲開教師の氣類當  
るべからず、滿洲開教士に於ける古義重言宗の將來洋々たる春の海の如きものあること、思はしむるものがあつた。就中予等の快  
感をそゝるものがあつた一事は滿洲在住の開教師各位が、前途多難なる青年僧侶が多數にあることである。予は日支親善の爲めに  
否引法大師主義宣傳の爲めに開教師各位の自車と自費を祈らざるを得なかつた。出席の開教師は、大連大聖寺滿洲別院主野野、沙  
河口大徳寺高比良、鞍山大日寺橋本、遼陽弘法寺甲元、奉天金剛寶寺井上、撫順瀧照寺松尾、四平街大師教會松本、長春金剛寺利光  
哈爾濱大師教會山田、本溪湖石山寺永澤等の諸師である。

予は井上師の老なる、儘に同師の弟子の制度式を執行した。戒師草葉全宜、教授師菅野野輝、頭士松尾禪山、隱真式家比高比良、  
利光、山田等諸師、一般參列者は金剛寶寺總代世話人婦人會員等數十名、新發智は慈範房歳十六歳、經に曰く一人出家すれば九族天  
に生ず慈範房の九族は皆天に生じて甘露の法味を享けて居る事であらう。參列の人々は涙ながらに奉天將來の教界の爲めに祝願し  
た。正午予等一行の歡迎と併せて慈範房の制度式披露の爲めに奉天市街第一の大和ホテルに一同を招待して一席の宴を設けた。大和

ホナムは元滿鐵經營のもの其の規模の宏壯と美觀とは内地にも多く見られぬものがある。

予は午後井上師に案内せられて千代田通の忠魂塔に古戦眞言宗徒を代表して日露戦死者二十五週年の回向法樂をした。忠魂塔に祭られて居る忠勇なる將士は參謀本部以下十八ヶ師團の將卒將校七百七名外卒三萬四千九百十名である。日露役奉天會戰は我が帝國が國運を賭して戦つた大會戰で、その戦線は二十里に亘り、我軍世五萬、露軍三十二萬の大兵が屍山を築き血河を流へて惡戦苦闘前後十七日間を重ねたので我が大山總司令官が總攻撃の命令を下したのは二月二十六日で露軍が總退却をしたのは三月十一日である。

予は忠魂塔の内部に這入つて般若理趣經を讀神した。が身の背後より冷水數石をそそがれる心地がした。回向後希はる、儘に記念の署名をして辭して金剛寶寺にかへつたが、途中數々の感想は湧いてやまない。今日の我々大和民族が滿洲に活步出来るのはこれ等忠勇の將士の賜で無いものは無いが屍は三萬四千九百十名で現在奉天市街居住の日本人は僅に二萬三千二百六十六人で戦死者の數に比して少い事一萬三千五百八十四人である。予が言ひ知れぬ感に打たれるのもあながち無理では無からう。特に予等の強記しなくてはならぬ事は奉天會戰の三月九日猛烈なる南風吹き荒び、砂塵は捲いて咫尺をも辨じなかつた、これこそは我軍戰勝の一大原因となつたと云ふ事である。日露戰爭當時には各地の神社佛閣では衆國一致神明佛陀に戰勝を祈つた事も事實である、世人は人世の事を悉く過然であると言ひ終るが我々は左様には考へる事が出来ない、其所に何もかがあるのでは無いであらふか、要するにかゝる問題は信仰の問題であつて理窟ではない。

予は寸閑を得て六日井上師の案内で奉天の北陵を見た、陵は英傑太宗文皇帝の永遠に眠れる寢陵で今は野葡萄、葛かづら等の雜草が生へ茂つて居て觀る人をして轉た今昔の感を催させる寶藤政世氏の著「趣味の奉天」に

北陵は一名服陵と言ひ、奉天城の西北約一半里にあたる。寢陵の規模は極めて宏大で、周圍約十五丁に亘る煉瓦塼を繞らし、正門入口に華麗なる大碑樓がある門内磚道の兩側には馬、駱駝、象、唐獅子、豹、石人等珍奇な動物の石像が列つてゐる。これは北京にある明の十三陵、南京の明陵を兼ねたものである云々。

と記して居る。今は門前左側に鐵網柵を張り衛兵が附いて張學良が住つて居る。世の中の移り替りの甚だしきは諸行無常の活きた説

法とも見ることが出来る。

予は歸途自動車を奉天城内に走せて、ありし昔の佛をしのんだ、音に聞く奉天城内の貧弱なものと狭小には驚いた。舊奉天城内を見て初めて日本の東京大阪等の世界的大都市であるかと云ふことを思つた。云つて奉天必ずしも小都市ではない、人口總數は四十六萬七千五百五十三名、内々鮮人二萬三千二百二十六人、外人千二百四十八人、宗教團體としては、金光教一、神誠教一、天理教一、黒住教一、救世軍一、メソジスト一、ホリネス一、日本組合教會一、日本キリスト教會一、東西兩本願寺各一、曹洞宗一、日蓮宗一、淨土宗一、臨濟宗一、日宗新派一等で、我高野山金剛寶寺は信徒五百餘で開創は大正二年一月、開基は田和密乘師、現任井上慈禪師二世である。建築は一百三坪五合三勺の煉瓦造、境内は六百六十二坪五合、四十坪餘りの聖徳殿もある。商業的に云へば滿洲に於ける中心は大連であるが、政治的には何としまも奉天は滿蒙の中心である。將來滿鮮一體になる時代があり、是すれば奉天は滿鮮別院の建設地であらふ井上師は、こゝを考ふる所であり、予は切にその成功を祈つてやまぬものである。午後五時奉天を辭して日清日露の兩戰後に於て吾人に強記せられて居る遼陽に向つた。同地は日露の大戦後に總司令部を置いて南北兩軍に對する秘策を練つた所で、故兒玉大將が旅順攻勢の爲め死を決して深夜に遺言狀を賜へたこと云ふ世に公にされぬ悲痛な事實のあつたこの地である。停車場に送迎せられた人々は甲元住職古岳憲兵司令、瀧平、森、三好、山本、小柳、山下、堀、石川、大丸、會田、山下、田雜、浪川、黒川、倉町、中村、川村、宮武、桑原、片桐、西野、原、三好等總代世話人並に婦人會員數十名である。馬車を遼陽弘法寺に走せて讀經法樂つゞきて一擲の講演歸家百餘なか／＼に熱心である。弘法寺は大正八年新田忍隆師の開創で本堂二十六坪座裡十五坪いづれも煉瓦造、敷地は二、九六六、九八平方メートル瀟灑よりの無料僧地である。遼陽ホテルに一泊すべく行つたのは夜の十二時四十分、信徒の熱心に引入れられて時間の過ぎるのも知らずに講演する予も又變り者三人は云ふであらう、同地に日本人は五千四百二十五人、寺院は東西兩本願寺、淨土宗曹洞宗、日蓮宗、富山弘法寺、天理教、金光教、日宗國柱會等で、人口に比例して寺院教會の多過ぎるには居住民は返て迷惑に思ふ様である。特に鮮滿各地に天理、金光等の新宗教が勃興しつゝあることは見のがす事の出来ぬことである。



遼陽は白塔によりて有名な所で高三二百五十八尺周圍二百四十尺と稱して居るが任務を持つ身の予には見る間とも無い、せめて書籍に依りて湯を醫することにした。遼陽沿革史の一節に

東神橋中佐の歌に名高い遼陽は太子河の左岸にある滿洲第一の古都である。湯唐の時代に禹貢青洲の域と稱され、漢代に遼陽縣となり、南北朝の頃は高麗に歸屬し、唐代再び支那領となつて遼陽と云はれたが、以後滿洲族の勃興と共に漢族の勢力及ばず、清朝に於ては奉天遼陽都府の首都となつて居た。其後漸時に寂れたが、東清鐵道の敷設と共に活氣を得、日露戦争後日本人の移住するもの多し、滿鐵の附屬地經營開始に伴ひ、日支兩方面ともに近代味を帯ぶる沿線有数の都市となつた云々、

現に守備隊の旅團司令部があつて軍事的には相當な位置にある。

予等一行は六月七日前記の諸氏に送られて鞍山大日寺に向つた。譯には任職橋本涉善師、總代久野、濱川、伊藤其他信徒二十餘名出迎、任職橋本師の好意にて鞍山製鐵所を見るべく自動車をその事務所に走らせた。鞍山製鐵所は大正四年漸く日支條約公文に依りて日支合併の經營が許さるゝこととなり製鐵事業

鞍山大日寺大師教會支部



橋本支元部大日寺

- 一、創立者 中田電船師
- 一、住職 橋本涉善師
- 一、沿革 大正五年六月中日田師鞍山に至り布教所を新設後同十一年春新田忍隆師赴任後大正十三年六月現任橋本師晋山同十五年十二月信徒を協力して現在の本堂庫裡を築き五十五坪を新築して大日寺と尊號を公稱し今日に至る。目下橋本師晋山同續背堂一寺、萬十開庫一氏一西國三十三ヶ所製背堂
- (一) 教信者寄附 建築落成
- 日一、功勞者 橋本涉善、關庫一、森キ、濱田實吉、如藤島、伊藤益大、猪尾祐平、山崎良徳、石田平、相原勝見、森藤五郎、松本精吉、柳田清吉、川田貞助、久野龜藏、藤原タカ子、村上ツタ子等諸氏

遼陽弘法寺支部

甲元支部長



弘法寺

- 一、創立者 新田忍隆師
- 一、住職 甲元善願師
- 一、沿革 大正八年新田師遼陽に駐在、大師教會支部設置出願同十二年滿鐵より敷地一千九百六十一平方米餘を借地し二十六坪の本堂を十五坪の庫裡(各棟瓦造)を新築して弘法寺と公稱す、現任甲元師は昭和三年四月十九日新田師の後任として赴職今日に至る
- 一、功勞者 新田忍隆、松尾藤山、竹内福次郎、前川宗七、原信三郎、谷田川新一郎、上井藤太郎、高田政二、淺手實次、森多吉、好清三、小柳進次、山本顯等諸氏

就中予等の驚異は滿鐵自ら之が經營に當るべく、大正五年十月政府の認可を得て開設現在の餘額値は大正八年四月の入火に閉く。就中予等の驚異を感じた事は製鐵所の復興としてタール、アンモニヤ、ナフタリン、ベンゾール等の製作がそれである。弘法大師は六丈は無礙にして常に瑜伽なりと仰せられて居るが、今親しく六丈無礙の實狀を見聞して驚かざるを得なかつた。金や石や石炭の中にタール、アンモニヤ、ナフタリン、ベンゾール等が含有せられて居ることが即ち重々帝綱名即身ではなからふか。正午大日寺に著、鞍山は寺町を一部に局限して兩本願寺、曹洞宗、淨土宗、日蓮宗、眞言宗、金光教各一、天理教、就中高野山大日寺は好き位置をしめて伽藍もや、小いながら完成して居る。加ふるに這回危信者關庫一氏は、獨力以て煉瓦塀白間、九尺四面の納背堂一寺を建設しつゝ、あつた。鞍山大日寺は滿鐵と盛衰を共にし現在の積信徒は八十餘戸、本堂煉瓦建三十坪庫裡二十餘坪、敷地は六百八十坪滿鐵より無料借地である。沿革は大正十年六月中日田師の開創、新出師を経て現在の橋本師に至り第三世である。午後一時より一場の講演、夕刻は娘長太夫等の餘興もありて中々である

予等一行は今日は愈々九十九年間租借地として扱

金州金閣寺支部



中央  
 草野正  
 右  
 菅野監督  
 住職(在命境内敷地四百餘坪、建物本堂庫裡共五十五坪餘)  
 左  
 總代  
 世話人  
 一、創立者 菅野経禪師  
 一、主任 茂木秀禪師  
 一、沿革 大正十三年一月七日菅野師金州に開教し大師教會支部設置出願昭和四年一月二十八日附金州寺と寺號を公稱し同年四月十八日第一世特命住職(在命境内敷地四百餘坪、建物本堂庫裡共五十五坪餘)  
 一、功勞者 菅野経禪、向井友次郎、大和田勝次郎、泉屋興吉、鳴瀬三三、内海青一、須藤長右衛門、森田久助、木谷鶴次郎、土屋卯太郎等諸氏

が國が支配せる關東州に一步を入る、日、鞍山停車場にて橋本師、久野氏等外三十餘名に別れて金州に向つて汽車に乗つた。す、むはまに自然の景色は内地と似た所が多くなる海城大石橋を過ぎて大平山附近にす、む、大平山は一面の白灰山、いよ、蓋平迄來ると右方の車窓から遠入つて來るのは渤海の一部、遼時代には渤海の波は海城附近迄洗つたまゝ云ひ傳へられて居る。蓋平附近の田の中には山の横な白いのが所々に點する同乗の人に聞けば關東真ちやとの事、蓋平の平野は地味自ら鹽分を含む爲めに農作には適しないが海水は鹽分に富むて居るに降雨量少きと又大氣の乾燥せる爲め天日鹽が澤山出來る。熊沼城、萬家領得利寺等を通じて田家からはいよ、關東州道路の左右には並木が植へられて山川自ら森林が行き届いて居る。これ皆皇化の賜である。

菅野氏石河と通じていよ、金州驛につけば、滿洲開教監督菅野師金閣寺總代向井、大和田、泉屋、鳴瀬、内海、須藤、飯田、木谷安水、山領外婦人會員數十名出迎へ、たゞちに馬車をかりて金閣寺に入る、金閣寺は昭和四年一月廿八日附許可の公稱寺院であつて、創立者は菅野経禪師、境内四百餘坪、建物本堂庫裡共五十五坪、僧徒三十餘、教員五十餘、金州一四一ヶ寺で他宗派は無い。金州の人口總數一萬六千餘人、日本人二千餘人、金閣寺の檀信徒は約一割に過ぎぬが、殘る九割は、無宗教無信仰かと云へば左にもあらす、いづれも其の家所屬の宗匠宗派の僧侶が附近から手を出して居る。然しながら布教方法そのよろしきを得れば金州在住の一千餘人の内地人は全部金閣寺の檀信徒となし得る譯である。特に現代茂木秀禪師の談に依れば金閣寺には王佩乾、王永江、周文貴等支那人の檀家もあり、又金閣寺建立については金州城内の支那人の寄附も相當澤山にあつたとの事で一萬六千人の支那人も次第に檀信徒と爲し得る可能性がある。

大連大壽寺支部



天野節次郎氏  
 武田 政吉氏  
 菅野 山主  
 橋本興一 郎氏  
 中川邦四郎氏  
 長谷川辰次郎氏

一、現住滿洲開教監督 菅野経禪師  
 一、開創者 福島仁雅師  
 一、中興第一世 故田和實樂師  
 一、沿革 明治四十一年十二月高野山大師教會支部を始めて設置す大正九年五月一日寺號を公稱認可開創者福島師の努力によりて撫津町の現在の區域に其基礎を定められ大興國す、其後田和師の時代になりて諸般の基礎大いに成り大連市の發展と共に寺門の興隆は又盛大となる。田和師は去る大正九年十月廿九日遷化まで約九年の間終始一貫して滿洲開教の爲め闊大なる貢獻をなす、現在の觀本堂客殿庫裡等は益數年の中に悉く新築し面目を一掃する計島にて現住菅野師は檀信徒と共に協力一致實現を期しつつ、あり以上萬里の諸氏は現境代にして其他に高野山坐禪學會計主任小澤太郎、菅野通圓、長松、藤茂、助氏外世話人三十餘名ありて日夜大聖寺の爲めに努力しつゝあり

ため丈に佛教宣布の上に幾多便利があるかと思ふ。朝鮮は今朝五百年の排佛は知らずく、血から血に流れて佛忌僧を排斥して居るの如く明治三十七年五月二十六日に我が軍に依りて占領した要地。大正六年冬滿洲戰蹟保存會が明忠碑を建てた碑文に

第二軍は明治廿七年五月五日遼克石及驛家屯附近に上陸を開始し先づ南山の攻略を企圖す、二十六日軍司令官奧大將は背金山に位置し第五師團をして軍の背後を掩護せしめ第一、第三、第四師團及野砲兵第一旅團を以て此の高地を攻撃し、聯合艦隊は軍艦銃索、本連、赤城、島海、及第一艦隊をして金洲灣より協力せしめ、同日薄暮克之を占領す云々

(十三)

かく配し終れば何の苦も無く金洲は占領し得られた様に思はるゝが、明治廿七年五月廿六日午前四時卅分より午後七時卅分、即ち十五時間の間には兵三萬三千人、砲百九十八門、機關砲四十八門、砲彈二萬四千發、小銃彈三百丁萬發、死傷者四千三百八十七人を出して居る所を見れば、薄暮克之を占領すと文章に書く様に容易なもので無かつた事が想像せられる。特に我軍の死傷四千三百八十七人に對して敵の死傷者僅に一千二百餘人と聞きてはその苦戰の様も思ひやられて涙の種である。乃木大將の令息の一人もこの戦ひに戦死をとげた云々事も國民は深く配値して居る事である。金洲名所案内の一節に、

乃木中尉又刃伍にあり一舉に金洲城を抜かんとして挺身奮闘し、不幸敵の流彈に中る、烏谷工兵少尉部下八名を率ゐる暗に樂じて城

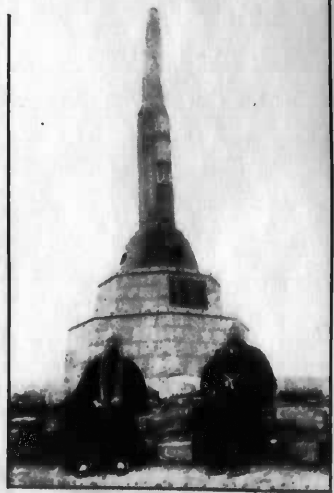
東雞冠山砲臺廿五週年回向記念撮影



岸木氏

于道氏

軍醫師



の東門を破損し、我軍決河の勢を以て城内に突入し、遂に之を陥れしが乃木中尉は城東八里に在る衛生部隊に收容せられて間も無く永眠せられた。事實に明治廿七年五月廿六日である。中尉は故乃木將軍の令息を以

に斃られた故中尉との哀情を思ひ遣る時誰れか一掬同情の涙無きを得ん云云。

て遷けらるべき死地を避けず、自ら進んで一命を軍國に捧げられたる。と當時如何に我が全軍の士氣を鼓舞するに力ありしか、而して精忠無雙の父將軍中尉は事ろ之を以て武門の譽れとせられたのであらふか、老いて最愛の二子を失はれし故將軍と前途有望の身を以て惜しくも敵彈

金洲は我帝國さかゝる深厚の歴史を有して居る上に今一つ忘るゝ事の出来ない歴史がある。金洲俱樂部發行「金洲情況」に

光緒二十年(明治二十七年)日清干戈を交ふるや、其の年十一月を以て我が軍此の地を占領す、平和克復の後一旦我が國に割譲せられしが、幾許ならずして清國に還付す。然れども關東州の地は永く清國の有にあらす、光緒二十四年清國は旅順大連の兩地を租借し、其の地は俄に清國の風起るに及び、露國辭を設けて俄に清國の地を租借す。此の地に置く、光緒三十年(明治廿七年)開くや、我が軍同年五月二十一日山を陥れ即日軍政署を設置す、是處を我が租借地となり、(明治廿八年)五月關東州民政署金洲支署を置く云々

實に金洲は我が日本帝國にとりて再三の苦き經驗を持つところであつて、忘れんとして忘るゝことの出来ぬ土地である。かゝる歴史ある金洲に内地寺院一ヶ寺を有するその金開寺が古義眞言宗高野山である事は予にさりて此上も無い快感をとつた碑であるが、これも又其の裏面にけ見逃すことの出来ぬ菅野師の努力のあることを忘れてはならぬ。

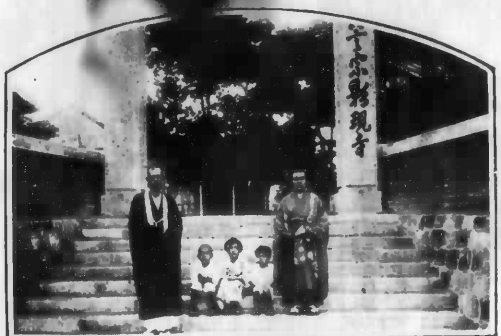
予は金開寺が狹隘なるの故を以つて篤信稱に見る同寺總代向井友次郎氏邸に二月廿七六月九日乞はるゝが儘に金開寺入佛供養の導師をつとめ、つづいて一場の講演をした。創立寺院の願文は菅野師によりて奉讀せられ、式案としては旅順大連より高比良師、戸田師、野田師、茂木師、北川師、高祖師、藤岡師等、参列の人々は民政署員、滿鐵社員、金洲在住町民等は勿論、遙るゝ大連大聖寺婦人會員數十名、三十里保よりは野田氏夫妻應々隨喜奉詣せられる等數百人の出入にて金洲近來の盛會であるとのことである。予等一行はいよいよ滿洲最南端の大連に軍を下りめることになつた。連戰連捷は行かぬが多少とも成績をあげ得たと思ふ自信はある。若戰蓋聞と迄は無くとも、毎日何時間と云ふ乗車三二ヶ所の調査三二回の布教講演とは平凡人の子にはかなりの重荷であつた。身體の重量が二貫目餘り減少したには驚いた。

遊覽不足、三云ふ勿れ滿鮮對所もつたない程の厚遇を享じて居る。多少の疲勞は感じつつも働くに云ふ事は愉快なものである。向井、土屋、須藤、内海の四氏は大連を見送つて呉れて手廻り萬端の世話をして呉れる、これも全く弘法大師の御徳の陰にかくれて居ればこそと思ふ時想はす

南無大師遍照金剛  
大師の御名を唱へるゝ大師の末徒として自分の力と待遇を併せて考へか時に高祖大師に感謝の念無きを得るであらふか、願くは時を反省して見たいものである。

大連には大聖寺金剛講員の多數が出迎へて呉れて居る。自動車は一直線に振津町の大聖寺即ち高野滿洲別院にまで走つた。大聖寺は大連の中央で地の利を得て居るか、いささか狭少の怨みはある。若草山西本願寺の境内は一萬餘坪、本堂は十六間四面、庫裡客殿もそれによさしいものである。東本願寺は若狹町に目下建築中、豫算十八萬圓二階堂の本堂、地下室は會館として公開するとの事。高野山滿洲別院も昭和九年を期し豫算七萬圓にて本堂改築の事を監督菅野師並に總代人各位は予に誓はれた。實は一日も早く完成して南滿洲の數田開拓に努力せられたきものである。

### 旅順影現寺支部



影現寺

- 一、創立者 福島仁禮師
- 一、住職 菅野覺師
- 一、主任 北川覺師
- 一、沿革 明治四十四年福島師旅順に開教し同年十一月大師教會支那設置大正元年寺號を公稱して影現寺と言ふ二世上田智龍師三世北垣防眞師を経て第四世菅野師に至る境内に三十三所觀音及八十八所無量觀音を奉安す敷地三百六十坪、庫物本堂庫裡七十餘坪なり境内安國の八十八所は近年の中旅大の道路に設置し大師の傳印を數世せんとする計畫なり
- 一、總代世傳係 大西重次郎、東原英夫、那須徳吉、松岡新造、石井水一、村田秀男、下道作松、岸本實吉等諸氏

六月十一日は陸軍の節句支部人は焼餅様の大小いろいろの樂器をもちひて終日「チヤカボク」をまわひて居る。聞けば靈廟を排ふこの信仰からである。六月十二日沙河河大徳寺に行き高比良師の案内で寺内並に兩隣道沙河河工場を一覽。沙河河大徳寺に

高比良眞徳



大徳寺

- 一、創立者 高比良眞徳師
- 一、住職 同 師
- 一、沿革 大正二年八月高比良師同地に大師教會大連支部沙河河布教所として創設し後大正三年十二月本堂建築大正十年十二月九日寺號を公稱して新高野山大徳寺と號す大正九年一月本堂庫裡改築し現在敷地八百五十二坪建物本堂庫裡合して百五十七坪四合二勺何れも煉瓦造なり
- 一、功勞者 高比良光顯現任總代北川茂、江頭光太郎、百崎佐夫、等諸氏

明正四十五年高比良師の創立にかり本堂九十六坪、庫裡六十一坪四合二勺煉瓦造、價値徒に約三百餘兩有望なる土地である。猶高比良師は大徳寺所別佛堂として大連市外の絶景星ヶ浦に觀音堂一字(拾坪六合五勺)を建立し將來一箇の寺院とすべく目下計畫中である。星ヶ浦は我が日本の鎌倉とも云ふべき土地で、景色は須磨や明石に比すべきミニ、満蒙の高臺若しくは成功者又は遺棄の人々には必ず別邸を造り遊覽するところである。

予は一日小閑を得て伏見觀音堂に小澤太平氏を尋ねた。氏は大連新聞の社主で又熱心なる佛教信者である。特に又其の妻君は弘法大師の篤信者で主人が曹洞宗の家であるにもか、はらず大連大聖寺の弘法大師に歸依して滿洲別院經營には相當盡力すべきことを誓つて居る。氏も又は靈智光院明賢實大師菩提の爲めに數萬圓を投じ、四國靈場八十八ヶ所の土砂を西國三十三ヶ所靈場の土砂を

地に敷きて地鎮祭を行ひ、昭和三年十一月十四日總體佛殿七間四面の觀音堂を建築し、加ふるに三階建の無料宿泊所を設けて社會奉仕を爲す等現代的の活事業をして居る。大陸には又自然大陸的事業を爲す人々のあることは喜ばしい事である。

× × × × ×

十三日には菅野師主催にて夕刻大連に於ける大佛信仰者の爲めに一場の講話を爲すべく大里寺の講演會を開催した。當日五大院長谷川老僧止が突然來訪せられたことは意外で、それが意外なだけに意外に嬉しかった。何分に二ヶ月前に東京の出先きで別れて以來消息のなかつた御互が又しても出先きの大連で廻り會ふことは思へば深縁のあることである。又しても朝鮮京城に相前後して落合ふ日程になつて居るのは重ねの縁で、その日の來るのを楽しんで京城で宿所に電話をすると、今出發したと云ふ後、これは又期して居た丈けに失望したが人間は鬼角豫定外の事が嬉しいので、豫定したことはそれが非常に結構なことであつても左

迄に思はぬものと見ゆる。予等の一行がいよ／＼滿洲最終の旅順に向ふことになつたのが六月十四日。汽車のすゝむにつれて左右の山々を見れば、大小無數の山には林の如く記念碑が建てられて居る。此の記念碑のある所は、いづれも後叙のあつた跡であるかと思

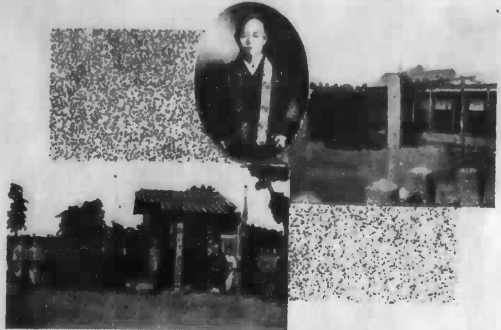
東葉大徳教會支部



- 一、創立者 富田隆榮師
- 一、支部長 同 師
- 一、主任 松本眞男師
- 一、會計 濱口長生氏
- 一、沿革 大正十五年創會立
- 一、功勞者 松本友三郎、濱口長生、中川爲太郎、川原輝吉等諸氏

方魚津大師教會支部

所會教



關係者一

- 一、創立者 故藤 智延師 故合田榮吉氏、故平松辰廣氏、松岡傳吉氏、七田 謙吉氏、鈴木實治氏、浦地淺太郎氏
- 一、支部長 砂濱善海師
- 一、沿革 大正四年三月鎮海支部より補師を迎へて教會所を創立し同六年六月五日監誓官職より認可を得、留來苦心經營敷地四百十坪と建坪三十六坪五合を新築して今日に至る昭和九年大正千百年師遠思迄には本堂を増築して寺職公開出版の議定、支部長は初代福智延師二代郭眞海師三代砂濱善海師なり
- 一、功勞者、前記發起人の外合田勝夫、武田文秀、三宅伊之吉、小川鶴吉、水山英一、安藤保太郎、合田クワリ、齋地ワメ、武田ヤス等諸氏

へば身軍にを生ずる思ひがする。聞くならく朝鮮滿洲戰線保存會にて記念碑を建てた費用が約四拾萬圓、我が帝國が滿鮮の土地に幾多内灘の犠牲をはらつて居る、これはこれ丈でも想像が出来る譯で、國民はこれを強記して置かなくてはならぬ。旅順の停車場は存外小い、先づ片田舎の停車場とのまゝである。譯には旅順高野山影現寺事務主任北川實彌師總代大西那須、子迫、岸本、石井、佐々木、加藤、小田島等諸氏及び婦人會連中の出遣、先ず高野山の懷徳たる驛前の福壽館に少憩し、子迫、岸本、白氏に案内せられ水師營、松樹山、盤龍山、窟冠山、白銀山等順次各砲臺の戦死者を回向した。先づ自働車を水師營會見所にさゝりて、乃木スタツセル南將軍の會見所を見た。云ふ迄も無く水師營會見所は支那人の一小民家であるが日露戰史の上には大なるページをさめてゐる顯著なる土地で明治卅八年一月五日我が攻圍軍司令官乃木大將と露國東軍司令官スタツセル中將と會見して旅順開城の議定書に相互調印せられた所である。番人の某氏は弘法大師の熱心なる信者の一人で予等一行に水師營の歴史を説明して聞かせ併せて予に記念の染筆を乞はれた。生來墨筆の予もこの時は筆榮ある記念として「靈思無二」の四文字を認めて辭して去つ

たが、數十年後の今日猶彼我兩將軍水師營會見の場に臨めば知らずして憐れた、す心地がする。自動車をあぐらして松樹山、盤龍山と順次視察し回向した。旅順の砲臺は、乃木大將が二〇三高地の詩に、  
屍山を埋めて山形改まら  
と讀まれた如く、屍山血河漸く占領した世界戰史に著名な砲臺で特に東窟冠山二〇三高地には苦戰の跡のいぢぢらしいものがある。  
旅順戰線案内記の一節に  
我が歩兵第四十四聯隊が東窟冠山の攻撃に勝ること、なつて八月十九日に行動を開始し、先づ一個大隊を砲臺にかけて突進せしめた所忽ち堅牢なる鐵條網に遮断せられ、而もそれには電流が通じてあつたから歩兵としては一歩も前進することが出来な、幸に工兵の援助を得て未明前に鐵條網を破壊して再び外灘の胸壁に飛び上つて日軍旗を樹てたが忽ち猛烈なる敵の砲火を浴せられて瞬間に一個大

甘浦大帥教會支部

長部支山福



所會教

- 一、創立者 福山寛憲師
- 一、支部長 岡師
- 一、敷地 五百五十二坪
- 一、建坪 三十八坪
- 一、沿革 大正十一年十一月福山師甘浦浦に駐在、松井口、楠井、松岡三氏の援助を得て開口一間を興行三間の魯家となして高野山甘浦支館を設立し同年十二月十三日附認可大正十二年三月六日附を以て高野山金剛峯寺より高麗大帥像一軀甘浦支部本堂として附せられ同年四月興行三間の増築をなして假本堂となり同年七月令元期氏より本堂敷地として二百餘坪の畑地を寄進せられたるにより松井口清水太郎翁の特別遠力により寺院建築の計其なし大正十五年六月着手昭和二年八月本堂二十五坪風程十三坪を新築修繕せり(該畑地は不備の爲別に現在の敷地五百五十二坪を求めて今四氏寄進の土地は支館財産として保存せり)
- 一、功勞者 總代松井口清太郎、松井吉二郎、楠理生、松岡益太郎、世話人秋友野別駕信家、松岡ハチ、榎本キツ、藤田シヅ、建部功芳、總代水島乙松、世話人小川米夫、李道第一郎、山本小八、篠内爲助、山田貞八、傍後榎本貞、伊藤伊勢松、今元元助、大田芳太郎等諸氏

釜山金剛講員



横井と金子  
有光ウラウ  
熊野キク子  
山下 太助兵  
田中セツ子  
浅野野呂一兵  
横井フキ子  
田中フナ子  
倉島コハヤ子  
昭和四年六月二十五日軍  
財務部長釜山車頭にて迎  
の記念撮影

の勇士は全滅した。遂に二十二日に至つて地攻撃中止の命令が降り、戦術は改まつて専ら溝道を開鑿する。こゝなり、九月一杯は砲臺に向つて約四千メートルの距離が掘られた。十月の初めに我が砲臺の先頭が砲臺の外郭に接近すること約五十メートルなるに従つて敵の砲臺は彌々猛烈となり、同時に地盤が硬度の硬石層なるので溝道作業が容易に進まない爰に溝道作業を一變してトンネルを穿つ事になつて、三十二メートルの地下道を開鑿した時に露西側からも地下道を開鑿して來り音響が手に取る如くに聴へたのである。果せる哉十月二十八日午後一時を期して露軍は我軍のトンネルの上部三、四メートルの地點を爆破して、我軍の孔道作業を封鎖せんと試みた。折角の作業を破壊せられた四十四聯隊は奮然として露兵を撃退して彼れ等の逃げ込むた壕壕内に大きなダイナマイトの爆弾を投げ込む。これは同日夜九時の出來事である更に同夜の午前一時に大爆弾を投げ込む處だ敵は機關銃を連發して大に抵抗して來るので、我軍に於ては更に激情のダイナマイトを装填した巨大の爆弾を投げ入れた處怒り天地に轟く大音響と共に砲臺のカポニエルに五メートルの大穴が穿いた。そこで此の穴から色々の雜物を詰め込み之に石を注入して敵の胸内部に火を放つた。敵は思ひもよらぬ火責に會ひ恰も焼し立てられた穴の裡と同様の窮境に立つた際我

軍は砲臺の外郭の東隅の一部を完全に占領した。その翌日以來彼と我とは或は白兵戦或は手榴彈の投げ合ひなき同夜に小ゼリ合をして、この戦が所謂東嶺冠山北砲臺の地下戦である云々。  
かくの如くにして彼我の軍隊は野壕内で土壕一ツを隔し一ヶ月餘も對戦したのである。又二〇三高地に於ても露軍の戦闘記録に兒ると、

x x x x x

十二月五日には實に二〇三高地の陥落は愈々免れ難い運命に切迫した。此の日の開戦で、日本軍は斜面全體を悉く占領し絶頂まで漸進した。然し絶頂又は或は日本軍の手に歸し、或は我軍(露軍)の手に戻り、双方の奮闘數十回に及んだ云々。

土壕一つ隔て對戦し又は手のさぐく僅々十メートル内外の土地を數十回に亘りてやりとりしたその激戦の跡は二十五年後の今日猶まざく一目に見る心地がして胸はせまり喉の聲は次第く涙のまぢるものがあつた。

予等一行は午後も又子泊岸本二氏に案内せられて二〇三高地の戦蹟を訪ひ、幾多戦死者の英雄を慰めたが旅順の一本一草は悉く涙無しに見聞することは出来な。就中二〇三高地約一丁餘の松林の中に乃木大将次子保典少尉戦死の場、乃木將軍景仰會が建て、ある記念碑と、二十五年後今猶春夏秋冬氣候の變化と共にちみ出す二〇三高地の彼我戦死者の油と、雨の度にこぼれ出ず砲臺の破片と戦士の遺骨——何でこれが見聞する人々の身に粟を生ぜしめば置くことが出来やうか——、乃木保典少尉の記念碑に。

明治卅七年十一月卅日乃木將軍次子保典君此の所に戦死す。是子中尉勝典君兼に金州南山に歿す是に於て勝典君のみならんやと時人少尉の爲めに墓を此の地に建て、哀弔す。四十一年十一月將軍通來り視て曰く、旅順の後戦死者の骨獨君兒のみならんやと遂に命じて撤去せしむ、聞くもこの歌歌せざるはなし嗚呼一は建て一は撤す、其の情状義世教に關するあり、本會或は將軍の首に遺はんことを恐ると雖唯嗚呼春夏秋冬其其其蹟と漸く埋滅せんことを、因て石に題して以て來茲に傳ふ。大正七年九月

旅順乃木將軍景仰會

保典乃木少尉の記念碑此の記事を仰ぎ見て涙無きを得る者が幾人あるであらうか。予は生來かつて感し得なかつた一種別種の感

釜山重平町ニ於ケル金剛廟員



北原トヨ子  
行武 久喜氏  
平木ミサヲ子  
大橋ハツ子  
行武マホ子  
行武彦次郎氏  
河原トヨ子  
行武エノ子  
北原 仙津氏  
清武ヨコ子  
平木 三郎氏  
昭和四年六月軍需財務部長  
滿鮮視察の隊選送の記念撮  
影

に打たれた涙諸共に一巻の理連続と光明真いとを鑑して  
今更の如くに乃木將軍が貴通尋常の士にあらずして佛陀  
の化身であることを痛感した。

予等一行は六月十五日午前十時釜野開教監督の案内で  
二萬〇三百三十二人の陸兵三千八百五十一人の歩兵との  
遺骨を阿つてある白玉山納骨堂並に忠魂碑に参詣して古  
義眞宗々徒を代表して遺體回向をした。白玉山納骨堂  
並に忠魂碑は東郷、乃木兩大將提唱の下に有志の義捐は  
勿論、文武自官の献金によりて建設し(豫算二十六萬圓  
石黒博士の設計)明治四十一年十一月二十八日伏見  
宮内愛親王の合臨を仰ぎ東郷、乃木兩大將の手によりて  
除幕落成式を舉行されたものである。午後旗願高野山影  
現寺弘法大師降魔法會、つづきて一場の講演、聴衆は數  
百人、予等がいつれも熱心であることは、布教當局の開  
教政策獨立の上に大なる参考であらふと思ふ。

釜野、子迫等氏に見送られて隨處一層朝鮮へも出發した。岩陽驛にて當地篤信者の送迎を受け汽車の乗降萬端の都合にて三度幸  
又金剛寺に入り、在廟井上總商夫妻の款待を受けて六月十六日午後十時に朝鮮新嘉洲に着いた。往旅の所感と歸途の風景とは、

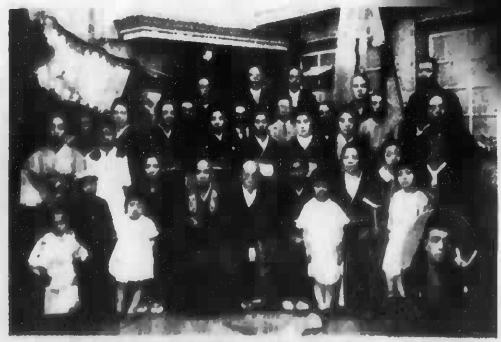
物そのし...  
く日本にか...  
予は六月十七日

奥等の諸氏と會見  
月十八日の午前九時  
十名が出席へて呉れ、釜山支那...  
釜山支那...  
二十年来かつて開催したことの無かつたと云ふ古義眞宗としては朝鮮開教史  
上一新紀元を劃すべき重要會議、これが予等一行の滿鮮視察調査の副産物であ  
るとすれば視察も又無意味では無い。議題は

- 一、公稱寺院及び教會所財產査定ノ件
  - 一、御遠忌寄附勸募ノ件
  - 一、昭和四年度京城ニ於テ全眞宗大會開催ノ件
  - 一、朝鮮全道眞宗寺院教會所ニ學民學堂設置ノ件
  - 一、在鮮僧侶牧養ノ件
  - 一、開教補助金増額ノ件
- 以上

出席の開教師は、群山小野 齋實真時、太田瓜川、井邑松木、金堤石田、新義  
洲伊藤、浦頭藤本、鎮南浦渡邊、定洲本間、江京山口、釋里小西、密陽南奉、  
烏致院谷、平壤内地、仁川國本、永登浦掛川、水元津山、嶺山左近、元山境、  
甘浦福山、龍山河原、等二十餘人であつた。

山大師教會釜山支部



世請人 支那重慶債債諸兵





予等の一行は六月十九日朝鮮總督府事務課長庄司、柴田二氏と龍光寺にて會見し朝鮮に對する開教團體化事業等に對して意見の交換を爲し續いて總督府土地改良部長松村松成氏と會見した。松村部長は大學を卒業する三同時に和歌山縣廳に奉職し在職六年後に朝鮮總督府に轉任した人で高野山に對する理解もあり弘法大師に對する信仰も持つてゐる將來有爲の人物であつて特に朝鮮人の教化内鮮の融和と云ふ事には力を傾けてゐる人である。幸や朝鮮全道には松村部長の理解ある大師信仰熱は何等かの形式に顯はれて鮮人教化に資する點も多し事であらふ。

予は薄、庄司、柴田、土肥、堤、伊藤、河原、掛川等諸氏に連れられて龍山を發し尾池理事と共に釜山へ向つた。夕刻釜山に着けり國府、小原、北島、福島淺野間、野本、廣中、濱口、土井、松本等の諸氏並に大倉町の金剛職員は停車場に出迎へ再會をよごんで呉れる。就中淺野間、山下、横井、有光、熊野、田中、餘島等諸氏の率ゆる金剛職員が多数に出迎へて金剛山の詠歌を奉詠して迎へて呉れ予等は一入と雖しく、且つ又時ならぬ出來事に降車の乗客は多く歩をミダめて無信仰の人々と結縁をした。釜山に一泊と云ふ信者と東萊迄是非にと云ふ東萊支部の會員と意見は容易に一致しなかつたが、釜山へは兩三日後と云ふことで自動車は飛ばして東萊温泉鳴戸旅館に着いて久々に滿鮮のつかれを休めた。特に土井高

てゐるから赤化防止は容易でないこと、これも國家の病ひである、我々傳教徒の努力すべき重點である。朝鮮の山は禿山畑は荒れ遊民は多く財政はすたれ何等とる所の無い國であるが、聞けば其の弊は政治にあると云ふ然るに朝鮮對所に韓政の弊はある何故に韓政がしかれて國が荒れたのであらふか、美馬部長の話では郡守の爲めに韓政の弊を遂ぐる人民が其の人が任地を換へた時にはその善政の碑を破壊して送りさげたと云ふこともあるが、事で善政の碑も餘りあてにはならぬ。形式に重きを置き過ぎる國民の末路は氣の毒なものである。我々も相互に注意したきことである。形式を離れて精神は無いが、精神の無い形式は無意味であり有害である。

東萊は釜山港を去ること三里朝鮮唯一の温泉で、内地人約九千人鮮人一萬七千餘人、獨立思想の盛んなる土地で教化の尤も必要なる土地である。教會所は西本願寺一、高野山一、智山派一、基督教一で、我が高野山大師教會は松本氏が事務主任で濱口長年氏が會社主任である。

東萊温泉鳴戸鎮の別館に滿鮮のつかれを流した予等一行は六月廿三日陸路二十餘里を自動車に乗りて方魚津大師教會支部に行つた朝鮮全道は三千年來の早鮮民の多くは開屯や水汲や見るも氣の毒な有様、方魚津支那支隊移住所山迄出迎へて呉れた、蔚山は加藤清正が三萬征伐の時に築城したと云ふ土地で鮮人の内地化は又格別朝鮮の民さ思へぬ程である。自動車の方魚津につけば傳習場には薄池、松岡、合田、武田、鈴木、三宅、小川、水山、安藤、大西、鹿島、楠木、長町、香川等の世話人合田、菊地の傳教師人會長、其他衣笠、岡崎、詠歌歌神、金剛職員、婦人會員等は今年還しを待ちかゝられてゐる。初對面とは思はれぬ程の親しさをもちて迎へて呉れる信仰の友と共に高麗大師の御法樂を寫しつゞきて晝夜一層の禮讚、記念の攝影、禮讚の後では是非共坊邊回向と云ふ願を述べたに少々困らなくもなかつた何事も結縁やさ決心して詠歌を唱へて同唱した。夜はふけて午前十時になつたが熱心な信者の力であつたか變へず、波の音を聞きつゝ、聲に就いたのは夜もふけて渡つた二時過ぎ明草上ならぬ予にも二ヶ月有餘續れて合はぬ友に二三日中に此の波の彼岸や會ふ樂しさを思ひつゝ、眠ることもなく眠つた。明け六月廿四日海をへたて、彼方には内地が見ゆる心地がする、菊地氏の説明を聞けば教會所は創立は大正四年三月、信徒七十餘人會員若干、敷地は四百十坪、家屋一棟創立者は福智閣開平

の灌漑支部長は第三世是非共二二年の中に寺號公稱したき希望あり。予は切に理想の實現を祈つた。

予等一行は前記出迎の齋氏に送られて釜山に自動車と飛ばす。思ひは三度會ふ釜山の人々の上に、蔚山での噂に釜山は火車 所は 郵便局の附近に國光師に釜山郵便局の所在を聞けば大倉町ミの事、若しや釜山上陸の際に一夜を過した北島居士の邸の附近ではある まいか——さぶひつゝ釜山港につけば北島居士の邸宅は焼失せりミの事、藤かまばかりに驚いて早速に回廊を訪へば餘炎はいまだ衰 きや煙の中に僅に残る北島家、人生は露の如く又電の如しミはかねて聞きもし人にも説示せる言の葉なれど今正しく二ヶ月前三日 前に釜山脚に出迎へられて行李を預け又二度一夜の宿を乞はんものと思ひつる家が昨夜半煙と雨へて今や僅に残るは燒木のみ——、 有縁縁起りがたきは人の身の上せめて身にづゝかなりし事を説いて慰めの言葉にかへ一度釜山教會所に落つきたれど落つかぬもの は吾が心ばかり、三度釜山に行きて新設教會所の協議——彼れか此れかと思ひし事も今は水泡に歸して何をとする力もなく、せめて及 ばぬ儘も町の附近を任まつ戻りつゝ二度仙渡氏を力に相つれたらち北島氏を訪へば、さすがは平素信仰篤き北島氏は不幸は不幸、災難 は災難として責備はせめて釜山の八々に信譽増の爲めに講演をこのこ——予は小原、仙波、野本、酒井、金澤、天野、宮島、木 村、和出、山川、白石、柴崎等諸氏の好意も眞一文字に受くる勇氣も無く氣の抜けた風船玉の如く、僅に上西氏が釜山高野山南鮮別 院新設の爲めに寄附すべき由申出られたる水昌町の土地を見上西氏を訪ひて六月廿五日いよく關釜連絡船に身を任せて朝鮮を辭し たのは昭和四年六月廿五日。見送りの人々は、小原、仙波、國光、福島、淺野間、山下、野本、金澤、阪井、横井、有光、熊野、田 中、餘島等諸氏數十人、嗚呼韓山よ、信仰の友よ。淺野間師等は予に贈りて

別れては又會ふこの——詠歌奉詠

再會又いづれの時ぞ、莫は神興佛陀諸禪師の爲めに加護を垂れさせ玉へミ祈るのみ。

南無大師遍照金剛々々

### 滿 鮮 教 會 誌 (完)

昭和四年十月 廿 日印刷  
昭和四年十月廿五日發行

#### 【發賣處】

- 和歌山縣伊都郡高野山 古藏眞言宗々務所
- 編 者 草 繁 全 宜
- 和歌山縣伊都郡高野山時報社
- 發 行 者 吉 川 法 城
- 大坂市北區天神橋筋六丁目三七
- 印 刷 人 佐 々 木 吉 治
- 大坂市北區天神橋筋六丁目三七
- 印 刷 所 頁 文 印 刷 株 式 會 社

高野山 時報社 版權所有